

返すと、今度は、閉ぢられてゐた目がかつと見開かれると共に、少尉を射竦めるやうに睨みつけた。彼は、その目に威壓されて、這這の體で艦長室を飛出し、當直將校にありのままを復命すると、當直將校は暫く腕を組んでゐたが、やがて

「君はまだ若い。君にはまだ艦長の氣持は分らんだらう。然し、安心せい、戦争は勝つたぞ。敵はまだ二百哩も先きにゐるんだ」と微笑しながら云つた。

「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出勤、之を撃滅せんとす、本日天氣晴朗なれども波高し」と旗艦三笠から東郷司令長官が大本營に宛てた有名な電報はこの時打たれたのである。

かうして聯合艦隊が根據地を出發したのは午前七時であつた。――

「敵艦見ゆ」といふ警報電報を初めて打つたのは假裝巡洋艦信濃丸だつた。その時は午前四時四十分であつたが、最初に信濃丸が朧にかすむ月光を透して發見したのは、三櫓二煙突の大汽船で、檣頭に掲げてゐる白紅白の區別燈で、それを敵の病院船と認めた。その時は午前三時三十分だつた。信濃丸がその船を臨檢する爲めに、速力を早めて近づいて行くと、彼我の距離が約二百メートルになつた時、彼の船は信濃丸を味方と見過つたらしく、電燈信號で信號を始めた。その頃や

うやく空が白み始めたので、おぼろに敵船の甲板の上の物影が見分けられるやうになつた。

そこで、信濃丸が臨檢の爲めに、端艇下方の準備を整へ、將に停船命令を發しようとした時、信濃丸の遙か正面――右舷艦首から左舷後方にかけて、大小數十隻の軍艦がほぼ二列縦隊の形を作つて進んで來るのを發見した。その最も近いのは一千メートルぐらゐであつた。信濃丸は、知らず知らずの間に、敵の艦隊の列の中に飛込むところだつたのだ、否、殆ど飛込んでゐた。古い言葉で云ふと、『進退維谷』の窮地に陥つたのだ。然し、哨艦の役目を持つてゐた信濃丸は、これも古諺語を借りて云ふと、『不入虎穴不得虎』で、知らず知らず役目を果すに最も都合のいい状態に置かれた譯でもあつた。勇敢な信濃丸の艦長は後者の機會を掴まうと考へた。彼は早速右十六點の回頭を行ひ、全速力で退却しながら無線電信機のあらゆる機能を働かして、『敵艦見ゆ』の警報を打電した。――それが午前四時四十分である。

この信濃丸の無線電信で、出勤中の哨艦は云ふ迄もなく、根據地に待機してゐた艦隊は、旗艦の命令で、各豫定の策戦に従ひ、行動を開始した。中にも、哨艦として當時五島の北方に派遣せられてゐた巡洋艦和泉は、その速力鈍く、その備砲弱きにも拘らず、信濃丸の無線電信を受ける」と早速行動を開始し、午前七前頃、五島の北西約三十五ノットの邊で、前方遙かに、信濃丸が見

たと同じ、ほぼ二列縦隊の形を作つて進んで来る、敵の全艦隊を發見した。敵の方でも和泉の姿を認めると、直ぐに砲門を向けて打つ準備はしたが、この日濛氣濃く眼界狭く、漸く五六ノット位しか展望がきかない。その事は和泉にも都合が悪かつた、何故なら敵艦の様子を委しく知る爲めには、五六ノット即ち八九千メートル位まで近づかなければならない、八九千メートル位の距離に近づけば和泉のやうな小艦はまたたく間に撃滅されてしまふからだ。然し、和泉の艦長も、信濃丸の艦長に引けを取らぬ、否、それ以上の猛者だつた。彼はその八九千メートルの距離まで和泉を近づけ、雙眼鏡を目に當て、敵の艦數を數へながら、心に思つた。

「我が艦隊中で、今、敵に最も近づいてゐるのはこの和泉だ。我が艦がこのまま退却したら、他に敵艦隊の様子を我が主力艦に知らすものはない。たとひ和泉一隻なくしても、敵の艦隊と離れる事は斷然出来ない。最後の手段は衝角突撃だ！」さうして、彼は、敵隊を左舷に望んで自艦を進めながら、敵の勢力、陣形、速力、針路、時間、等等を、刻刻、無線電信で、主力艦隊に通報した。――

寺内少尉は、その前の前の年、明治三十六年十二月十四日、海軍砲術學校を卒業すると共に、

少尉候補生に任ぜられ、翌明治三十七年二月、實地練習の爲め練習艦に乗り、横須賀軍港を出發する事になつてゐたのであるが、――彼及び同期の候補生達を乗せた練習艦は、十二月四日、江田島を出發し、吳、佐世保、長崎、竹敷を廻つて、翌三十七年一月五日、横須賀に入港した。そこで遠洋航海に出發する迄に候補生達は一晝夜の休暇を貰つたので、寺内も、その日の午後東京の親戚の家に暇乞ひに行き、翌六日、定められた時刻に各練習艦に歸つて行くと、突然「候補生呼び」の號音に、呼ばれた場所に行つて見ると、艦長が手づから一同に辭令書らしいものを渡した。これを見た一同は互に顔を見合せて暫く言葉が出なかつた。遠洋航海が中止になつて、當時既に佐世保に集つてゐた聯合艦隊の各艦に配乗を命じた辭令書だつたからである。さうして新候補生達は、二月六日、遠洋航海ならぬ航海に旅順港指して出發した。その時、寺内は二十二歳であつた。

彼等が目ざす旅順港外に着いたのは、二月九日だつた。寺内候補生達が乗つてゐる第一戦隊と別れて急航前進した第三戦隊が、午前十時頃、旅順港外の偵察を遂げて歸つて來た。その報告は「敵の大部分は港外にあり、我れ七千メートルまで近づいても砲火を開かず、敵艦數隻は昨夜我が水雷に罹りたるもの如し、これを攻撃すること利ありと思ふ」といふのであつた。

この報告に勇氣を得て、聯合艦隊は速力を早めた。暫く行くと、東の方に、旅順の方を指して航走する汽船を認めたので、軍艦高砂を遣つて臨検させると、露西亞の汽船マンジュリヤだったので、早速それを捕へた。かうして、聯合艦隊は、午前十一時頃、旅順口の南東約二十ノットの位置より回頭し、針路を北西に定め、旅順口外に進み、正午近く、各艦ごとごとく戦鬪旗を掲げた。さうして、暫く行くと、黄金山下に敵艦の竝んでゐるのを發見した。

驚いた、と云ふより、滑稽だつたのは、敵の艦隊が、我が艦隊を見ると、文字どほり周章狼狽し或ひは拔錨して逃支度をするもの、或ひは港口さして走り出すもの、最も滑稽なのは他の軍艦の後に隠れようとするもの、然し稀に我が艦隊に向つて進撃の姿勢を取るものもあつた、又、中で哀なのは、レトウキサン、ツレザキツチ、バルラダ、と、もう一隻の軍艦が昨夜の魚雷攻撃の爲めに爆破せられたらしく、檣を横に艦腹を波の上に表したり、艦尾が波の中に没し艦首が波を離れてゐたり、殆ど航海能力を失つてゐる事だつた。又、呑氣とも何とも云ひやうのないのは、既に國交斷絶し戦時状態になつてゐるのに、各艦の塗色が一定せず、或ひは平時の塗色のもの或ひは戦時の塗色のものがある事だつた。——
ちやうど正午頃だつた。旗艦三笠の檣頭に一旗の信號旗が擧つた。それが、

「勝敗の決、此一戦にあり、各員努力せよ」と云ふのである。

この信號は、各艦の前艦橋より傳聲管を通じて、各砲臺に傳へられた。寺内の受持の十一番六インチ砲圓隔壁の傳聲管に耳をつけ、その後の信號文を聞いた一水兵が大急ぎで彼に云つた。

「分隊士、分隊士、唯今東郷長官より艦隊全員へ、『勝敗の決は一千二百メートル』と、終り。」

これを聞いた寺内候補生は驚くまいと思つても驚かない譯にいかなくつた、何故なら、豫て彼は砲戦距離は普通七八千メートルから、最も接近した場合でも四五千メートルを越えないものと教へられてゐたのに、今度の戦争が如何に危急存亡の大戦であるとは云へ、開戦最初の戦争に一千二百メートルの近距離で砲戦するとは、今日は如何なる大血戦が行はれるだらう、と決死の覺悟をしなければならぬ程、驚かされたからである。ところが、後でそれが誤報と分つて、一旦死ぬ覺悟を極めた彼も心の中で胸を撫で下ろした。

この日、陸地の方は薄い霧がこめ、海上も風が靜かで波は穏かだつた。そのうちに、彼と我の距離は一萬五千メートルに迫つた。雙眼鏡で見ると、戦艦、ペトロ、セバスト、ホルタワ、ペレ、ボペエダ、ツレ、レト、巡洋艦、バヤアン、チイヤナ、アス、ボヤリン、ノオキツク、假裝巡洋艦、アンガラ、その他砲艦、驅逐艦等が頗る混亂した隊形で現れた。これを見た我が艦の總員は

期せずして萬歳と叫んだ。

我が艦隊が旅順港口から一萬四千メートル邊に來た時、黄金山の頂に黒煙が立つたと見ると、三笠の艦首から約一マイルの眞横の海上に、大きな水柱が二本立つた。が、我が艦隊は應戦しなかつた。彼我の艦隊の距離が一萬メートルになつた頃、敵の艦隊が砲火を開いたが、我が艦隊はこれにも應じなかつた。その頃から、敵の艦隊は陸上の砲臺と協力して我が艦隊に當つたが、亂射亂撃で皆照準を過り、多くは我が艦隊を越えて半マイル餘の海面に落ち、大水柱の林を作るばかりであつた。それでも我れは應戦しなかつた。

その間にも、傳令の叫び聲は刻々と距離の接近を報じた。一萬、九千五百、九千、八千五百、八千―この時、我が第一戦隊は針路正西に回頭し、敵艦隊と並行した。それと共に三笠の前部旋廻首砲が各一發の初弾を發射すると、今まで堪へてゐた各艦は、殆ど一齊打方を以て猛射した。それと共に我が艦隊はますます速力を早め、約五六千メートルの近距離まで進んで港口に迫つたので、敵艦隊はますます狼狽しますます陣形を亂した。反對に、我が射速度はいよいよ急になり、不斷の修練を此時とばかり發揮したので、時の移るのも知らない程だつた。その爲めに、敵の艦隊は、次第に港口に退き、港内に逃げ込んだりした。

が、我が艦隊は、要塞や砲臺相手の戦争の不利な事は十分知つてゐたので、深く追撃する事を戒めた。零時半頃、三笠が先づ打方を止め、左舷に回頭し、第一戦隊の諸艦も皆それに倣つた。ところが、寺内が乗つてゐた第一戦隊の殿艦初瀬が、前續艦敷島の航跡を辿つて、戦線を去らうとした時、不意に港口にゐた敵の數艦が殿艦の初瀬を目掛けて砲火を浴せた爲めに、飛弾が艦尾に無數に落ちたので、その邊に水柱が林立し、その爲めに稍暫くの間敵の影が見えなかつた。

その時、寺内は受持の、砲尾の左側に立ち、砲門を透して彈着を監視してゐた。ところが、軍艦が回頭の際、大砲が次第に艦尾に旋廻し、それが殆ど極度まで旋廻した時、彼は、砲尾と舷側との間に押し詰められ、砲門から敵を窺ふのに非常に不便を感じたので、砲尾を交つてその右側に廻らうとした。その瞬間、その大砲が突然發砲したので、砲身が急に後に下つた。その拍子に、彼は左の股關節をひどく打つて、後部彈臺の傍に倒された。倒された拍子に、その角で、又同じ所を打撲した。その爲めに、痛苦甚しく、如何に努力しても立上れなかつた。

寺内候補生は、この第一戦の負傷の爲めに、内地に歸され、二ヶ月後、當時朝鮮海峡警備の任に當つてゐた和泉に轉任することになつたが、和泉といふ軍艦が最も舊式の而も弱小巡洋艦であ

る上に、その頃は朝鮮海峡の最も風の強い波の高い時で、船の動揺が殊に激しかつたので、二月九日の役に受けた左脚腰部關節内部の痛苦は一層ひどくなり、殊に和泉に乗つてから三日目に日本海の波浪に二晝夜半翻弄された時は、乗船以來一度も経験した事のない船暈を病み、悪熱に苦しみ、食慾がなくなり、遂に血を吐くやうな状態にまでなつた。

遂には、それが嵩じて、繩梯子を攀ぢて檣樓に上る時など、平坦な甲板を歩く時の數倍の勞力を要するやうになつた。それが仕舞には左腰部の骨が痛み出し、その屈伸の自由がきかなくなつたので、腰を伸ばしたまま、両手で堅く繩梯子側綱にすがり、丈夫な方の右足だけで繩梯子を登り降りするやうになつた。そのうちに、その足も疲勞の爲めに蹙み氣味になり、時々繩梯子から離れさうになるので、今度は側綱を握る両手だけで登るやうになつた。然し、そんな困難を忍んで、やつと檣樓に登ると、そこは艦中で最も高い所であつたから、動揺が殊に甚しい。そればかりでなく、濃霧の爲めに、洋服がびつしより濡れ、寒氣が肌を刺すやうだつたので、腰間の患部の痛苦に、さすが強情の寺内候補生も身心共にまゐつた。と云つて、役目で仕方がないから、毎日繩子は昇つたが、非常の用事でもない限り減多に降りない事にして、いつもポケットに入れてある堅麩麵を嚙む事にしてゐたので、食堂の食事を食はない事がたびたびあつた。

やがて、この大役も終つてほつとしたが、それと共に氣に弛みが出たか、竹敷に入港すると、急に患部がひどく痛み出し、次第にその度が増し、遂には、杖を突かないと歩けないやうになつた。初めのうちは、それを人に聞かれると、靴摺れの爲めとか、足の裏の皮を破つてとか答へてゐたが、それも通用しなくなつた。と云ふのは、或る朝、床を離れようとした時、突然足が立たなくなつたからである。さうして彼はたうとう病院に入つた。

竹敷病院長の診察では、彼の病氣は餘程重い、こんな設備の悪い田舎の病院では十分な治療を施しにくい、と云ふので、入院した翌日、彼は看護人に附添はれて佐世保海軍病院に送られる事になつた。さうして、彼はその病院に半年餘りゐた。入院してから四ヶ月目に手術を施された。その頃、陸海軍の戦勝を報ずる新聞號外が始終配達されたので、その度毎に興奮したので、手術後の経過が餘りよくなかつた。それで、一層病氣を重くした。殊に炎暑きびしい佐世保の夏は彼の病氣を一層重くした。

然し、何よりも、彼の病氣を最も悪くしたのは、八月十日の黄海大海戦と同月十四日の蔚山沖の戦報と、その兩戦役後、彼我の戦傷者が續々入院して來た事であつた。古い武士氣質の塊である彼は、戦場で傷ついて苦んでゐる者と、醫者の手で手術されて苦しむ彼自身とを比べて、文

字どほり穴にも入りたい氣持になつた。その事の爲めに、彼は、肉體の苦痛よりも良心の苛責に堪へられなくなり、遂には食慾が減る、興奮の爲めに晝夜不眠に陥る、そこへ炎暑が日に日に加はるばかり、病氣がよくなる筈がない、排膿がひどくなり、瘡面が次第に大きくなり、病勢はますます募つた。醫官は秋になつたら再び大手術を施さねばならぬかと心配した。

ところが、秋十月の聲を聞く頃、寺内候補生の病氣は、大手術どころか、日に日に輕快に赴き、大きな瘡面も殆ど癒着し、十月中頃、遂に退院が許可せられるやうになつた。が、彼が退院をする時、外科長の軍醫中監が「幸ひ君の病氣は殆どよくなつたが、元來結核性の關節炎といふものは頑固なものだから、たとひ全快しても、今後は激しい海上生活は止めた方がよからう、再發せんとも限らんから。まだ若いのに惜しいと思ふが、……」と云つた。

これを聞くと、若い候補生は軍醫中監の前で男泣きに泣いた。それを見ると軍醫中監も同情して、絶対に海上生活を止めよといふ言葉だけは撤回して、「歩くことは再發さす恐れがあるから、少くとも今後一年間ぐらゐ、郷里の田舎へ歸つて靜養したらよからう、世間の事はすっかり忘れて、」と云つた。

寺内候補生は、この上長であり恩人である軍醫中監の言葉に叛く譯には行かないので、退院すると直ぐ郷里の田舎に歸つた。尤も、彼は入院中九月一日附で和泉乗組を免ぜられ、新鋭裝甲巡洋艦日進乗組を命じると云ふ辭令をもらつてゐたので、一旦は郷里の田舎に歸つても、又來る春があるだらうと云ふ慰めがあつた。

故郷の田舎に歸つた彼は、老父母の許しを得て、田舎から汽車で一時間餘りかかるTといふ温泉場で二週間くらしした。この温泉は日本でも有名な瘡傷にきくと云はれてゐる所である。彼は、そこで兎に角十日餘りの日を消したが、或る日の新聞に、彼には恨み骨髓に徹する旅順港が、海陸より次第に攻められ、遂に囊中の鼠同様になつた、陥落は恐らく今年中であらうといふ記事が出てゐるのを読むと、矢も楯も堪らなくなつた。さうして、こんな所で悶々してゐては却つて體からだの爲めによくないと考へた。そこで、早速荷物を纏めて一旦老父母の家へ歸り、老父母親戚知友の反對を押切つて、翌日佐世保に向つた。

彼は、汽車の中で、病氣の爲めに退艦して入院した者が歸艦するには、病氣全快如何なる劇務にも堪ふ、と認めた關係病院長の診斷書を所屬官廳に届けなければならぬ、といふ規則がある事を思ひ出した。恐らくそんな都合のいい診斷書はくれないだらうとは思つたが、當つて碎けると

云ふ事もあると思ひ直し、汽車が佐世保へ着くと、直ぐ海軍病院を訪問して、院長にその事を云ふと、果して退院した時の言葉を繰返すだけで、彼の云ふ事を受付けてくれない。短氣者の寺内候補生は、院長に恩になつた事をも忘れて、

「兎に角、乗艦の手續をして下さらなければ、僕は餓死を覚悟で何時までもここに頑張つてゐます」と口から出まかせの言葉を吐き、椅子に腰かけて、腕組したまま口を噤んで見せた。温厚な軍醫中監は、苦笑しながら、寺内候補生の切なる願ひを聞きとどけた。お蔭で、彼はその翌日佐世保から大連に行く御用船に便乗して戦地に向ふ事になつた。最早十一月であつたから、海の上を吹く北風の、厳しさ、骨を刺すやうな冷たさ、彼は久振りで患部に激しい苦痛を感じた。数日後、船は大連に着いた。そこで、直ぐ運送船に乗換へて、翌日、長山列島附近で日進に乗込んだ。

日進は、七千五百噸の巡洋艦ではあつたが、備砲數、装甲、艦構造等は殆ど戦艦と同じ能力があるので、第一艦隊の殿艦に拔擢されたのだ。不思議なのは、寺内の新乗艦日進は、先きの乗艦初瀬と同艦隊、同戦隊、同艦隊地號である事、そればかりでなく、初瀬乗艦中の戦闘配置が、右舷後部端艇甲板輕砲受持で、遠距離戦闘の際、輕砲がその用をなさない時は、右舷後部中甲板六インチ砲監督の役になつたのであるが、今度の日進の配置もその關係が總て同じである事だつた。

(明治三十八年一月一日、難攻不落と云はれた旅順が開城した。)

却説、日進は、前の年(明治三十七八年)八月十日、黄海の大海戦に、第三艦隊旗艦として活躍苦闘した爲めに、艦人共に最も大損害を被つたのが、まだ完全に修繕が出来てゐなかつたので、寺内候補生が乗つてからも、一度横須賀軍港に歸り、晝夜兼行で艦隊の修繕を急いだ。それに一ヶ月位かかった。その代り、修理の終つた日進は、その戦闘力はその殆ど倍になつて、二月の或る日、鎮海灣に向つた。そこで、數ヶ月の間、毎日、圓筒砲射撃、實彈射撃、合戦準備、戦闘操練、或ひは魚雷襲撃防禦操練、或ひは艦隊運動、荒天運動、或ひは索敵運動、遭遇戦演習、追撃演習等に、殆ど晝夜の別ない操練に技倆と心膽とを練磨して、バルチック艦隊に當る準備をしてゐたのである。

(寺内候補生は、先きに述べたごとく、病氣入院その他の爲めに、數ヶ月公務を離れたので、同窓の候補生達より二年餘り後れたが、五月一日附で海軍少尉に任命された。)

寺内少尉は無線電信の一信毎に胸を躍らした。——それは、彼が半年餘り病氣その他の事故で

公務を離れてゐたから、と云ふやうな生優しい事ではない。普通の海軍士官の場合は、學校を出ると直ぐ實地練習の遠洋航海に出る、それを済ますと、各専門の公務に就く。が、彼の場合は、學校を出ると、いきなり、遠洋航海も公務も飛び越して、實地即ち戦争に出た。殊に彼の場合はその戦争の第一幕に登場した。そこ迄はよかつた。その戦争で不慮の災難の爲めに、海軍士官と戦争に最も必要な體を片端にした。それで駄目かと思つたら、今、第二の好機を掴んだ。先程、當直將校の命令で、「敵艦見ゆ」の電信を報告に駆け出した時は、自分の片端を忘れてしまつた程であつた、「敵艦見ゆ」といふ空然の大戦争を豫想する嬉しさで。――

寺内少尉が無線電信の一信毎に胸を躍らした、と云ふのはこの事である。

「敵艦見ゆ。」

「敵は東水道を通過せんとするものの如し。」

この二信は信濃丸からだ。「占め、占め！」と寺内少尉は口の中で叫んだ。云ひ忘れたが、彼は疝癢持に共通する體格の持主だつた。曰く小柄だ。

やがて午前七時五分。――これから以後は和泉からだ。

「敵艦五隻以上、午前七時、その針路北、東。」

「ああ、懐しき和泉よ、久瀾なり、和泉！」と彼は口の中で叫んだ。彼が半年前文字どほり血を吐く思ひをした艦であるが、今は何といふ有難い艦である事よ！

「敵艦十一隻以上。『ゼムチュウグ』先頭、後尾、病院船二隻。」

午前八時二十五分。

「敵の兵力戦艦五、二等巡洋艦三、その他砲艦八隻以上あり、總數二十三隻以上。他は濛氣ありて判明せず。」

つづいて又。

「敵兵力十五、『ボロジノ』型四隻、『オス』、『シソイ』、『ナヴァ』、『アドミラル・ナヒモフ』、左翼列、『アドミラル・セルニヤアキン』型三隻、『インペラートルアレキ三世』、『オレグ』、『オウロラ』の順序なり、『ゼム』型前衛、後續部隊假裝巡洋艦。」

「おお、可憐なる和泉よ！」若き寺内少尉は叫んだ。「汝、弱小の身を以て、而も小艦を以てして、斯くも詳報し得るまで、優勢なる敵の大艦隊に肉薄續行しつつあるなるか！」

午前十一時四十五分頃。

「午前十一時三十分、敵の先頭艦、若宮島の北、西約十二ノットの所を、針路北、東に

て、北西東微東に進行す。」

と、つづいて、諸哨艦の無線送電刻として錯雑し、先きを争つて報じて云ふには、――

「敵艦隊正午若宮島の北十二ノツトを北平微東一四東に進む。」

「敵針路東北東、展望五ノツト。」

「敵今進路を北東に變ず、敵又針路を變ず、東北東。」

「敵今沖の島の南西約二十ノツト、針路北北東。」

「本艦の位置、今沖の島の北北西約十ノツト、敵艦隊は本艦より南一四西六ノツトにあり。」

「今までは敵の速力十ノツト。」

この時、午後一時五十分。

「斯くして敵は刻刻我の張りたる網に接近する、ああ、愉快愉快、と寺内少尉は心の中で叫んだ。午後二時、旗艦三笠は哨艦隊旗艦嚴島に電命して云つた。

「第四、第六戦隊は敵の後尾を攻撃せよ。」

そこで、朝早くから深く敵の懐に入り、險を冒し難に堪へ、その間にも始終我が本隊と接觸を

保ち、敵狀報告の緊急任務を全うし、爲めに我本隊をして少しも遺算なからしめた哨艦隊は各の勤めを果し、

「各艦、適宜の行動を取れ、」といふ嚴島の命に依つて、それぞれ處定の位置に戻つた。午後二時頃だつた。

我が艦隊では、殆ど十中の十まで、バルチック艦隊は對島海峡（或ひは東水道とも云ふ）を通ると豫定してゐたが、萬が一、太平洋を迂回して、津輕海峡或ひは宗谷海峡を通つて浦鹽に入る計畫に出るかも知れないと考へ、念の爲めに、各艦ごとく石炭を必要以上に（甲板の一部にまで）強載してゐたが、これ等の無線電信に依つて敵が東水道を通ると極ると、最早必要以上の石炭は入らぬ事になつたので、古今東西に嘗てない命令が傳へられた。

「總員、強載石炭捨方！」と云ふのだ。

これは奇妙な命令ではあるが、この場合最も必要な命令であつた。此際、出来るだけ艦を軽くして船足を早くするのは最も重要な事だからだ。それにしても、總員に取つては残念至極な命令に違ひなかつた、石炭の満載すら可なり苦勞な仕事であるのに、強載の苦勞は口に云へない程だ

つた。然し、そんな愚痴を誰一人こぼす者はなく、總員は、文字どほり、勇躍して「強載石炭」を捨てた。

この「強載石炭捨方」が終ると、「總員艦内大掃除」、「兩舷直上甲板洗方」、「中小甲板洗方」、「外舷掛外舷流せ」、「大砲手入」、「小銃手入」、「甲板掃除」、「出港用意」、「出港」といふ順で、我が聯合艦隊は沖の島を目指して急進した。航行中にも數多の仕事があつた。砲臺には彈藥を備へ、艦橋その他の要所へは釣床を縛著し、防彈障を作り、重要品は水線下或ひは裝甲部に納め、甲板各所へは防火防水の要具を備へ、隔壁戸を締め、通信装置を調べ、その他一切の戦備が終ると、最後に甲板を清め滑倒を防ぐ砂を撒く。――

やがて、東郷長官は各艦に向ひ晝食の命令を下した。

寺内少尉の乗艦日進では、晝食後、我が戦線豫定線に入るまで、全員に休養を命じた。寺内少尉はこの時はあの哨艦からの無線電信を聞いてゐる時以上に嬉しかつた。何故なら、出港と共に彼は改めて右舷後部中甲板六インチ砲監督の任を命じられたからである。寺内少尉はこの休養の時間に自分の喜びの外に、心を打たれたものを發見した。それは休養の命令と共に、どの砲臺の兵卒達も各自受持の砲後に配備されてゐる彈丸に蓆を被せ、それを枕にして申合したやうに睡眠

をとつてゐた事であつた。この光景を見た時、彼は切めて先程當直將校が、

「君はまだ若い。君にはまだ艦長の氣持が分らんだらう。然し、安心せい、戦争は勝つぞ。敵はまだ二百マイルも先きにゐるんだ」と云つた言葉の意味が分つて、心の中で「勝つた、勝つた」と獨言ちた。

もう一つ彼が感心した事は、彼がこの休養時間のあひだに彼の所屬分隊の各砲臺を巡視したとき、各砲の動作を仔細に檢してゐるうちに、或る砲の發火電力を試さうと思ひ、身を屈め、砲身の下面と、砲鞍と砲身の間の隙間に、よごれた細長い紙切が張り附けられてゐるのを發見した。よく見ると、それは琴平大權現の護符だつた。それに興味を覺えて、それから、どの大砲も同じ所を見てみると、必ず水天宮とか、觀世音とか、不動尊とか、八幡大菩薩とか云ふ護符が張り附けてあつた。彼は、それ等を見ると、彼のやうな無骨な男でも、譯の分らない感に打たれた。そこで、試みに、目を覺ましてゐた一人の兵卒に、その譯を聞くと、彼は忽ち直立不動の姿勢になつて、「貴官のお目に止まりますと、迷信とか、臆病とか、とお叱りを受けるかと思ひまして、みな申合せまして、人目につかぬ所に張り附けたのであります。さうであります。みな、親父とか子とか、中には嬬とかが、送つて來たものであります。どうぞ、戦争の終りますまで、お

見捨ておき下さるよう、お願いであります。大切な砲身を汚す罪を、お許しお願いであります、」と云つて目を伏せた。

これには流石の寺内少尉も目をそらした。

この休養時間に、艦内の酒保を開放し、酒類の外は兵員の欲するものを食べさせる事になった。

さうして准士官以上は、士官室に集り、艦長から、「豫め成功を期し、恩賜の酒を掬し、祝捷兼死別の宴とす、」と云ふ挨拶があつて、一同兩陛下と帝國海軍、次ぎに日進の萬歳を三度づつ唱へた。

やがて、「戦争準備」の號音が鳴り響いた。それから、總員號笛が全艦に通じて數回吹奏された。やがて掌帆長屬(傳員兼務)は大聲を張り上げて副艦長の命令を傳へた。

「そー員、軍歌の位置に集れ！」

忽ち全員は中部甲板の規定位置に集つて第二の號令を待つた。

副艦長東中佐が、一段高い中部最上甲板の上に現れ、やがて自ら音頭を取り、全員それに附いて歌つた。

如何に狂風吹き巻くも、

如何に怒濤は逆巻くも、

たとひ敵艦多くとも、

何恐れんや義勇の士、

大和魂充ち満つる、

我等の眼中難事なし。

この時、前橋橋上^{ホタルブリッジ}に、周到の注意をもつて八方に氣を配る當直將校、これを補佐する副直將校、それから信號兵達の望遠鏡は、ことごとく艦首^{ミズシ}の方に向つて並び、絶えず何物かを看視するやうに見えた。更に、司令官、艦長、航海長、水雷長、砲術長等の望遠鏡も、信號兵達と同じ方向を向いてゐる。又、後部艦橋^{アフトマブリッジ}に竝んでゐる司令官幕僚、同附信號兵部員達も皆望遠鏡を目に當ててゐる。それ等の望遠鏡には既に進んで來る敵艦隊が寫つてゐるのである。

副艦長と一同の軍歌はつづく。

維新以來訓練の

技倆試さん時ぞ來ぬ、

と見る、左舷艦首の方、遙かの波間に、薄霧の中から、朧朧と、艦影が、一つ又一つ……

我が聯合の艦隊は

榮辱生死の波分けつ

日本海内乗り入りて

いざ滅さん波艦隊

彼我の距離ますます接近し、敵艦影更に三つ四つ見えて来る。やがて、五……六、六……七、後續艦隊が長蛇の如く、その尾の方はその影を濛氣の中に没して見えない。

空飛びかける砲丸に……

この時、先頭の旗艦三笠の左舷艦首半マイル程の邊に、數丈の大水柱が二つ竝んで卷上つたかと思ふと、やがて遠雷のやうに聞える砲聲が、遙かに遠い敵艦の方から聞えて來た。時間は午後二時八分。敵はその時から殆ど一齊打方で三笠を攻めた。一時は餘り多くの水柱の爲めに三笠の姿が見えなかつたくらゐだ。

水より躍る水雷に……

遠雷のやうな砲聲はますますひどくなり、三笠の周圍に落ちる水柱は次第に三笠の傍近くに落ちて來るやうに思はれた。が、東副艦長の歌はつづけられた。

敵の艦隊見らうちに

皆皆碎かん粉微塵

艦より舳より沈みつつ

廣き海原影もなし

早くも空は雲晴れて

四方の眺めも浪の花

餘りに脆し露艦隊

此合戦は物足らず

東副艦長は一段と聲を張上げ、歌ひ終つた。

日本魂 充ち満つる

我等の眼中難事なし……

この時、旗艦三笠の檣上に一旒の信號旗が掲げられた。その信號は直ぐに當直將校に譯され、艦長の手を経て副艦長の手にとどけられた。それを讀み了つた副艦長は實に晴やかな顔をして、「司令長官より艦隊全員に達す、とある！」と叫んだ。

「皇國の興廢此の一戦にあり各員奮勵努力せよ！」

副艦長はその言葉を全員に傳へ終ると、つづけて、

「戦闘配置に就け！」

この號令と共に全員一時に蜘蛛の子を散らすやうに各自の受持の位置に就いた。——午後二時十分。

その時、三笠が先づ敵の旗艦スウオオロフに對して砲撃を開始した。二番艦朝日以下逐次これに倣つて砲火を開いた。この時、あの有名な海戦術左舷回頭が行はれた。殿艦日進が回頭したのは午後二時十五分。

寺内少尉は、「戦闘配置に就け」といふ號令と一緒に、彼の持場である右舷後部中甲板六インチ砲の傍に立つた。傳令の聲が刻刻に傳聲管に依つて傳へられる。

「最近の敵艦隊一番艦、一萬、九千五百、九千、八千五百、八千、七千五百……」と距離が近くに従つて我が第一戦隊は、スウオオロフ、オスラビア二艦に砲火を集中した。

この頃から、濛氣が少しづつ深くなり、展望が五六ノット位しかきかなくなつたので、敵艦全部を見るのにますます骨が折れた。そればかりでなく、前夜來の風波がいよいよ激しくなつた。その間を、艦は全速力で狂瀾を蹴破りながら突進したので、ときどき艦橋の人を波が掠めさうになつた。ひどい時は艦は一舷は三十度位傾いたので、乗員はことごとく潮を浴びた。さういふ中で、彼我並行して航進して行くうちに、速力の早い我が艦隊の方がどうしても先行し勝ちになつた。その爲めに、敵の砲火の大半は距離の最も近い艦（日進）に集中するやうになつた。その爲めに、日進は、初めの三笠の場合のやうに、あたりに落下する敵弾の大水柱が林立して、ときどき

前艦の春日の姿を見失ふ事さへあつた。――

そのうちに、我が艦隊は次第に前進して、午後三時頃には、敵の行手を抑へてしまつたので、敵は俄に左舷に回頭して、反對の方角に逃走しさうになつた。そこで、我が艦隊は各艦各個の轉回をしたので、陣形が一變して、日進が第一戦隊の先頭になつて、次第に敵の前程を壓するやうになつた。この時、轟然たる爆音と共に、眞黒な煙が濛濛と艦首甲板の方向に立上るのを見た。その時、疾風がその爆煙を一掃すると共に、擔架隊呼集の笛が聞えた。見ると、前艦橋が半分なくなつてゐたばかりでなく、參謀熊本中佐と一兵卒が大の字の形で倒れてゐた。

そればかりでなく、日進が命とたのむ首砲八インチ砲が二門とも打碎かれ、殊に一門は射殺された大象の鼻のやうに、前甲板に横たはり、他の一門は影も形もなくなつてゐた。それを見た時、寺内少尉の最も心配したのは、前砲橋の損傷よりも、首砲の消失よりも、多數の將卒の死傷よりも、艦長の運命だつた。今朝、「テキカンミュ」と云つても眠つてゐた武田艦長の事が最も氣にかつた。が、

「ありがたい！」と寺内少尉は心の中で叫んだ。見ると、武田艦長の後姿は前の通り雙眼鏡を手にしたまま立つてゐた。「艦長の心は乗員七百の心だ、」と寺内少尉は思つた。

その時、部下の一砲員が、寺内少尉に、

「分隊長、分隊長、小便に行きたいですが……?」

「馬鹿!」

「戦闘開始の時から我慢してゐたのであります。もう一刻も辛抱が出来ないのであります。」

「馬鹿! 戦争と小便と何方が大事だ!」

癩癩持の寺内少尉は、それでも、砲員が便所の方へ走つて行かうとして、彼の足下の六インチ砲の砲臺の下を過ぎるのを見ると、彼は自分の帽子を取つて、その水兵の顔に投げつけながら、「待て!」と呶鳴つた。

「分隊長、もうこれ以上我慢が出来ないのでありますから……」砲員は、泣きさうな顔をして、尙も便所の方へ行かうとした。

「貴様、もし用便中に敵弾に打たれて死んだらどうする! 人が若し貴様が便所の中で死んでゐるのを見たら、貴様が戦争が恐くて便所に隠れてゐたと考へるだらう。今は戦争の最中だ。一步も自分の位置を動いちゃならん。この俺も、このままで小便するのは、これで二度目だぞ。これ見る。こんなにズボンが濡れてるぢやないか。臭いのは一時ぢや。波がいつでも洗つてくれるぢやないか!」

「やないか!」

この言葉が終るか終らないうちだつた。艦首の方に當つて又も大爆聲を聞くと同時に、大爆煙と大猛火が揚がるのが見えた。暫くすると、悲惨な號笛の鳴るのが聞えた。寺内少尉が、俯伏して見ると、これを唯一の頼みとしてゐた後部旋回主砲二門のうち、右の砲は、砲身がなくなつて影もなく、左の砲も大損害を受けて用をなさないうらだ。

日進は、主砲全部を失つて、攻撃力の半ばを失ふ事になつた。その上、第一戦隊はますます先進して、日進だけが、後に残され、敵の主力の砲火を殆ど日進一艦に浴びる難局に立たねばならなかつた。

この時、寺内少尉の頭の上から、潮か血か分らないが、雨のやうに降りかかり、その滴が飛び散つて、首に掛けた苗頭尺修正板の上に散つた。見ると、それは真赤な血だつた。振返ると、直ぐ後の檣底側に瀧のやうに血が流れ落ちて、甲板の上に血の河が流れてゐる。何處から落ちるかかと、仰ぎ見ると、目も眩むやうな高い檣頭に、一候補生と下士官とが力を合して、敵弾に一脚を射断された一重傷兵の胴中を長い綱で縛り、徐徐と上から繰り下ろしつゝあるところであつ

た。櫓を傳うて甲板を飾つた血はこの重傷兵の血だつた。――

その時、又、敵の十二インチ砲弾が一發、躍つて、日進の左舷後部水平線下の甲鐵板を貫通し、その爲めに數フイート平方の大破口を生じ、その上その邊の數板の甲鐵板の接合部に龜裂を生じたので、浸水が甚しく、遂に二個の石炭庫に満水し、艦は水平を失ひ、甲鐵部は敵彈防禦の適良位置を失ふに至つた。これで、日進は防禦力の大半を失ふ事になつた。結局、日進は、攻撃力、防禦力、速力の三要素より成る戰鬥力の大半を失ひ、従つて、次第に列外におくれねばならなかつた。

これを見た敵艦隊は、日進を撃沈しようと思つたらしく、いよいよますます猛射亂撃し、日進一艦に砲火を集中し出した。寺内少尉は心の中で無茶な事を考へた。――「今や、一の主砲もないから、應射する事は出来ない。この上は艦首の衝角を打突ける外はない。そこで『衝角用意』の號音をかける。それと共に、乗員皆武装して、上甲板に平伏し、艦首を逆轉し、最も近い敵艦目指して突進し、避ける暇を與へずに、衝撃一番、彼と我と丁字形をなした時を見計つて突撃してやらう。その拍子に、自分は敵艦内に躍り入り、白兵戦で彼等を皆殺しにしてやらう。――その時、却つて、敵艦中から、急に一隻の快走艦が離脱したかと思ふと、日進を目ざして、全

速力を以て突撃して來た。見ると、その艦首水雷發射管の蓋は開かれ、今や水雷發射の姿勢を明瞭に示した。その時前櫓橋から號令が下つた。

「艦尾の方『イズムルウド』苗頭なし三千、全砲火をこれに注げ！」

この危険な状態を目に見、この號音を目にした全艦員は、一度は吃驚したが、忽ち奮起し、何れも損傷をしてゐる各中小口徑砲を極度まで艦尾に旋回して、イズムルウドを打たうとしたが及ばない。

それを見て、イズムルウドはますます日進に迫つて來て、將に魚形水雷を發射しようとする時だつた。前續諸艦が日進の危いのを見て、艦首を旋回し、一齊にイズムルウドを猛射したので、さすがのイズムルウドも忽ち艦首を轉回し、這這の體で友軍の方へ遁走した。

かうして、一時は逃れたものの、まだ敵彈は、刻刻その數を増し、艦の損傷はますますひどくなつた。――

午後五時半過ぎ。寺内少尉の指揮下にあつた五番十二吋砲直下の舷側に又もや敵彈が命中し、濛濛たる爆煙に包まれ、炸裂瓦斯の激しき壓迫を受け、彼自身も殆ど甲板に打ち倒されさうにな

つた。が、豫て、太い綱に胴中を砲架に縛り付けてあつたので、辛うじて身を支へることが出来た。

爆煙が薄らいだ時、目の下を見ると、今まで獨り奮撃猛射をつづけてゐた五番十二吋砲は、鞍裂け、身倒れ、四圍の砲員ごとく爆煙に煤され、全身黒焦、縦横に仰臥俯臥、被服寸斷、見たところ悉く即死したものやうに思へた。寺内少尉が大急ぎで首に下げた號笛をつづけ様に吹くと、直ぐ擔架隊は馳せ來り、またたく間に下甲板の治療所に運び去つた。

ところが、その中に一人、右腕に大傷を負ひ、流れる血汐が甲板を染めるのも頓着しないで、突然、立上り、擔架隊が幾ら進めても、寺内少尉が幾ら厳しく命令しても、聞き入れず、斷じて治療所へ行かないと頑張り、自ら鉢巻をしてゐた白布で堅く右腕を繃帶し、再び戰鬪に従事しようとした。彼は、寺内少尉の命令にも耳を藉さず、

「自分の血を絞り盡して、君恩の萬分の一に報じ、國家の爲めに微力を致すのは、自分のやうな者には、今より外にないと思ひます。不幸にして、右腕は失ひましたが、自分のやうな者でも、最後の一念、片腕で砲を操縦さしていただきませう！」と云つて、ふらふらと立上り、よろよろと受持砲の所まで歩いて行つた。

が、彼が操縦しようといふ十二インチ砲は、肝腎の鞍架が用に立たないから何にもならない。さすがの強情な勇士も、それを見ると暫く茫然としてゐた。その頃はまだ戰鬪で、大破した日進は、又も列外に落ち、又も敵の目標となつてゐたので、飛び來る彈丸は文字どほり霰のやうだつた。稍しばらく役に立たない受持砲を見詰めてゐた勇士は、何と思つたか、突然立上つて、寺内少尉の立つてゐる高い六インチ砲臺の上に躍り上つて來たかを見ると、身を以て寺内少尉の前面を掩ひ、敵の方に向つて突立つた。寺内少尉が持前の大きな聲を張上げて、それを斷り、手で押しやらうとしても、どうしても動かない。彼は、少尉に後を向けたまま、少尉に負けない程の高い聲で、叫んだ。

「蟲虻のやうな一兵卒の身を、今日唯今、隊士の尊い身と換へる事が出来れば、自分は喜びであります。自分がいつか隊士の命令に叛いてまでも、基督教の信仰を捨てなかつたのは、全く今日の事を待つてゐたものであります。どうぞ、自分の志をお憐れみ下さつて、今日の戰争の終るまで、此處を自分の光榮ある死場所とさして下さい。さらば、自分は神の懷に歸れるでせう！」
かう云つて、どうしても動かない。さすがの寺内少尉も彼の右腕の彈傷から血の流れるのを見かねて、

「では、お前の思ふままにするがいいが、その傷をこのまま捨てておくと、取返しの附かぬ事になるかも知れない。どうだ、治療所へ行つて、出血を止め、さうして又戦争に出たら？」と云つた。が、彼は首を振つて、

「おお、今日は御國の興廢を決する日、本艦亦危急存亡の時、自分のやうな者でも一刻も軍務を止める譯にはいきません。神が斯くせよと申されるのであります。どうして自分勝手な事が出来ませうぞ。自分の大砲は壞れて用に立ちません。自分に戦ふ武器がなくなつたばかりでなく、片腕さへなくなつてしまひました、昔の言葉でいふ刀折れ矢盡きては早なにをか惜みませう！」

かう云つて、彼は、兩足を開き、片手のない體で大の字の形をして、寺内少尉の小さい體を庇ひ、直立不動の形で、敵を睥んだ。

寺内少尉は、基督教徒であると云ふ事だけで、この男を過去三ヶ月の間いぢめた事を思ひ出した。——考へて見ると、彼が幾ら殴つても石のやうに黙つてゐた、幾ら罵倒しても石のやうに黙つてゐた、あれが基督教といふものかと思ひやつたが、その時は寺内少尉には何も分らなかつた。然し、今、彼は基督教徒の勇士の耳の傍で呼んだ。

「お前に今まで俺がなした亂暴を許してくれ。お前のいふ神といふのは、俺の罪を許してくれる

か。」

基督教勇士はその時初めて寺内少尉の顔を返り見て、微笑した。寺内少尉はこの男が微笑したのを初めて見た。が、基督教勇士は直ぐ正面に向き直つた、さうして云つた。

「おお、神に謝す。神は自分を通して一人の兄弟を助け給うた！」——

日の暮れるには間があつたが、霧のやうなものが海に下りて來たので、日の暮のやうな感じがした。數時間に渡る激戦に、敵勢は既に衰へ、霰のやうな弾丸も次第に少なくなつた。稀に二三の水柱が遠くに立つてゐるだけだつた。

その時、「戦闘中止、打方止め！」の號令が下つた。

基督教勇士はこの號令を聞くと、後向きに倒れた。

寺内少尉は抱へない譯にかなかつた。

夏
の
夜
語

夏の夜はどこの家でも窓や戸が明け放されてあつたり、障子の代りに簾戸が嵌められてあつたりするので、外が暗くなつて内に明りがつくと、町を歩いてゐて自然に往來から家々の様子を見通すことが出来る。殊に、横町とか、裏通などを歩いてゐると、そんなつもりもないのに、ふと左を見右を見する拍子に、餘所の家の中がすつかり見えて、却つてこちらで面喰ふことなど珍しくない。或る家では一つの食卓を圍んで裸の主人が眞赤な顔をして坐つてゐると、その廻りに裸の子供たち、主人と向ひ合つて肌脱ぎの母親、母親と並んでお祖母さんといふやうな顔觸で、中に誰か團扇を使つてゐる者があると見えて、白いものがひらひらと動いてゐる中で、賑かに食事をしてゐるのなどが見える。また、他の家では奥の間にぼつりと一つ明りがついてゐて、縁側の明りのとどかない邊に、一日の仕事を終つたらしい男と女とが、白い浴衣着で、團扇を使ひながら、煙草をすつたり、天を見たりしながら涼んでゐるものもある。中には、小人数の家なのか、或ひは便所にも入つてゐるのか、それとも家中どこかへ出かけたのか、綺麗に片附いてゐて、お、なかなか綺麗好きなたちと見える、唯一つ卓子の上に静止してゐる扇風器が留守を守つてゐるやうな家もある。

これ等は夏の宵には少しも珍しい景色ではないが、かういふ景色を見ると、私は、背中を突つかれたやうな、何か忘れてゐることを思ひ出せと迫られるやうな、思ひをすることがあるのだ。さういふ時、私はふとそれ等の家を一軒一軒のぞいて廻りたいやうな氣になつて、事實いつの間にかさうしてゐることがある。或る家では蓄音機が据ゑてあつて、主人らしい男が客らしい男と、サイダの瓶を挾んで聞いてゐる。その奥の方に赤ン坊の寝かしてあるらしい幌蚊帳の端が見える。その隣の家は何か出版でもする本屋と見えて、格子戸の嵌まつた店の間の右手には、本がいつぱい詰まつてゐる。格子の傍には机が三つも並んでゐて、その上にはつい今先まで仕事をしてゐたやうに、紙や、帳面や、筆やが散らばつてゐる。人たちは皆風呂にでも行つたのを見えて、中の間あたりの部屋で願髻の長い老人が一人でぼつねんと坐つてゐる、その隣の家では……

人々は皆それぞれかういふ平和な巢をつくつて、それぞれの營みをしてゐるのに、私の家では今頃どうしてゐるだらうか、と私は急に胸を抑へられるやうに考へ出されて來るのである。こんな事をいふと、私は何か家を離れて遠くへ旅にでも出てゐる身の上のやうに考へられるが、實際は、私も亦、この東京の町に、母や妻や、それから一人の年とつた兄や、女中が一人、といふ人並の家を持つてゐるのである。が、一家の主人であるが私が年中家を離れてゐるものだから、不

意に人の家の平和な姿を見ると、そんな風に考へるのであらうか？ それも一つの理由には違ひない。私は家にゐても物言はずである上に、不斷物を書いたり考へたりする仕事をしなければならぬといふ理由で、家からそんなに遠くない或る町の下宿屋の一と間を借りて、常の日でも日曜でも祭日でも朝から晩までその方へ行き切りになつてゐるのである。最早さういふ生活を始めてから足掛四年になるのである、だから、私は一週間のうちに自分の家で朝飯を食ふのがやつと二三度位のもので、毎晩家へ歸つて行く事にはしてゐるが、それが大抵十二時近くの事であるし、朝飯の食卓にもいつも私だけは一人で着くやうな廻りになるのであつた。だから、別に折合が悪い譯でもなく、喧嘩してゐる譯でもないが、私は殆ど家の者と、先づ口をきくことはないといふこともいい位であつた。まして、母や妻やと手を携へて、遊山にも、芝居見にも、散歩にも、一度も行つたことがない。人の家には、やつぱり、笑ふことも、泣くことも、喧嘩することも、酒盛さかあがりすることもなければならぬ。だのに、私の家にはそれがなかったのであつた。私はときどき考へる、——或る片寄つた見方をすると、姑は少し姑根性がある方がいいし、嫁は嫁根性がある方がいいし、主人は主人らしく振舞つた方がいいのではないだらうか。さういふ意味では、私の家の人はみなみな餘り感情が大人で、不自然であり過ぎるといへるかも知れない。だから、私の家には

波風も立たないが、皆々寄合ひ住居のやうに寂しく自分を守り過ぎてゐるやうにも思はれる。おまけに、神様はこの家に子を授け給はない。

私の母は、老人のくせに出好きで、どちらかといふと派手な氣質で、物事を陽氣に考へる方であつたから、少しでも金銭の餘裕などがあると、私の妻を誘つて散歩に出るのが常であつた。それには無論彼女が自分自身を慰める氣持が手傳つてであらう。私の妻は東京の生れであるが、親戚といへば腹違ひの弟妹を持つてゐるだけであつた。それ等の弟妹は男はまだ家をなしてゐない年頃だし、女は人の家に縁づいてゐる身分だし、それに彼等の母親は彼女の繼母に當る譯で、その繼母のために彼女は幼い頃邪魔にされて他家に養女にやられて苦勞したといふ記憶を持つてゐる。さういふ記憶は別としても、さういふ關係であつたから、彼等は普通の兄弟のやうな親密を結ぶ暇がなかつたと見えて、今でも往來することはあつても、年に一度か二度に過ぎなかつた。そればかりでなく、繼母の家から遣られた養家では、彼女はもつと不深切に扱はれたために、彼女は私と結婚する十年も前に、その養家をも出てゐたものであつた。だから、彼女は骨休めに行く里の家といふものを持たなかつた。

私は二三度町で彼女等が歩いてゐるところに會つたことがある。二度は私の家の傍の公園の道

であつた。ふと用事を思ひついて、午後二時頃、私が家へ歸るために公園の道を歩いて行くと、動物園の前で人々と切符を買つてゐる彼女等を見たのである。動物園は、日曜日でなくても、晴れた日の二時頃なら、大抵切符賣場の前には、大入の芝居小屋の前ほどに、人々が列を組んで並んでゐる。だが、それ等の群集はみな子供連れか、少年少女たちか、でなければ赤毛布の連中かにかきまつてゐる。その間に挟まれて、子供を連れなない嫁と姑との二人連れの姿は、何か異様なもののやうに目についた。

そこは、左側が動物園で右側はブランコや機械體操の道具のある子供の運動場になつてゐる。私は、動物園に入つて行く私の母と妻に見られぬやうに、あわてて往來からその運動場の方へ踏み込んで、子供たちが鬼ごつこをしたり、シイソオをしたり、歌をうたつたりしてゐる中を横切つて、自分の家の方へ足を早めた。動物園の入口で彼女等の姿が目立つやうに、子供の運動場を横切る私の姿も何か目立つやうに考へられて、私は、私自身を抹殺したいやうな思ひで、駈足になつたものである。

かういふことは別に取立てていふ程のことではないかも知れないが、私は心の中にどういふ憑き物でもしてゐるのだらうか、自分の家族と家の外で會ふと、「やあ」といつて、そこで一緒にな

つて、手を取つて散歩するとか、喫茶店に入るとかいふ反對に、よくこんな風にこそと姿を
晦ますやうに避けた經驗があることを思ひ出すのである。ずつと以前、まだ今の妻でなく、以前
の妻の時分に、私がある頃住んでゐた近くに大きな練兵場があつて、そこへ行くと、よく母がそ
の時の私の妻と二人で兵隊の訓練を見に来てゐるのに會つたことがある。その時も、私は、彼女
等の前に自分の姿を現す代りに、彼女等から見えない場所に身をひそめて、兵隊の訓練と、それ
を見てゐる母と妻との光景を眺めたものである。妙な氣質だ。だから、若しさういふ往來で、避
ける暇がないうちに、彼女等と顔を見合はすことがあると、一瞬間、私は、無意味にひどく狼狽
を感じて、笑ふにも物を云ひかけるにも、頬の筋肉が硬ばつて動かないやうな思ひをするのであ
る。公園の道で一度と、三越の前で一度と、そんな事があつた。「や、あの、あの、どこへ、僕、
ちよつと、あの、その友達のとこへ。ぢや、さよなら、」といった風な、しどろもどろな言葉を
かけて、私は逃げ出すやうに彼女等と別れた。三越の前するときには、私は丁度そこで電車を下り
たところであつたにも拘らず、すぐに夢中で來かかつた乗合自動車に飛び乗つてしまつて、車掌
に行先を聞かれて困つたことがある。母にしても、妻にしても、私が何のためにそんなに狼狽し
てゐるのか、了解に苦しんだに違ひない、私自身にも何のためだか分らない位であるから。相變

らず變り者だな、と彼女等はそれぞれ心の中で思ひながら、併しそれに就いて話し合ふことは避
けたに違ひない。その晩か、翌日か、私たちが家で顔を合した時にも、無論そんな話は出なかつ
た。彼女等にして見ると、をかしいにはをかしいが、そんな事聞いても云はないだらうし、又う
つかりそんな話を持出してどんな拍子で私の機嫌を悪くするかも知れない、と思つて遠慮するの
であらう。だいたい私の家の人たちは、その理由が大部分私の我儘な偏屈な氣質のためからは
あるが、そんな風に彼等の氣質もいつの間にかさういふ神経になつてゐた。――

私の家のもう一人の家族である私の兄は、一昨年の冬から私の家に現はれたものであつた。そ
れまで彼は神戸の方にある親類の家に居候をしてゐた。彼は生れて間もなく腦膜炎のために普通
の人間並の脳力を少し失つたので、私の家が早く父を失つて潰れてしまつた時、その神戸の親類
に引取られて行つたのである。二十何年ぶりかで、彼が弟である私の家に歸つて來た時、ちやう
ど四十歳であつた。若し弟の私が家をなさなかつたら、彼は四十歳が五十歳でも、死ぬ迄でも、
その神戸の親類に居候になつてゐたかもしれなかつた。彼は頭がそんな風に悪くなつてゐた上
に、少年の頃中耳炎をこじらして、耳が遠くなつてゐた。幸だつた事に、その神戸の親類は大き
な邸宅を持つた金持だつたので、彼はそこで二十何年の間、使歩きをするとか、庭の掃除をする

とか、家畜の世話をするとか、いつた風な、彼に適當な仕事をして暮してゐたのである。が、私
の家では彼一人の口が殖えることはそれ程困らなかつたが、困るのは、彼が歸つて來ても、何の
仕事も與へられないことであつた。彼が掃除する程、大きな庭も部屋もなし、世話する家畜は一
疋の小犬しかゐないし、使に行つてもらふ用事などもそんなにありはしなかつた。といつて、彼一
人に遊んで食つて行かれることも差支へないが、それでは性來胃が弱くて、毎年脚氣などにかか
る彼を、病氣にさせるやうなものだ。困つたものだ。せめて耳でも遠くなければ、頭が悪いとい
つても、文字が讀めないとか、金の勘定が出來ないとかいふ程、ひどくはないのだから、郵便屋
にでも、便利屋にでも、赤帽にでもさせられるのだがな、と母は笑ひ笑ひ云つた。が、まさか、
赤帽や、便利屋になられては困る、と私も笑ひ笑ひ云つた。

ところが、いよいよ歸つて來て見ると、彼は、私の借家住居の、四坪ばかりもあるだらうか、
それでも家に附いた木が何本か立つてゐたり、手水鉢の水の流れるタタキがあつたりするから、
正味三坪少し切れる程の庭の隅に、草花の種を買つて來て植ゑる仕事を始めた。彼は、初めその
三坪ばかり餘地のある庭の一部分に板で仕切りをして、その中の土を掘りかへしたり、篩にかけ
たり、何處かから溝泥どぼどろを運んで來て、それを乾かして交ぜたり、砂利を買つて來て、その地面の

上を幾つにも區切つて、そこにいろいろの草花の種を播き、それ等の印に、「シネラリヤ」とか、
「プリムラ」とかいふ小さな板切の看板を立てた。多分、神戸の親類の家にあつた頃、彼は、家畜
係であると共に、さういふ草花の係だつたと見えて、それぞれの草に適つた土をこしらへたり、
肥料を與へたりする智識は専門家に近い程度に持つてゐるらしかつた。彼は、私の母や妻から五
十錢とか一圓とかもらふ小遣錢を、ことごとくそれ等の草花の種や、それを植ゑる鉢や、土や、
肥料や、鍬や、如露や、その他の物に使つた。初めのうちは、なる程こちらで心配しなくても、
それ相當にする仕事はあるものだとか、ああ、こんな可愛らしい芽が出て來たとか、云つて、母
なども笑つて見てゐたが、兄がいつとなしに次第に彼の畑の領分を擴張して行つて、縁を支へて
ゐる柱の傍までもひろげて來たのを見ると、先づ母が怒り出した。それにも拘らず、或る時は又、
彼は、二階の縁側が硝子障子になつてゐて日當りがよいので、近所の材木屋から買つて來た板切
で手製の植木棚をこしらへて、それを硝子戸の内側に並べ、硝子障子を明け締めしないやうに突
つかい棒をしてしまつた。彼は、神戸の親類にあつた頃、その家にあつたらしい温室をこしらへよう
と計畫したらしかつた。無細工な植木棚の上に並べた鉢には一つ一つ板切の看板が立つてゐて、
それには種の袋を見て彼が書いたものらしく、「ヒヤシンス」と片假名で書いた横に Hyacinth

と、「プリムロオズ」とした横に Primrose と横文字で記してあるのだが、その片假名のどこかに間の抜けた書體といひ、英語の方はどこか綴りを間違へてゐるか、字を書き違へてゐるかしてあるのが、彼らしい面目を現してゐた。が、中に植ゑられてある様様の草花は、看板の字と反對に、どれもこれも健かに元氣に延びつつあつた。――

彼が近所の草花屋へ新しい種を買ひに行くと、方々から矢張り買ひに来てゐる客が來てゐて、ちつとも芽が出ないとか、たまに出かかつて來たかと思ふと直ぐに腐つてしまふとか、云ふ不服をならべるのが可なりゐるらしい、すると、草花種屋は、いつも私の兄の方を見ながら、「この方も始終買ひに來られますが、一度も苦情を聞いたことがありません、みな同じものを上げるのですが。……ねえ、あなたの方は育つんですね。」と彼に云ふ。と、彼は、遠い耳で、草花屋の言葉を聞きとると、「へえ、育ちます。」と耳の遠いもの獨得の妙な發音で答へることであらう。――

しばしば、私の母と妻とが、彼を子供のやうに嚇してゐることがあつた。「庭の隅だけといふ約束なのに、こんなに縁の下まで擴げると、家の建つてゐる邊の土が柔らかくなつて、家が傾いて來ます。J（私の名）が怒つてゐる。大家に聞えたら、きつと立退いてくれと云つて來るに極つてる。」と母が兄の耳の傍で叱るやうに云ふと。「へえ、へえ。」と彼は答へる。が、一週間

もすると、彼は自分でも知らぬうちに畑をひろげてゐる。と、母が「お前は幾ら云つても聞かないが、これでは家を引越すより外に仕方がない。Jはしかしこの家を引越すのは嫌だと云つてゐるから、お前と私でどこか田舎の、もつと地面の廣いところへ行かう。しかし、私も田舎が嫌ひだから、それを思ふとなさげなくなる。」と云ふ。すると、兄は悲しげな顔をして土だらけの手を膝の上に置いて、長い間縁に腰かけてぼんやりしてゐる。まつたく狭い庭で、さうして縁側に腰かけてゐる兄の鼻の先から一間先には背中合せの隣家の塀があるのだから。兄は、その塀を見て、溜息をついてゐた、と云つて、母と妻とが笑つてゐたことがある。

或る日、私は二階の縁側に立つて屋根を見下ろした時驚いた。といふのは、屋根の瓦が見えない程、土を盛つた大きな平べつたい木の箱が、物干の兩側に並べられてあつたからだ。それは、私の家の屋根だけでなく、右隣の家の屋根まで侵して、その家の物干のところまで終つてゐる。箱製の畑の連続なのだ。例によつて畑には片假名と英語とで名を現した板切が無數に立つてゐて、或る箱の畑の中には五分ばかりの芽が整列してゐたり、また他の箱の畑の中には一尺近くも延びて花を咲かしてゐる草が並んでゐたりした。先きにも述べたごとく、自分の家とは云ひながら、家を殆ど外にして暮してゐる私のことであるから、そんな二階の縁側に立つことなどは一年のう

ちに幾度と數へる程しかないことなので、それにしても、いつの間にこんな畑が屋根の上に出來たのだらうと私は驚いて目を見張つたことでもあつた。――

或る日、この畑の一部分の、折角種を播いて芽が出るばかりになつたところを、私の家の飼猫が荒したことがあつた。それで、兄が怒つてゐるのを母がなだめてゐた。

「これは三つで五十錢もする種ですからな、」と兄は大きな聲で嘆いてゐる。

それを聞いて、そら、矢張りさうだつたのだ、この間お兄さんがあれを買つてらつた時は、三つで二十錢だと母さんに聞かれたとき云つてらつたが、どうもあの種はもつと高いんぢやないかと思つてゐたが、やつぱり本當は五十錢だつたんだな、それにしてもあんなに本當のことを云つてしまつて、嘘が分つて、今度あべこべに母さんに叱られなならないといひが、と傍にゐた妻は心の中で可笑しがりながら、兄のために心配してゐた。が、妻の心配は杞憂に終つた。

「まア、五十錢。それは惜しいね、それは氣の毎だから、ぢやア私が五十錢だけ猫の代りに立てかへて上げるわ、」と母が云つた。彼女はこの前三つで二十錢だと兄に嘘をつかれたことを忘れてゐたのである。

或る晩、私は夜遅くいつもの所で電車を下りて、公園の中を通つて、自分の家の方へ歸つて行つた。その頃は、ちよつと必要があつて、私はよく夜おそく家に歸つた。それで、この道を遅く通るのは私には珍しいことではなかつた。私が丁度その前を通つてゐる時か、その前にさしかかる少し前かに、公園の中にある鐘樓の鐘が鳴るのが三日おき位の例になつてゐた。(三つは捨て鐘である。)後の二日は別の道を通つて歸るか、でなければ下宿屋で泊るかであつた。考へて見ると、もう何年の間かうして夜深けの公園の道を通ることであらう。この道は五町ほどあつた。この道を通る時、私はいつでも長い旅から歸つて來たやうな氣持がするのであつた。家に泊つた時は、その日の朝早く家を出る習慣になつてゐたので、時間にすればざつと十六七時間離れてゐるのに過ぎないのだし、場所としても家から半里と離れてゐないところの下宿屋の一間に坐つて、仕事をしたり人に會つたりする外には、ときどき散歩をする位のことなのであるが、それでゐて、夜深けにこの公園の道を我家に向つて歩いて行く時は、いつでも久しぶりで歸つて行くやうな氣がするといふのは、多分さうして歸つて行つても、家の者は大方寝てゐて、戸を明けてくれる者と二言三言言葉を交すだけで私はすぐに寝てしまふし、さうして翌日になると例のごとく家の者とは朝の挨拶を交する位で、それから一人で朝飯を食つて、そこそこに家を出るといつた風な生

活をしてゐる爲めであらうか。いづれにしても、夜深けの公園の林の道を歩く時に限つて、私は私の家の人々のことを考へるのが常になつてしまつた。

丁度その晩は、例の鐘樓のある丘の下を通つて、動物園の前に出る道を曲つた時分に、十二時の鐘が鳴り出した。今日は少し遅かつたな、と私は思ひながら歩いて行くと、向うの方から酔拂ひらしい聲で、四五人連の男が流行唄を囀鳴りながらやつて來るのに會つた。殊更に『囀鳴る』と書いたのは、その連中の歌聲が、歌ふと云ふより囀鳴つてゐるやうに聞えたからである。私は、相手が酔拂ひらしいので、もし肩でも擦れ違つて、言掛をつけられると面倒だと思つたので、彼等と行違ひになる四五間も手前のところから、道の片隅を歩いて行つた。流行唄を合唱しながら歩いて來る連中は四人だつたが、職人か職工のやうな風體の人たちだつた。彼等は、一列に手を引き合つて、盛んな足取りでやつて來た。果して彼等は、此方から歩いて行く私を無視して、少しでも道を譲らうとする氣色を見せないで進んで來るので、私は、わざと彼等の方を見ないやうにして、片隅をやうやく彼等と衝突しないで通り過ぎることが出來た。それ切り、私は、誰にも會はずに動物園の横から美術學校の横に出て、私の家への道の曲り角である圖書館の角のところまで歩いて來た。

と、ふとその曲り角の路傍に、誰か白い服装の男が、向う向きに踞んで、何か物を隠さうとするのか、隠してあるものを掘り出さうとするのか、私にはその瞬間さう思へた、何かやつてゐるらしいのが目についた。今夜は妙な晩だと思つて、私は變に氣味が悪くなつて來た。それに何か秘密な事やつてゐる男としては、その曲り角で向う向きに踞んでゐる男は、ひどく彼自身の事に熱心で、歩いて行く私がわざとらしく下駄の音など立ててゐるのに、振向きさへしないのが尙氣味が悪かつた。私は、ふと地震の後で暴徒騒ぎの流言のあつた時、近所の人たちとこの邊を警戒した時のことを思ひ出して、その白い服装の男が朝鮮人のやうな氣がして來た。

が、間もなく、私は、彼から三尺ばかり離れた此方の角を曲らうとした時、その男が矢張り向う向きのまま立上つたのをちらと横目に見ると、それが私の兄に似てゐるのを發見して、思はず足を止めた。彼はバケツのやうなものを提げて、私と同じ方向に歩き出さうとして、彼の方でも初めて私の姿を見つけたらしかつた。さうだ、彼であつた。さうして、彼ならば私の足音に振り向かなかつたのも無理がなかつた、と初めて氣がついた。

「やあ、」と私は驚いて聲をかけた。晝間だと、私は往來で彼に聲をかけるのさへ人に氣が引ける思ひをするのであるが、そんな深夜だつたので、いつものやうに遠慮する必要がなかつた。

「どうしたんです、今時分？」と私は咎めるやうに聞いた。が、一と目で、私は彼が丹精してゐる草花の爲めに土を取りに来てゐたらしいことが分つた。が、それにしても餘り時間の遅過ぎるのが不思議だつたので、「どうしたんです、今時分？」と彼に聞えるやうな聲でもう一度くり返した。と、彼はひどく狼狽した様子で、

「あの、……母さんの許しを受けて來たんです、」と先づ私が叱りはしないかと恐れて、子供のやうに辯解しながら、「どうしても眠れないもんだから、土を取りに來たんです、」と云つた。

「どうして今頃まで眠れないんです？」と私が少し不機嫌な調子で聞くと、

「僕、神戸にゐる時分から、二三年前から時々こんなことがあるん……、」と訴へるやうな調子で答へた。

夜眠れないのは、賢い人間ばかりでなく、私の兄のやうな鈍い腦の持主でも、四十歳を過ぎると同じやうな經驗をするものかと思つて、私はちよつと胸を打たれた。

「ぢやあ、一緒に歸りませう、」と私は云つて彼と並んで歩き出した。

その時、私たちの歩いて行く向うの方から、また妙な現象が起つた。それは今し方私が動物園の前で會つたのと同じやうな、酔拂ひらしい數人の連中が、やはり流行唄を大聲に呶鳴りながら

歩いて來るのに會つたからである。前の連中とは恐らく別の一組らしいが、人柄は矢張り職人か職工のやうな風に見えたが、今度は前よりも大勢だつた。さうして手をつないではゐなかつたが、ほぼ一列であることも前の連中と似てゐた。

「こつちへお寄りなさい、こつちへ！」私は、聲だけでは聞えないと思つたので、土を盛つたバケツを掲げてゐる兄の襯衣の袖を引張つた。さつき彼が白い服を着てゐると見たのは、白い襯衣に同じ股引を穿いてゐたのであつた。

今度の連中も矢張り此方から歩いて行く私たちを少しも眼中に置いてゐないらしかつた。殊に先きの道と違つて、一層暗かつたので、そんなに大勢の者があたりを構はない聲で歌ひながらやつて來る様子は、何か一揆でも起した人々のやうに見えた。それが道の幅一ぱいに歩いて來た。私たちは、片側の學校の塀に沿うて、道より少し凹んだ、雨が降ると水の流れるやうな路傍に佇んで、その酔拂ひ連中を通してやつた。が、彼等が私たちの目の前を通つて行くのを見ると、どうも酔拂ひといふよりは、學生が何かの運動競技にでも勝つた時に町を練り歩く恰好に似てゐた。一人一人が、興奮して、思ひ思ひに出來るだけの聲を張り上げて歌つてゐるやうに見えた。さうして、彼等は、道を避けてゐる私たちに會釋もしなければ、挨拶もせず、全く私たちを無視し

て進行して行くのであつた。

彼等と行違つて、私たちが歩き出したところで、兄が突然私の耳の傍に口を持つて来て、

「あれ知つてますか？ 盲めくらですよ、」と云つた。

「めくらつて按摩の？」

「へえ、さう……、」と彼は私に教へることが得意のやうに、「この頃この近くに按摩さんの寄宿舎が出来たんだ。それで、盲だから、晝の間は散歩を禁じてあるんださうです。夜十二時過ぎると、公園の中を一時間だけ勝手に散歩してもいいといふ許しを一昨日警察からもらったんださうです、へえ、」と云つた。

「誰にそんなことを聞いたんです？」と私が聞くと、

「車屋にです、あははははは、」と彼は突然頓狂な聲を立てて笑つた。この思ひがけない時に頓狂な笑聲を立てるのは、私の兄の不思議な癖であつた。彼は、どうかすると、知らない人には普通の頭の人間に見えるやうな話をするところがあるが、この頓狂な笑ひ聲で忽ち馬脚を現すことがあつた。が、笑ひ止むと、急に鹿爪らしい口調で、

「ずゐぶん可哀さうなものですね、」と彼は彼自身が可哀さうなもの一人であることを棚に上

げて云つた。

「へえ、盲の散歩ですか……、」と私は、彼の言葉を上の空に聞いて、今し方會つた二組の盲たちの威勢のよかつた有様を思ひ浮べて「なるほど」と思つた。

間もなく、十二時過ぎに、自分の家へ、私は珍しく兄と並んで歸つて行つたのであつた。

枯野の夢

旅に病むで夢は枯野をかけめぐる

芭蕉

汽車が大阪の町を離れて河内の平野を走る頃から空模様が次第に怪しくなつて來た。ステイアの温度と人いきれで車内はのぼせる程暖かだつたが、窓ガラス一重外は如何にも寒さうな冬枯の景色だつた。青い物の殆ど見られない茶褐色の野の果には、雪をかぶつた紀伊の山脈、その手前に黒褐色をした和泉の山脈、汽車の行手には、右側に二上山、葛城山、金剛山、左側に信貴山、百足山、生駒山などが墨繪の景色のやうに眺められ、目の下の野にはときどき村落ときどき森林などが走り過ぎるだけで、人の子ひとり犬の子一びき見えない。と、見る見るうちに、先づ紀伊の山脈が頂上の方から姿を消し始め、次ぎに和泉の山脈が、それから右手は金剛山、葛城山、二上山の順に、左手は生駒山、百足山、信貴山の順に、これも各頭おのあたの方から雲の中に姿を隠し始めた。と、霧のやうな雨が降り出した。その雨は、今降つてゐるかと思ふと、いつの間にか止み、又しぐれるかを見ると、いつか薄日が射す、といふ風であつたが、そのうち外の空気が冷えて來たらしく、窓ガラスが次第にくもり出したので、大阪の町を外れる頃から殆ど窓の外の景色はか

り見てゐた健作は、ときどき指の先でガラスのくもりを拭き拭き、外の景色を眺めつづけた。その時、彼は七十七歳になる祖母を連れてゐたのであるが、出発前にちよつとした事で彼女と諍ひをしたので、その時の氣持の拗れがまだ幾らか残つてゐたのだつた。その時彼は二十歳になつたばかりであつた、まだ一月の下旬だつたから。

そんな天氣の悪い、寒さの厳しい日であつたのに、三等車の中は文字どほり満員で、祖母の方は乗込んだ時にうまく割込ましてもらへたが、健作の方は天王寺驛に來た時やつと明いた窓際の席を取ることが出來た程だつたから、彼の席と祖母の席とは、筋向ひのそれも人の首と首の間から、やつと顔を見合せられるくらゐ離れてゐた。さうしてその位置は彼等の乗換場所である王寺驛に著く時まで變らなかつた。

汽車が龜瀬峠(河内と大和の境)にかかつた頃、突然、車の中央邊——祖母の席に近い方——で「皆さん、暫くの間、お目とお耳を拜借させていただきます」と、言葉は標準語だが、大阪訛丸出しで、口上を述べる聲が起つた。見ると、一人の口上商人が左手でゴム紐で吊した章魚の玩具を操り右手でそれを指さしながら、八本の足が覽御の通り生ある物の如く動くとか、專賣特許記念として一品唯の十錢は安いとか、いふ口上を並べてから、「しかし皆さん、お土産物としては一

品では寂しい」と勿體をつけて、同じ仕掛の猿、鳶、蝙蝠、蜻蛉などの玩具を一つづつ取出し、それを五本の指に吊して前後左右の乗客たちに見せびらかしながら、最後に「すべて五品で唯の拾錢」云々といふ言葉を繰返した。

その時、ふと健作は、同じやうにその口上商人の口上と仕種に氣を取られてゐたらしい祖母が彼の方を振向いた顔と、目を見合した。と、祖母は子供のやうな表情でにツと微笑んで見せた。その時はまだ出發前の拗れた氣持が幾らか残つてゐたので、彼は本能的に目を反らしたが、直ぐ思ひ直して優しい目を送ると、彼女は先きよりも一層嬉しさうな微笑を浮べ、何か物いふやうな恰好に唇を動かして、さうして首を斜に傾けて前後に二三度振つて見せた。それはこれから訪ねて行く山目の子供の土産にあれを買つて行かうかと相談する意味であることを彼は直ぐ察したが、二十歳の彼は、大勢の人々の目の前でそんな下らぬ物を買ふのは極りが悪いやうに思つたので、顰面を作つて首を小さく強く二三度横に振つて見せた。すると、祖母は泣く子供のやうな悲しさうな顔をして向ふ向いてしまつたので、彼も反射的に悲しくなつて顔を伏せた。

暫くして今度は彼の方から祖母の方を見ると、彼女は七十七歳のその年まで小さい小さい丸鬚の附鬚を頭に載せてゐた、その小さい小さい丸鬚の附鬚を載せた頭を此方に向けたまま、未だつ

づけてゐる口上商人の口上と仕種に見入つてゐる彼女を見出した。彼は一層悲しくなつて目を窓の外に向けた。さうして涙ぐんだ目を手で拭ひ、曇つた窓ガラスを指の先で拭ふと、汽車は最早や大和の山を走つてゐるらしく、雨の代りに紛雪が降り頻つてゐた。

王寺驛に著くと、案内乗客が多かつたので、健作は、それ等の人々が大方降りるのを待つて、祖母と一緒にプラットホームに降りた。が、困つたのは乗換へる汽車のプラットホームに行くのに階段のある橋を渡らねばならぬ事だつた。更に困つたのは、一月下旬の午後四時頃のおまけに粉雪の吹曝しのプラットホームで三十分も待たねばならぬことだつた。健作は、柏原王寺間を往復するのを商賣にしてゐるあの口上商人が、今まで乗つてゐた汽車を乗捨てる、それと三分ちがひで行違ひになる汽車に乗るために駈出して行くのを見て羨しく思つた。彼は又あの小さい小さい丸髻の附髻の後姿の印象以來、老祖母を勞はる孫の氣持が俄に湧いて來たことを感じた。それには次ぎのやうな事もあつたからだ。矢張り階段のある橋を越す時のこと、あまり混雑したので、上る時は彼の方が二三段下から、下りる時は彼の方が五六段も先きになつたので氣が附いたのであるが、平地を行く時はさほど目に立たないが、階段を上る時の歩きつきは今にも腰が碎けさうに見える、それでも上りの方は幾分ましだつたが、下りる時の恰好は更に危ツかし

く見えた。それを下から見てゐた健作は、彼女が一段づつ足を踏み下ろす毎に、今に腰がぐだけて倒れはしないか或ひは足がのめつて轉びはしないか、と心の底からはらはらして氣を揉んだ。不斷氣丈な祖母が一段一段と墓穴に下りるやうに足を運びながら口の中で佛の名を稱へるやうに思へたからである。

高田町に著いた時は午後五時を廻つてゐた。雪は止んでゐた。が、寒さは益々きびしかつた。

俣が高田の町を外れる時分から急に風が吹き出した。その風はその邊で金剛嵐といふやつで、氷のやうな冷たさと嵐のやうな激しさを持つてゐた。その風が吹いてゐる間は、俣の前引をする犬が尾を下げて立竦み、俣屋は立止つて頭を垂れ、俣の上の彼等も幌が不完全なので膝から下が凍える思ひをした、俣屋が氣を利かして自分の著てゐた絆纏を祖母の膝に掛けてくれたくらゐである。幌の透間から見ると、右手に遠く聳えてゐる夕暮の金剛山の姿が、見る見るうちに、豎縞の雲にかき消されたり、暫くすると雲の中に半身を見せたり、また忽ち姿を消したりした。やがて、その山の方から横雑に吹いて來る風が吹雪となつて、そこらの小山も丘も村も森も悉く一刷毛に消してしまふ。すると地上は見る見るうちに眞白になつた。さういふ時は、犬も俣屋も出來るだけ速力を出して、最寄の村の家の軒かげに駈込んで吹雪を避ける。そのうちに、ふと風と

雪が止んで西の空の雲の透間から夕日の縞が探照燈のやうに射す。そらツ、と叫んで犬と俵屋が走り出す。と忽ちまた金剛山に豎縞の雲がさツと立つ。と、見る間に、俄に面も向けられないやうな吹雪がやつて来る。おまけに二三日前に降つた雨の跡が半分凍つて道が凸凹になつてゐる。犬と俵屋の難澁は一通りでなかつた。

こんな風で、五十町の道を不斷の三倍ほどの時間がかかつたので、健作は、道々の考へで、自分の寓居である山目の家に行く豫定を變へて、一先づ祖母を中戸竹藏の家に連れて行くことに極めた。山目の家も中戸の家も同じ高天村にあつたが、紺屋(染物業)をしてゐる山目の家より料理屋をしてゐる中戸の家の方がいろいろの點で便利であつたからだ。それに、去年の秋、健作が大坂から山目の家の離家に移住するまで其處に住んでゐた彼の母(祖母には一人娘)が、それ以來つと中戸の家の離家に起居してゐるといふ便利もあつたのだつた。尙、彼の母は二三年前から頼まれて中戸の家にゐる數人の仲居たちに三味線とその唄を教へてゐた。

祖母には中戸の家は馴染のない家ではあつたが、彼女は通された離家の部屋が自分の娘の部屋であること、半日の旅(何と長い時間に思へたらう、又よく無事にここまで来たとも思へた)の後で暖い炬燵に當れたこと、商賣柄とはいへ坐ると直ぐ運ばれた酒肴(彼女は一合ほどの晩酌を

嗜んだ)が寒さと餓さとの後で實に旨しかつたこと、殊に水入らずの祖母、娘、孫が久振りで炬燵を圍んで話すること等を心から楽しんでゐるやうに見えた。やがて夜が更けたので、祖母はそのまま泊ることにして、健作だけ山目の離家に歸ることになり、彼の母は無論祖母もそれに一應同意したのだが、いよいよ彼が一人歸りかけるのを見ると、祖母は急に盃を置いて、「わしも一緒に行きたい、」と云ひ出した。風も雪も止んでゐたが、夜深と共に寒さ冷たさは一そう厳しくなつてゐたので、「あしたお迎ひに來ます、」と彼は祖母を宥めるやうに云つて母の部屋を出た、「わしも一緒に行きたい、」とまだ子供のやうに駄々をこねてゐる祖母の聲を後に聞きながら。

彼は近道に行く爲めに、中戸の家の裏木戸から出て半町ほど野道を歩いた。凄いやうな月夜であつた。來た時は氣が附かなかつたが、金剛山の頂にも葛城山の頂にも盆景に見るやうな雪が積つてゐた。それが金剛山の左の肩の上に昇つてゐる月に照らされて氷のやうに光つて見えた。彼は立止つた。と、何處からか何かひどく物悲しい音楽が聞えて來た。その音の方を振向くと、中戸の家の二階で鳴らしてゐる三味線音楽とその唄だつた。先ほど同じ三味線音楽と唄が中戸の離家の母の部屋で向ふの座敷から聞えて來るのを聞いた時は、大へん騒しく少し煩く陽氣に聞えたことを思ひ出し、あれとこれとが餘り感じが違ふので今聞える音楽は狐の所爲かなどとまで思は

れた程、その時の彼には異様に聞えた。彼が去年の十二月の或る三晩ほど本當の狐の鳴聲を聞いたことがあるからであらうか。――

その晩、――といふより、その翌朝、「もし、もしもし、」と何處からともなく呼ぶ聲を、夢とも現ともなく、健作は聞いて目を覺ました。寢ぼけ眼を見開くと、彼の枕元に提灯を持った俵屋と顔見知りの女按摩が立つてゐた。「もしもし、」と呼んだのはその女按摩で、彼女は健作が目を覺ましたのを見ると、「お祖母さんの御様子が……」と云つた、その後「私がお揉み申して居りましたら、」とつづける言葉を、彼は半分聞いて無我無中で床の中から飛び出した。夜中であるか、夜明け前であるか、月はもう疾くに沈んでゐた、そんなことは一切夢中で、一切無言で眞暗な村の道（今度は本街道）を走りに走つた。俵屋も女按摩も、提灯を持つてゐる責任を感じて、一所懸命に健作の先きを先きをと走りつづけた。その二人と纏れるやうに駆けてゐる健作の目には、暗い道の上に提灯の明りが飛んで行くのは分つたが、何の爲めに提灯の明りが飛んでゐるか、一切夢中であつた。中戸の家の入口の大戸が開かれてゐて、明るい電燈の光が往來まで流れ出してゐるのを見ても、何故そんな夜中に中戸の大戸が明いてゐるか、何故明るい電燈の光が往來まで流れ出してゐるか、そんな事を考へてゐる餘裕がなかつた。入口のところ、竹藏の妻のお政が

「あんた昨夜、泊つて行とくはなはつたらよかつたのに……」といふ言葉を聞いた時、彼は初めて「さうか、」と思つた。

その「昨夜」の離家の方へ歩いて行くと、その縁側の暗がり立つてゐた彼の母が「健作、お祖母さんが……」と云ふのも聞き流して、彼はつかつかと部屋の中に入つた。中戸の主人竹藏、その子の丈太郎、竹藏の弟丈助、その妻のお樂、その子の雪江等の顔がおぼろに見え、最後に一番はつきり彼の目に映つたのは、もう顔に白い切を被せてあつた死者の姿であつた。その時、彼の後から彼の母と竹藏の妻が附いて來たのに、彼は氣がつかかなかつたが、後から竹藏の妻のお政が「健作さん、一遍、お祖母さん、と耳の傍で呼んでみなはれ、」と云つたので、彼は、靜かに死者の枕元に坐つて、「お祖母さん、」と呼んでみた。もとより答はなかつた。――

その翌々日の午後、大阪から健作の伯父（故人の長男）の來るのを待つて、中戸の家から葬式を出すことになつた。高天附近の習慣で、棺を納めた輿は死者の近親が運ぶことになつてゐたが、死者の長男とその孫だけではそれを運び兼ねたので、竹藏の弟丈助と祖母の死を知らしに來てくれた俵屋の坂田熊之丞（俵屋ではあるが士族といふのが自慢で立流な八字髭を生やしてゐた）とが介添役として輿を運んでくれた。

墓地は街道から半町ばかり引込んだ丘の上にあつた。そこは代々の高天村の人々の墓地と極まつてゐたので、他國者である健作の祖母の亡骸を埋める餘地（或ひは權利）がなかつたが、竹藏の斡旋でわりに好い場所を興へられた、即ち墓地の東の端になつてゐたので、後年彼女の墓石が出来上つてみると、街道を行く人々に最も目に立つた。街道から眺めると、その墓はちやうど高天山を背景にしてゐた。その墓石の裏側に『旅に病むで夢は枯野をかけめぐる』と刻まれた。或る時、健作がその墓石を建てた伯父に「あの文句は誰が作つたんです？」と空惚けて聞くと、「何でも昔の大學者が作つたんやといふことや」と伯父は答へた。

健作が初めてこの村の名を知つたのは、彼が中學校に入學した年の秋、彼の母が、それまで彼と彼の祖母と一緒に同居してゐた彼の伯父（彼女には兄）の家に居辛くなつて、突然山目の家に身を寄せるやうになつてからだつた。その山目も、若し彼女がその家に行かなかつたら、その名を聞き知るぐらゐで、一生交際も往来もしなかつたらうと思はれる程の遠縁の親類だつたが、彼女がそこに寄食するやうになつてからは、彼は毎年の夏休に出かける習慣になつた。しかし元來都會そだちの彼は、出かけて見ると、高天村のやうな片田舎の生活、殊に山目の家のやうな地味な

生活には直ぐに飽き、豫定の日數より少なく（せいぜい三四日）ゐて切り上げるのが常だつた。

それから四五年たつて、中學校を卒業した春、彼も亦、それまで世話になつてゐた伯父の家にいろいろな事情で居辛くなり、また彼の志望する學科が彼の學資を受持つ筈の或る親類の氣に入らなかつたりして東京の専門學校の入學期日に後れたり、そのうち彼自身が脚氣病にかかつて四月ほど寝込んだりした結果、その年の秋、彼の母が寄食してゐた高天村の山目の離家に移住することになり、（それと一緒に彼の母が中戸の離家に越した事は前章に述べた通り、）そこで彼は十九歳の年を送り二十歳の春を迎へたのであつた、（これも前章でちよつと述べた通り。）

住んで見ると、高天村は自然人情とも悪いところではなかつた。先づ自然に就いて述べると、葛城郡は、可なり景色のいい所だ。同じ大和でも北の方の郡山や法隆寺あたりのやうな平凡な退屈な平野でもなく南の方の吉野あたりのやうな狭苦しい山間でもなく、丁度その二つを搗き交ぜて造化が工夫を凝らした所と云つたやうな所だ。例へば高天村に最も近い高天山に登つて四方を見渡すと、恰も海の中に數多の島嶼が散在してゐるやうに、手頃な高さの山や丘が箱庭の景色のやうに竝んでゐる。その中で最も大きく最も名高いのが畝傍山、天香久山、耳成山で、その間を萬里の長城の模型のやうに見える葛城川の堤が縫うてゐる。さうしてそれ等の小山や丘たちを

保護するかのやうに、三輪山、高見山、三峰山、龍門岳、吉野の山山、金剛山、葛城山などの大きな高い山山が遠く近くとりま圍繞いてゐる。それから林だ。林の木は殆ど櫟であつたから、秋になると悉く紅葉した。殊に彼が高天村の生活に幾らか慣れて散歩を始めた頃は、それが最も見事であつた。彼が好んで登つた高天山の頂上には他のどの山にも見られない廣い草原があつて、その草原の中央に可なり大きな池があつて、その池の周圍には櫻の木が植わつてゐた。その櫻の木も悉く紅葉した。この高天山の頂上の草原を土地の人々は高天原と呼びそこが昔昔國の初の神が住んでゐた所だと言ひ傳へてゐた。それを最も強く信じ且主張したのは中戸竹藏であつた。この話が出ると、彼はいつも「何んしよ大和は國の始まりやと云ふし、この邊を『國中』ちふのは大和の國のまん中やからと云ふ話やないか、現に天理さんのお經にかて、『高天の原に神留ります』ちふ文句があるやないか」と附加へるのが常だつた。これは健作も二三度聞かされたことがあつた。尤も、この高天原説は、竹藏ばかりでなく、博學な歴史家達の考説にも、大和國説、日向國説、常陸國説、伊勢國説、甚しいのは朝鮮説、南洋説等あるから、竹藏が向になるのも無理がないであらう。

つも竹藏の家(即ち料理屋)の店の間に極まつてゐた、それは『相手變つて主變らず』つまり竹藏がいつも話の中心であつたからでもあるが。その店の間には、冬は、真中に六七人ぐらゐ當れる大きな瀬戸火鉢が据ゑられ、その他に小型の瀬戸火鉢が隨所に置かれ、正面に大きな帳場格子に圍はれた帳場があつて、商賣が忙しくなるか日が暮れるかすると、その帳場の簿記臺の前に竹藏が坐り、その竹藏の傍にこれ亦大きな長火鉢が据ゑられてあつて、その銅壺の中には爛德利が二本ならんで浸つてゐた。私がこの部屋の中の道具類に悉く『大きな』といふ形容詞を被せたのは、決して實物以上に誇張したのではないが、その道具類の主人でありその道具類に君臨してゐる竹藏が人並はづれて小柄であることを表現したかつたからである。それに、因んだ一の挿話を紹介すると、彼は若い頃放蕩に身を持ちくづし果は専門の博徒の仲間に入りその仲間の中でも小柄のくせに引けを取らない巧さがあつたので、『ちんこ竹』と綽名を附けられたほど幅を利かしたといふ話である。併し、五十歳の坂を越して一層小さくなつた竹藏がその大きな帳場格子の向側にちよこなんと坐つて大きな長火鉢の傍でお燗番をしてゐる恰好は、今はその唯一の昔を思ひ出させる凄味のある目も皺の爲めに惠比須三郎型になつてゐたので、そんな昔の挿話を聞知つてゐても、健作が竹藏から受けた印象は、その容貌性格ともに徹頭徹尾好好爺の感じであつた。又、竹藏の

方でも年齢も教養も性質も境遇もあらゆる點で全く違ふ健作に他の人々が怪しむほど好意を持つてゐた。それはあらゆる點で全く違つてゐたから双方とも好意を持合つたといふ事も一つの理由であらうが、何が彼等をそんなに親しくしたかといふ第一の理由は、竹藏の一人息子（實は甥に當るが藁の上から貰つた）の丈太郎と健作とが親しかつた事であつた。それは、健作が中學生時代に夏休毎に高天村に來始めた最初の時から知合ひになり、丈太郎の方でも大阪へ行くと必ず健作を訪問したといふ程の親しさだつた。丈太郎は、健作より四五歳下だつたが、小學校の優等生の彼は物心つく頃から周圍の人たちが無智な事を物足りなく思つてゐたので、中學生の健作に初めて會つた時から珍しさと尊敬と親しみとを感じたのだつた。さういふ關係があつたので、健作が高天村にたとひ半年程にせよ移住してから、健作も話相手がないので、双方から訪ね合ふことになり、一日に一度か二日に一度ぐらゐは必ず會ふやうになつた。これが竹藏を喜ばしたといふのは、竹藏は竹藏の見解から、自分の子が健作のやうな友達を持つことを得とし、彼自分もかういふ客商賣の帳場に坐るやうになつて急に知識を欲する氣持が起つてゐるところだつたから、健作のやうな青年の話聞くことに非常に興味を覺えたのである。——竹藏が他の人々が怪しむほど健作に好意を持つた所以である。

この店の間はそんなに大きな火鉢だの別の小型の火鉢だのと多人数の用意はしてあつたが、不斷は大抵健作と丈太郎がその火鉢を占領して、彼等だけに通用する話、つまり戦争の話だの、外國の話だの、歴史の話だの、或ひは社會主義の話だのをしてゐると、時々耳寄な話があると、帳場から竹藏が例へば社會主義に就いて健作に質問する、それに健作が成るべく竹藏に分りよく説明する、と、竹藏が「左様や、左様や、……ふむ、つまり、何やな、よう考へると、それも矢張り國の爲めやろな、國の爲めなら、ちよつと位警察にねらまれてもやり通そちふんやな、ふむ」といつた風に口を挟む、すると今度は丈太郎が眞面目になつて社會主義に就いてもつと委しい説明を健作に求める、健作が又別の説明をする、帳場から竹藏が聞耳を立てる。その間には、奥座敷の方から長い廊下を踏みつつ受持受持の仲居たちが間斷なく爛番の竹藏の所へ爛徳利を取りに來る。時に新しく浸けた徳利の爛が間に合はなかつたりすると、「ちよつと御免やす、ちよつと當らしとくなはれんか」と云つて安髮油の匂をさせながら、仲居達がかんかん火の熾つてゐる方の大きな火鉢に手をかざしに來る。すると、その時は竹藏の目が惠比須三郎型から忽ち博徒型に變り、何か穢らしい者を追ふやうに、「おいおい、お前ツちはあつちの火鉢へ當れよ」と叱り飛ばす。少年の丈太郎もその尾に附いて、「そつちイ行つてえ、邪魔ンなる！」と呶鳴る。

しかし、かういふのは言はば竹藏の家の間の日常茶飯事であるが、何といつても、そこは田舎の料理屋の帳場部屋でもあるのだから、いろいろな人々が出入した。上口おくりぐちに腰かけたまま用談だけ済まして歸る者や、例の小型の火鉢を抱へて物待顔の人や、つかつかと上つて来て長火鉢越しに竹藏と一口二口話して歸つて行く者や、例の大火鉢の傍に坐り込む者や、——さういふ人は健作の印象に止まらなかつたが、その中で表からでなしに奥の住居すまひの方から出て来て大火鉢の傍に坐る人たちは、竹藏も丈太郎も改めて健作に紹介しなかつたが、彼はその人たちと顔を見合したり言葉を交したりするうちに何時いつとなく彼等の素性を知つた。一ばん先きに知つたのは、四十歳餘りの、青ぶくれした、浮腫むくんだやうな顔のひどくむつりした女で、丈太郎が「叔母はん」と呼んでゐたので、丈助の妻のお樂と知つた。その次ぎは、生白なましろい色の、何處といつて顔立に缺點はないのだが、女らしい魅力の少しもない、これもむつりした、二十位の女だつた。後で健作はこの二人が親子と聞いて、初めて似てゐることに氣がついた。

その頃の或る晩、健作と丈太郎が例の通りの話をしてゐると、健作の母と丈太郎の母が大火鉢の傍にやつて來たので、彼等が話の腰を折られてちよつと口を噤しぼんだ時、一人の見慣れない四十歳餘りの大きな恰幅ちやうぷの男が住居の方から出て來て、

「や、皆はん、今晚は、」と無骨な挨拶をしながら、火鉢の方へ歩いて來た。が、どういふ譯か、その男は、二人の女達が席をゆづつたにも拘らず、火鉢から少し離れた所に坐つて、及腰になつて火鉢の縁に手をかけた、「まあ、もつと此方こつちイ、」といふ言葉にお辭儀だけして。その時、珍しく健作の母が彼にその男を紹介した。

「ここのをぢさん(竹藏のこと)の弟さんの丈助さん。」

これが健作と中戸丈助の初対面だつた。が、この初対面の印象は甚だよくなかつた。兄の竹藏と比べると、巖いはのやうに頑丈な大男であるが、頬骨と願の骨が尖つてゐるので七厘のやうに眞四角に見える顔は、笑ふと大きな齒が見えるのが唯一の愛嬌だつたが、目附といひ、鼻の恰好といひ、殊にその分厚な唇は、阿弗利加邊の土人の顔を思はせるものがあつた。その上、無口なせゐか幾らか吃るやうな癖があつた。

「はア、わしは竹藏の弟だす、どうぞ……」と丈助は健作の方を向いてお辭儀をした。健作もお辭儀し返して、「どうぞ、」と丈助に火鉢の傍に來るやうに手で會釋したが、丈助は口の中で挨拶の言葉を返しただけで、相變らず及腰の恰好のままだつた。が、その時の丈助の及腰の恰好は何故かその後いつまでも健作の頭に残つた。

その翌日、健作は母が訪ねて来た時、昨夜初めて見た丈助の印象をありのままに彼女に話すと彼女は「まあ、田舎の人といふもんは、形振にかまはないもんやから」と辯解するやうに、「しかし、人は實にええ人やで、まあ一寸あんなええ人も珍しい」とそこで聲を潜めて、「あの人と比べたら、竹藏はんはずつと腹が悪い」と云つた。その後で、母は、丈助に就いて、彼がこれ迄ずつと朝鮮の方へ行つてゐた事、朝鮮では何度も何度も萬の金を儲けた事があつたのだが、あまり人間が正直な爲めに儲けた金を人に貸して無くしたり人に騙されて損をしたりして、今では元の木阿彌になつて歸つて来た、と話した。が、それは、話だけの事であるから、まだ昨夜の印象が頭に残つてゐる健作には、半信半疑であると共に興味がなかつたが、「最後に母があの人もひよつとしたら東京へ行きたいやうに云うてはる」と云つた言葉が健作の心を打つた。彼自身高天村に来てから、東京、學校、學問、といふ言葉を一日として忘れた事がなかつたからである。彼は、今の先きまで輕蔑——確に輕蔑してゐた丈助が、この人も亦志を立てて東京へ行く、と考へると、自分の事のやうに嬉しくなり、急に丈助が頼もしい見處のある人間に思はれ出した。

その日の暮れるのを健作は待兼ねた。彼が中戸の家に行くのをこんなに楽しみに思つたのは初めてだつた。彼は急に丈助に會ひたくなつたのだ。中戸の家の店には、いつもの通り、帳場格子

の向ふに竹藏が坐り、彼が来るのを丈太郎は待兼ねてゐた。竹藏も丈太郎もいつもの通りの上機嫌だつた。が、健作は何か落着かなかつた、落着かないやうに見えた。その爲めに、何時ものやうに丈太郎との話のはすまなかつた。年の若い丈太郎には、氣が附かなかつたが、突然、帳場格子の中から竹藏が「健作さん、お前はん、今晚、氣分悪おまへんか」と聞いた。「いいえ」と彼はなるべく平氣を装つて答へたが、いざとなると惠比須三郎の目が博徒の目に變るところの竹藏の目を感じて、何か見透かされたやうな氣がした。が、さすがの竹藏も健作が落着かなかつた原因が丈助に會へなかつたと云ふ事までは見透せなかつた。

健作は山目の離家へ歸る道道考へた。考へて見ると、あまりに愚だつた。何故といふのに、彼がこれまで中戸の家を訪問した何十日かの間に丈助に會つたのは唯の一度、而も昨日初めて會つた、たつたそれだけの事に考へが及ばなかつた事を道道考へたのであつた。彼はその翌日から今までと方針を變へて勉強をすることにした、それも段々に。中戸の家を訪問することも段々に減らし、無闇に散歩に出ることも追々に減らす、といふ風に。さうして彼はその通り實行した。彼の寄寓してゐる山目の離家は、彼の母の寄寓してゐる中戸の離家と違つて、實に靜かで、勉強するにすむぶん都合がよかつた。その部屋は、東向きに一間の窓があつて、窓を開くと、三峰山、

一名大和富士と呼ばれる山が真正面に見えた。その窓の下に机を据ゑてあるので、窓さへ明ける
と、その秀麗な形は晴れた日ならいつでも眺められた。その山は彼の氣を落着けた。上口の縁側
は西向きになつてゐて、中庭に面してゐた。その中庭の右手に母家があり、その中庭の向ふは隣
家の土塀と屋根に區切られて、晴れた日はその上に蒲團を被せたやうに葛城山の姿が迫つてゐた。
その美しい葛城山は彼の心を静めた。その中庭には所々に紺を溜める壺が埋めてあつて、晴れた
日はその上に染物の切が小學校の運動會の旗のやうに張廻してあつた。その中庭の左手には納屋
を直した機織小屋があつて、そこからは朝から晩まで箴の音と機を織る二人の姉妹の娘の合唱の
唄が絶えず聞えた。その音と唄とは彼に力を附けた。姉妹は二十三歳で妹娘が彼と同年の十九歳
だつた。葛城郡では男より女の方が働くと云はれるのはこの機織仕事のこと、その爲めに娘た
ちの婚期が後れるといふ。——さういふ部屋に落着いて、勉強する日の方が次第に多くなつた。
翌年の二月中頃の或る晴れた日、健作は何日振りかで散歩に出た。祖母の墓に參つて久振り
高天山に登つた。この時、彼が祖母の墓に參り高天山に登つたのは、その前の日、或る本の中で
「春過ぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたりあめの香久山」の歌人、持統天皇の別の御名が「高天
原野の姫天皇」と申上ることを發見し、「よそにのみ見てややみなん葛城やたかまのやまの峯の

白雪」「よそに見て神やぬれなん常陸なる高天の原の沖つ白浪」「かつらぎの峯の白雲かをるなり
高天の山の花さかりかも」といふ三首の古歌を發見した、——とそんな幼稚な發見の嬉しさから、
高天原に登りたくなり、天香久山を眺めたくなり、——とそんな幼稚な氣持で、山目の離家を出
發したのであつた。

ところが、祖母の草葉の蔭からの祈りの爲めか、竹藏の所謂「天理さん」の「高天原に神留り
ます皇」の御蔭か、その高天原で彼は思はぬ拾物をした。といふのは、高天原の池の邊のベン
チで、そこに休息してゐる中戸丈助に出會つたからである。初對面以來だ。

「あなたも東京においでになるさうですが、いつ頃……？」と健作は丈助に聞いた。

「うむ、いつ頃ちうても、當はないんだすがな、」丈助はひどく恐縮の體で、例の吃る癖のある言
葉で答へた。

「やつぱり何か御商賣で……」

「うむ。……商賣も商賣だんが、元も子もなうしてしもたさかいに、」と丈助は元氣のない調子で、

「しかし、私ももう西の方は飽いたから、今度は東へ行きたいと思つてまんね。」

「いつ頃行くつもりです？」と健作は同じことを聞いて見た。

「さあ、いつ行けるやら、まだ當がつきまへんね。それに私みたいに、かう、する事なす事失敗すると、もう商賣の見當が皆目つかんわ。何ぞええ商賣おまへんやろか？」

健作自身先きの當が附かなくて迷つてゐた時だったので、他人の商賣など考へる餘裕がなかつたので、彼は答へる術を知らなかつた。それにしても、初對面の翌日、母から丈助に上京の志のあることを聞いた時と同じやうに、「ここにも東京に行かうといふ人がある」といふ発見だけでは、氣をよくし、丈助を頼もしく思ひ、また味方であるやうな氣がして來た。

その時、丈助が突然、

「お前はこれから新しうやり出す人やし……私もこれから一等卒から出直すつもりやから……さう考へると、私の方が古參かな……」と云つた。

健作はこの丈助にしては珍しい言葉にちよつと目を見張つた。――

さうして四月になつた。あの學資を受持つ筈の父方の或る親戚との相談が一寸したことから纏つて、健作はいよいよ「花ざかり」の高天村から東京へ出發――移住することになつた。木々は紅葉の代りに緑の新芽で装はれた。高天原の池の周圍の櫻の木々が紅い芽を含み出した。遠く北の方の奈良の山が紫色に霞んで見えた。

健作が出發する朝、竹藏は村外れまで、丈助と丈太郎と彼の母は高田驛まで見送つた。汽車が
出る時、彼が丈助に、

「きつと東京へいらつしやいませんか？」と云ふと、

「きつと、きつと行きます、何とか都合して、今年はあかんかも知れんけど……」と丈助はわりにはつきりした言葉で答へた。

丈助が高天村を立つたのは、後れ後れて、健作が東京に來てから三年ほど後のことであつた。或る日、彼の母から手紙が來て、「丈助さんがそちらに行かれたら、お前の下宿に訪ねて行かれるだらう、丈助さんにお前に屈ける物をお頼みしておいた。丈助さんの東京の所は直ぐは極らないだらうが、極つたらお前の方からも一度訪ねてお上げ、あの人は本當にいい人だから、」といふ意味の文句を讀んでゐるところへ、階下から小僧が上つて來て、丈助の來訪を告げた。小僧といふのは、當時健作が間借をしてゐた子供靴屋の小僧で、彼はその二階で自炊生活をしてゐたのだ。彼の生活は初年期を通過した文科の學生の一般に洩れず大分亂れてゐた。その證據に、學校が牛込にあつたのに、その間借りしてゐる家は淺草であつた。そこへ、中戸丈助が、母からの手

紙にある通り、彼女から頼まれた羊羹とネルの着物の入った風呂敷包を持って訪ねて来たのであった。彼は先づ丈助がいよいよ東京に出て来たことの喜びを述べて、

「お一人ですか、お住居は？」と聞いてみた。

「いいえ、足手まとひを一組連れて来ましてん。」丈助は三年前と同じ着物を着てゐるかと思はれるやうな少しも變らない恰好をしてゐた。「何しよ、さういつ迄も兄貴のところで厄介になつてゐる譯に行かんさかいな。お前は、知つてなはるやろ、家内と、娘と孫を連れて来たんや。」孫といふのは健作が上京した年の秋生れたといふことを彼は後で聞いた、秀夫といふ名も。丈助はつづけた。「今はちよつと知合ひの家に泊めてもろてるんやが、それも腰掛みたいなんやさかいな。私もこんな二階があつたら借りたいな。……」

「それで、商賣の方は……」

「その商賣やが、……」丈助は持前の吃るやうな調子で考へ考へ、「商賣といふ商賣は大方し盡したやうな氣がするネ、私のやうなもんに出來る商賣はナ。……私は日露戦争の後を追駈けて朝鮮に出かけたんやさかい、日本人の入るもんなら何んでも彼んでも賣つて見たよ、油でも、米でも雜貨でも、道具でも、着物の切でも、何ちふことはない、手當りばつたりやつた。ここにある、」

と丈助は健作が前の晩に食べ残した甘栗を指さして、「こ、この支那栗なんか、うんと仕入れたところがある、あんまり買ひ過ぎて、入れ場に困つて、軍隊の藏を借つて入れてもろたところオが、それを二た月ほどして取りに行たら、袋だけちやんとあつて中明けて見たら、お前は、みんな空つぽの殻だけになつとオるんや。兵隊がみな食ひよつてん。えらい目に遭うたな、あの時は……」

「それにしても、何か外に商賣の見當がないんですか？」

「皆目あれへんね、東京ちふところが初めてやからな、見當がつかんね。」丈助は眞から困つた顔をして、「私、今度兄貴から二百五拾圓もろて来たんや、まだ二百二十何圓ぐらゐ残つてゐるが、ぐづぐづしてるとこんな金ぐらゐ直なうなつてしまふさかいな、朝鮮でさんざん經驗した事がある。……」健作は丈助とその後切々に二十年餘交際したが、二百二十何圓持つてゐる時も五萬七千圓持つてゐる時もありのままに自分の持つてゐる金高を告白する丈助を珍しい人だと思つた、殊に、商人で通した丈助を。その時、階下からガラガラといふミシンの音が聞えて来たのを健助は聞答めて、「この階下の家なに商賣してはんね？」と丈助は健作に尋ねた。

「子供靴ですよ、」彼は答へてから、初めてこの家に引越すことになつた時、かういふ商賣もある

ものかと不思議に思つたことを思ひ出して、ふと斯ういふ商賣が今の丈助に向きはしないだらうか、これなら二百圓の元でも出来るだらうと思つたので、「變な商賣ですが、かういふ商賣を手始めにやつて見たらどうです？」と云つて見た。さうして方々の洋服屋から羅紗の裁屑の切を買ひ集め、それを子供靴の型に切りミシンで製造してゐる階下の家の商賣を、自分の知る限りの知識で出来るだけ易しさに、如何にも儲かりさうに、例へば切を買ひ集める事は丈助が受持ち、子供靴の型に切つたりミシンを使つたりする事は細君と娘にさせたらいいだらう、といふ風に彼が話すと、丈助はすつかり乗氣になつた。すると、彼も乗氣になり、「そんなら、かうしませう、實は僕の學校は牛込と云つて、ここから電車で三十分以上かかる所にあるのです、ちよつと譯があつて半年ほど前からこんな所に引越したんですが、矢張り學校の近くの方が何彼につけて便利ですし、それに先月あたりから自炊にも飽きたもんですから、近頃は毎日近所の飯屋へ三度三度飯を食ひに行つてゐるのです、それでは時間と金の不經濟ですから、近々學校の近くへ引越さうと思つてたところなんです、と自分の境遇と或る友人の境過とを混淆にして、そこはお手の物の小説作法を應用して、後先の考へを忘れ、有耶無耶のうちに、現在自分の借りてゐる部屋を提供することになつてしまつた。これは云つてしまつてから若干後悔したが、もう遅かつた、何故なら、

「いや、それでは、それではあんまり氣の毒や、それでは私が濟まん、お前はんにも濟まんし、お前はんのお母はんにも濟まん」と類稀な遠慮家(諸君はその例を高天村の竹藏の店間で健作と丈助が初對面するとき丈助が及腰になつて火鉢に當つた事を覚えてゐるだらう)の丈助が、後ずさりせんばかりに彼の申出を辭退したからである、否、丈助は本當に後ずさりして、いつの間にか梯子段の下口の近くまで後ずさりして、隙があつたら、逃げて歸りさうになつたからである。さうなると、今度は健作の方があわて出した。彼は手附で丈助を止める恰好をしながら、その方が彼自身にも都合がいいこと、現に牛込にゐる友人からその友人のゐる下宿に適當な部屋が明いてゐるといふ知らせを今先き受取つたばかりだとか、突然ここを明けると借手が見附かるまでの間代を拂はねばならぬ約束になつてゐるからとか、いよいよお手の物の小説作法を應用して、嘘と本當とを混淆にして、責め立てたので、さすがの遠慮家の丈助をも口説き落してしまつたからである。尤も、それは丈助の方でも願つたり叶つたりであつたに違ひなかつた。彼は後になつてその時のことを回想して、「私はお前はんのあの時の恩を忘れへん、あん時はお前はんは私に藁を掴ましてくれたやうなもんや」とまで云つた。

その後、健作が本當に牛込の友人の下宿に引越してから、丈助は彼を二三度その下宿へ訪問し

たことがあつたが、彼は、丈助が上京當時母が遺した手紙の頼みを忘れたのではなかつたが、一度も丈助を見舞つたことはなかつた。それどころか、その頃の彼は、丈助のやうな風采の男に訪ねて來られることは、青年らしい虚榮心があつて、友達や下宿の女中の手前迷惑を感じたが、都合のいいことには、こんな場合にも丈助が持前の遠慮癖を發揮して、いつでも玄關まで來るだけで、決して部屋まで上つて來なかつたので、彼は友達や女中に尋ねられると、郷里の親類の小作人か下男のやうに吹聴しておいた。しかし、彼の部屋の窓から歸つて行く丈助の後姿を覗くと、その頃の彼はいつの時でも大きな鬱金色の風呂敷包を背負つてゐた。それを見ると、彼は、寧ろ愚直といつてもいい性質の丈助が、彼の忠告どほり、自分は階下の子供靴職の裁屑買出人兼子供靴行商人になり、彼の妻と娘を子供靴の職人にしたことを思ふと、心に一種の堪へがたい痛みを感じた。かういふ丈助は、或る時、健作の留守中に新聞紙に包んだ羅紗製のスリッパを下宿の女中に托して行つた。それには「娘雪江のこしらえた品に候」と認めた紙切が張つてあつた。かういふ事も健作の心をいたく打つた。

そのうちに、丈助の所謂新規時直しの商賣が追々忙しくなつたのと、健作の境遇にもちよつと變化があつたりしたので、二人の往來といふより、丈助が訪ねて來なくなつたので、暫く絶え

た形になつた。さうして一年餘りの日が立つた。――

或る日、年に二三度しか便りのない高天村の母からの手紙に、近いうちに竹藏が商賣換へをすゝる、その爲めに小さい家に越す、それを機會に上京したい、と書いてあつた。これは彼を可なり狼狽させた。といふのは、既に彼の學業も終に近づいてゐた、従つてこれまで親戚から送られてゐた學資が來なくなる、といつてまだ自分一人が自活する自信がない、そんな所へ突然母を迎へなければならぬ、と考へると思案に暮れない譯に行かなかつたからである。が、彼のさういふ心配には頓着なく、でもなかつたであらうが、それから半月ほど後の或る日、彼の母は突然半込の彼の下宿の玄關に現れた。これは通さない譯に行かなかつた。併し、親子でいつ迄も下宿住居もして居られないので、無理をして本郷の或る町に小さな借家を見つけて引越したが、早速その月の末から生活難に遭遇して、彼は母の持つて來た衣類を少しづつ金に換へ始めたりした。――

彼の母の話に依ると、中戸竹藏が商賣換へをしたのは次ぎのやうな理由だつた。その前に、竹藏の容貌を簡単に紹介すると、(前の章ではその體と目だけだつたから)彼の鼻は全體は小さく平べつたい形であるが先の方が剃刀のやうに尖つてゐるところに、その生附の鷹のやうな目と好一對をなしてゐた。その點で、丈助がその性質をその容貌に表してゐるやうに、竹藏もその性質を

その容貌に表してゐた。それは、一口に云ふと、目先の利く、思ひ切りのいい性質であつた。その證據は、先きに述べたやうに、博徒時代には博徒として幅を利かしてゐたのが、一旦改心して料理屋を開業すると一切の博奕を止めてしまつた事でも分るし、今度また可なり繁昌してゐた料理屋を止めてその正反對の萬屋(金物と瀬戸物と主とした)に改業したのは、跡取の丈太郎の氣質と健康(虚弱な質であつた)を考へての結果である事を見ても分るであらう。

さて、健作の母は、上京してから半年ほど後、健作が以前間借してゐたのを居退で譲られたのをそのまま淺草の子供靴屋の二階に住んでゐる中戸丈助を訪問した。すると、義理固い丈助はすぐ翌日健作の家を訪ねて來た、その時、彼は、あの青ぶくれした、浮腫んだやうな顔の妻のお樂と、生白い色の、女らしい魅力の少しもない娘の雪江と、雪江は背中に四歳になる秀夫を背負つて、一家總手でやつて來た。彼は健作の家の小ぢんまり片附いた表面だけ見て、

「お前はん達は結構やな、私たちはこれからや」と軽く歎息しながら云つた。その時も彼の遠慮癖は相變らずで、彼の妻や娘が無作法に座蒲團の上に薦足で坐つてゐるのに、彼だけは幾らすすめても、「いや、いや」と後ずさりして、到頭歸るまで座蒲團を敷かなかつた。彼の妻のお樂も娘の雪江も共に丈助に似て無口だつたが、同じ無口で口下手でも丈助のには巧まない自然の朴訥

さと愛嬌のやうなものがあつた。唯、雪江の子の秀夫だけ變つてゐた。彼は母親の背中から下ろされると、初めのうち暫くの間は羞んでゐたが、少し馴れると皆がはらはらするやうな悪戯を始めた。それを一ばん氣にしたのは丈助で、彼は始終、「これ、秀夫、これ」と窘めてゐたが、變な子で、手足の運動は同じ年頃の子供並に活潑であるのに、言葉らしい言葉が一言も發音出來ないらしいのだ。――

「あの子は少しをかしいんだよ」と彼等が歸つてから、母が健作に云つた。

「さういふと、雪江といふ人も少し變ぢやないですかね」と健作も云つた。「それから、あの雪江といふ人のお母さん――丈助さんの細君だつて、何だか變だな。」

「いや、お樂さんは、あれで中中しつかり者や、雪江さんはお前のいふ通りちよつとをかしいけど。まあ、あの娘はんと孫の秀夫はんは丈助さんの一生の苦の種やろな。」――

その時、丈助が健作に云つた。

「私たちはまだこれからがひと苦勞ですが、お前はんは大學まで出なはつたんやから、お母はんももう安心やろ、……」(そこで彼の母の方を向いて)「これからは出世するばかりやから樂しみだな。……そこへ行くと、何しろ私は東京は初めての土地やし、と云うて、もう西の方では散

々な目に遭うたさかい、まアかうして東へやつて来たもんの、商賣ちふもんは馴染のないところは中中むつかしいもんやさかいな。まア、しかし、お前はん達がゐてくれはるよつてに心強う思ふとる、何分なぶんよろしうお頼ん申しますわ。」

この丈助の謙虚な心から出る言葉の一つ一つは大袈裟にいふと健作の心に一つ一つ針だつた。

この針の苦しみは丈助夫婦はいふ迄もなく彼の母にも分らない苦しみであつた。彼は丈助が「未だこれから一苦勞だす」と云ふのを聞くと、同じ人が高天原で「これから一等卒から出直すつもりや、」と云つたことを思ひ出して、心から羨ましいと思つた。彼は考へた。——今の自分には殆ど希望はないが、丈助には一足でも多く子供靴を賣り妻や娘が少しづつでも子供靴の裁ち方やミシン使用法を上達すれば、といふ心に希望と張りがある。それに比べると、自分が今かじり附いてゐる賣文業者の下請仕事など、いつも仕事とだが跡絶え勝だし、稀にあつても、それをミシンの機械を廻すやうに幾ら精出してやつたところが、約束の金の半分三分の一はおろか、全く呉れないことさへ珍しくない状態だ。——尤も、彼の傍に坐つてゐる彼の母の思ひも彼の思ひと大差なかつたに違ひない。——彼女は長年その成人を待つてゐた一人息子の傍そばに来て見ると、何なにから何迄思ひの外の事ばかりだつた、今に今にと辛抱はしてゐるものの、かうして傍に来て息子の様子

を見てゐると、どう最負目に見ても、出世の方に向つてゐるものとは思へなかつたから。——彼女も丈助の言葉を聞いてさぞ後目痛うしろめく思つたのであらう。

「いいえ、私のところもまだまだほんの書生ですから、なかなか思ふやうになりません、」と彼女は訴へるやうに云つた。

「それでも、お前はん達が此方こつちにゐるさかい、私わがらの方もどんなに心強いか知れまへん、お互ひや。」

「あんた、急に年としとりなはつたな、」と珍しく丈助の妻が傍から口を挟んだ。

「ええ、もう臺所の事から世帯しよたいの苦勞から……高天の方で御厄介になつてゐた時分が一ばん氣樂きらくだしたわ。」

その時から、健作の母はときどき淺草の丈助の家に出かけて行くやうになつた。それは、その時から間もなく、丈助がこれまで間借をしてゐた家の近くに、階下二階一間の家を借りて、その二階は職人に間貸したが、兎に角一軒の家の主人になつたからである。言ひ換へると、此間まで職人として間借をしてゐた丈助が今度は職人に間貸をすることになつた譯だつた。健作も二度その家を訪問したことがあるが、丈助の前に彼が二階借をしてゐた子供靴屋と違つて、丈助

「……實はナ、お樂が昨日から病氣で寝てまんね。それが、醫者の見立にちよつと質がよらないらしいね。たつた一日寝た切りやのに、昨夜、突然、あの氣丈な奴が高天へ往にたい往にたいと云ひよつて困つた。高天へ往んだかて苦しいのは同じこつちやけどな。私にはあいつが國イ往にたいちふ氣持が分るやうな氣がするけど、あんなこと云やがると私まで心細なるさかいな。……今、あいつが……もしかの事があると、……雪江と秀夫だけになると、……」

健作の母はちよつと涙ぐんだ。が、丈助はまだ何か云ひ足りない事があるらしく、また二分間ほど口をもぐもぐさせてから、「……こんなことは愚痴やが、……」と後にもう少し言葉がつづいて、結局、丈助は五圓の金を借りに来たのであつた。

その翌日の晩、健作の家に客があつて、それに夕飯などを出したので、少し遅くなつて、彼の母はお樂の病氣を見舞に行つた。不斷シン臺の据ゑてあるところが片附けられて、そこにお樂が寝てゐた。狭い家だから入口の戸を明けると、直ぐお樂の病床が見えた。丈助と雪江と秀夫の外に二階の職人が二人坐つてゐた。建作の母と入れ違ひに職人の一人が表へ出て行つた。醫者を急がしに行くらしかつた。

健作の母は丈助と雪江とに目で挨拶して、靜かに病人の枕元に進んで坐つた。不斷から青く浮

腫んだ顔だつたが、それが一層浮腫を増して目がひどく落込んで見えた。病人はちよつと目を明けたが直ぐ閉ぢた。彼女は數年前自分の母（健作の祖母）が死んだ時のことを思ひ出した。それから次ぎ次ぎと嘗て自分がその臨終に逢つた人々の顔を思ひ出した。彼女は靜かに目を閉ぢて溜息をついた。さうして靜かに立上つた。彼女が病人の傍を離れて次ぎの間の中程まで來ると、打沈んだ顔をした丈助が立上つて、彼女を二階に誘つた。そこで、彼は、病人が今夜ちゆう、といふより、もう一時間以上も持たないらしい事を彼女に話してから、又二分間ほど口をもぐもぐさせた。今度は直ぐ彼女はその意味を悟つた、何故なら彼女は丈助から金を借りられたのは昨日が初めてで、こんな風に長いあひだ口をもぐもぐさせる丈助を見たのも昨日が初めてで、今日が二度目だつたからである。そこで、彼女は丈助が口を明かぬ先きに、「これだつか」と素早く指で輪の形を作つて見せてから、一枚の札を丈助の懐の口元にそつと挟んだ。「濟まん、濟まん、……これで葬禮が出せる」と丈助は後の半分は口の中で云つて目に涙を溜めた。

その晩、お樂は死んだ。その翌朝の夜明け前、まだ暗がりの中を、お樂の亡骸を納めた棺を載せた黒塗の輿は、黒装束をした二人の男に前後を擔がれ、同じ黒装束の交替役に附添はれ、健作の母と二階の二人の職人と三人に送られて、日暮里の火葬場に向つた。それを、丈助と、雪江

と、母に呼ばれて駈けつけて来た健作との三人が見送った。

棺を見送つた後で、暫くしてから、丈助が健作にぼつりぼつりと切つた言葉で話した。

「お前は私より古うから東京にゐるんやから、何ぞええ考へおまへんか、私に出来る商賣で？ せつかく教へてもろた子供靴がこんな事になつてしても全く途方に暮れたよ。そこへお樂がこない急に死んでしまひよるし、雪江では何ぼの働きも出来へんさかいな。それに秀夫にだんだん手がかかるやうになるし、……」

丈助が愚痴をこぼしたのは後にも先にも昨日と今日だけだつたから、商賣などとは全く反對の世界に住んでゐる健作ではあるが、よくよくの事に違ひないと同情されて、ない智慧も絞れるだけ絞る氣になつて、彼は腕を組み目を閉つて考へる恰好だけをして見た。と、暫くして

「あなたは、ミシンの方は出来ないんですか？……これまでは買出しの役を主にしてゐた譯ですか？」と聞いて見た。

「そやそや、しかし、初めは羅紗の切ばかりやつたが、あの家でも子供靴だけでは商賣にならん云うて、玩具とか座布團の皮とか、そんなもんを拵へるやうになつてからは、羅紗屋ばかりやない、洋服屋とか、呉服屋とか、何んでも彼んでも切に似たもんを扱ふ家を片つ端から廻らされた

もんや。そいで、或る時、私がこんな色々な切で何を拵へはるねと聞いたら、それは祕密や云うて教へてくれへんね、……」と丈助は云つた。

「ちよつと、ちよつと」と健作は遮つた。「ぢやあ、あの家では子供靴の外に、玩具や座布團の皮などを拵へる外に、まだまだ色々な物を拵へてる譯ですわ、だから、洋服屋の切でも、呉服屋の切でも、切といふ名の附くものは片つ端から入る譯ですわ、」と聞き返した。

「左様や、左様や。」

それを聞くと、健作は今度は恰好だけでなく本當に沈黙考した。それに十分ばかりかかつた。

「そんなら、ね、あなたは一つその先を越して、あなたが廻らされたといふ、東京中の、さういふ何んでも彼んでも切に似たものを扱つてゐる家を、片つ端から特約して、つまり買占めるのです。そして、あなたの店に行つたら東京中のあらゆる種類の切がある、と、かういふ商賣をやつて見たらどうです？」彼はこれだけの言葉を一氣呵成に喋つた。

この健作の新案の商賣も、前の子供靴屋の職人を丈助に進めた時のやうに、彼の言葉同様、一氣呵成に丈助も同感し、佛は佛、人は人、と云ふ主義になり、丈助は、お樂の遺骨を持つて直ぐ高天村に歸り、兄の竹藏から資本を借りて来て、早速それを始める事になつた。さうして丈助は、

健作が思つたより、健作が喋つたより、もつと迅速に彼の新案を實行した。彼は亡妻の遺骨を持つて雪江と秀夫を連れて、高天村に歸り、遺骨の處分一切を竹藏に頼むと共に、序に雪江と秀夫も、當分といふ名義で、竹藏の家に預け、竹藏から改めて借りた資金だけを持つて、一人で上京した。

その時、丈助は五十歳、健作は二十六歳であつた。

三年たつた。

その時、健作は或る事情の爲めに母を青山の親類に預け、自分は九段中坂に下宿生活をしてゐた。或る事情といふのは餘り芳しくない戀愛事件（彼自身はさうは考へてゐなかつたが）の爲めに三年の月日を棒に振つた。尤も、それから三四年の間は日本の文學界に私小説と稱して戀愛事件でも生活苦でもそのままか或ひはそれ等を潤色したものが持囃されてゐたので、彼もその後その芳しからぬ戀愛事件を嘘と誠とを取交せて小説に作り文學界の末席を占めたのであるから、丸棒に振つたとも云へぬかもしれない。が、その時はまさかそんな事になるとは思はなかつたから、彼はその戀愛事件を、當節の流行言葉で云ふと、「清算」したから、さアこれからは長年の望

み、彼には十二三歳の頃から望みであつた、小説を作る事に没頭しようと思ひ立つた。當時、彼の何人かの友達は既に新進小説家として世に出或ひは出つつあつたので、彼は、世に出る出来ないは二の次ぎとして、小説で生活出来るやうになつたら、長年苦勞させた母に樂をさせようと思つた。といふより、彼自身三年間を棒に振つたお蔭で、（その中には戀愛事件の外に貧困生活も入つてゐた）何といふか、小説の思ひで心が破裂しさうな氣になつてゐたといふ方が適當だらう。その破裂しさうな心の思ひに表現を與へたら——友人達を書いてゐる小説より、上手下手は別として、自分だけの變つたものが出来るであらう。森鷗外がその子に云つて聞かしてゐる、「物を書くといふには何でも其人でなければ書けないといふものでなければ價値がない」と。その通り、その通り、と自信たつぷりの彼は考へたのである。ここまでの考へは空想で出来ることだから、幾らでも彼の自由にはなつたが、自由にならないのは下宿料滞納の問題であつた。が、その頃、棒に振つた筈の三年間に餘り實生活に執着し苦しめられたのでその反動が來たのか、彼は空想が好きになつてゐたらしい。その證據に、自由にならないと考へた下宿料滞納問題に惱んでゐるかと思ふと、どこかに寛大な下宿屋があつて、自分の才能を見込み、相場でもするつもりで、せめて半年ぐらゐ催促しないで置いてくれるところの、此世ながらの地上樂園とか桃源とかいふもの

がないだらうか、などといふ事を眞面目に考へてゐたからである。

しかし、如何に彼が、空想を撞つにし、一人合點を楽しんでゐても、その頃、日に一度、下宿のお上は催促をしないで催促する法——といふのは一日に十分か十五分彼の部屋に訪問する法——を考案して、彼を所謂眞綿戦法で責めつづけた。併し、幸な事には、そのお上は妾といふ別の職業を持つてゐて、更にもつと幸な事には、彼女のパトロンが自分の妾が若い男たちを扱ふ商賣をしてゐる事が氣になつて、自分がそれをさした事は棚に上げて、時間を極めずに妾宅を訪問して來る習慣を持つてゐたので、彼女がいくら眞綿戦法で彼の部屋にやつて來ても、玄關のベルの音が氣になるので、誠に巧みな催促法であるにも拘らず、殆ど効果がないと云つてよかつた。がこの方法は他の下宿の他のお上が利用したら効果百パーセントであるかと思ふ。又、もし健作が小説を書くなどといふ望みさへ持つてゐなかつたら、さうして度胸或ひは太い神經を持つてゐたら、この下宿は、彼の希望どほり、半年が一年でも、パトロンが變りさへしなかつたら、此世ながらの地上樂園或ひは桃源にもなつたであらう。が、天二物を與へず、彼には小説を書きたいといふ神或ひは悪魔の心と細い神經があり過ぎたので、彼の下宿は地上樂園或ひは桃源の資格がありながら彼にはその反對のものであつた。が、他の道樂がその頃の彼を救つた。——それは彼の

下宿（九段中坂）から東京一或ひは日本一の古本屋町が十分内外の時間で行かれること、そこに毎日通ふことであつた。それは、珈琲と菓子代さへあれば疲れたらそれで休息することにして、この日本一の古本屋町を軒並に出つ入りつしてさまざまの本を開き見する、といふ道樂である。この道樂は金なしに何時間でも楽しむことが出来る。これこそ地上樂園或ひは桃源であつた。尤も、この道樂は健作獨得の道樂とはいへないだらうが。——兎に角、或る日、彼は、中坂の下宿を出て、電車道を、九段下、それから俎橋、表裏神保町、駿河臺下、といふ何時もの道を、例の道樂を楽しまうと思ひながら、俎橋を渡つたところで、三年ぶり、なつかしき中戸丈助に會つたのである。

中戸丈助は大黒天の持つてゐるやうな鬱金色の大きな風呂敷包を大黒天のやうな恰好に背負ひながら進んで來た。丈助の方は、健作が實に見すばらしい形をしてゐたので、四五歩の間に近づいた時、健作の方から笑ひかけたので、やつと健作を見出した。が、健作だと分ると、彼は忽ちその風體どほり大黒天の笑顔になつて、「おお、」と健作が三年前に別れた時とは別人のやうな朗かな聲で叫んだ。さうして健作が口をきかない先きに、こんな事まで三年前と反對だつた、「お前はん達はどうしなはつてん、この間本郷へ訪ねて行たら……」と云ひかけて、丈助は口を噤んだ。

反射的に健作も心の中で首を縮めた。その本郷の家を、彼は、母が、大阪の伯父（祖母の死んだ時輿を共に持った伯父）が死病にかかった時、その看護に行つた留守の間に、例の戀愛事件の相手と夜逃げをしたからである。彼は、丈助に、「本郷へ訪ねて行たら……」と云はれた時、その事を思ひ出して、丈助もそれを知つて知らぬ顔をしてゐるのではないかと邪推されたので、これ隠しに、「丈助さん、」彼の方から口をきいて、「いつか僕の祖母が、高天村で死んだ時あなたと俵屋の阪田さんとに助けてもらつて、僕と一緒に祖母の輿を擔いだ伯父を御存知でせう。丁度あなたが本郷へお出で下すつたといふ時分に、母はあの伯父の看護に大阪へ行つてたんです。伯父はその前から體が悪くて、大阪から堺へ轉地して養生してゐたんですが、その堺で母に死水を取られて死にましたよ、」と云ふと、丈助は驚いて、

「へえ、分らんもんなや。あんた（この頃から丈助は健作にお前はんといふ代名詞とあんたといふ代名詞を混淆に使ふやうになつた）のお母はんと伯父さんは仲が悪かつたんやないか、喧嘩をせんほど仲が悪かつたといふやないか。それが死水を取つて上げなはつたんかいな、へえ……。併し、あんたのお母はんは本眞に佛性やなア。私の知つてるだけで、あんたのお祖母はんの、つまり自分のお母はんの死水を取つて、その次ぎは他人のお樂の死水を取つてくれはつて、その次

ぎは伯父さん、つまり兄さんの死水を取りはつたんやろ、ふむ。本眞に、あんたのお母はんちふ人は、佛性やなア。ふむ。……吃度、ええ往生しやるやろ、ふむ。」

丈助は仕舞の方を唸つた。

「それにしても、中戸さん、」と健作も次第に慣れて話し出した。「考へて見ると、僕の祖母は自分の家を離れて高天村で死に、あなたのお上さんは故郷を離れて東京で死に、僕の伯父は自分の家で死なずに轉地先きで死に……」

ふと氣が附くと、今まで笑ひ顔をしてゐた丈助の顔がちよつと歪んだやうに見えた、といふより、ちよつと泣き顔に近い顔になつたので、健作はそこで口を噤んだ。彼は丈助の妻のお樂が死ぬ時「高天へ往にたい、高天へ往にたい、」と叫んだといふ事を母から聞いた事を思ひ出したからである。が、丈助は直ぐ元の顔附になつて、「お母はん、今どこにゐやはんね？」と聞いた。健作は青山の親類にゐることを答へた。すると、丈助は、「お前はんは？」と尋ねた。彼がかうかういふ下宿にゐると答へると、

「それや、いかなな。」丈助は云ひながら、そのとき初めて健作の形を見て、その境遇を察したらしく、「お前はん、これから何處へ行きなはんね？」と聞いてから、「何なら私んところへ來なは

れんか、お前はんのお蔭であの商賣を始めてるんやが、お蔭で今のとこ具合よう行とオる。……
 家も、あの近くやけど、變つた。又、いろいろ相談にも乗れるかも知れへんし、遠慮はいらん、
 私は今の商賣があんじよう行くにつけて、お前はんのを思ひ出して喜んでるんや。人は持ちつ
 持たれつといふ事もある。……お前はんは、私みたいに歩くのは嫌やらから、その邊から電車に
 乗ろ。」――

その日から健作は丈助の家に居候になつた。思へば彼が下宿で空想したことが實現されたこと
 になつた。丈助の今度の家は前の家の二倍以上あつた。家族としては、ミシン工の十七八歳の流
 行唄の好きな職人と、二十七八歳の元俳優の馬の脚だつたといふ番頭との三人暮しであつた。階
 下は八畳ぐらゐの床の間と六畳の茶の間とその奥に三畳の部屋があつて、それと二階だ。が、そ
 の二階は目方が十二貫程しかない健作が上り下りしてもギイギイと氣味の悪い物音を立てる絶壁
 のやうな急な梯子段に依つて通じてゐた。その出入口は穴倉のやうに疊一枚分切り取られて而も
 そこに戸が附いてゐた。だから、上つて行く時は下からその戸を明け、下りる時は上からその戸
 を明けねばならなかつた。部屋の大きさは長八畳だつた。その二階が健作の部屋と極められた。
 それは下町の古風な借家によくあるやうな真中まなかから端はな(表)の方へ行くに連れて天井が低くなり窓

の所は三尺ぐらゐしかなかつた。その窓の下に丈助の心づくしで荷箱をこはして拵たてへた机が置か
 れた。それは普通の机のつもりで肘を突いたら直ぐメリメリといふ唸りを發するやうな物であつ
 た。が、彼は、この机の作り手の丈助の爲めにも、親類に姥捨山のやうに預け放しになつてゐる
 母の爲めにも、それより何たより天から授けられたこの絶好の機會を掴んで、十三歳からの念願の
 小説――その小説の思ひは胸から突上げさうになつてゐた――を作らうと思ひ立つた。翌日にな
 ると、丈助がお手の物の小切を繼合した一枚の風呂敷大の切きを持つて來て、「これを机掛にしな
 はれ。」と云つてくれた。すると、流行唄好きのミシン職人が、「それではあんまり見つともない
 から。」と云つて、これも小切を繼合したものが、ミシンの専門家だけに、流行唄好きの意匠
 を凝らした机掛をくれた。丈助は電車賃を儉約した金で晩のお敷を買つて歸る習慣になつてゐた
 が、それが牛肉の細切こま切れのときは馬の脚番頭が葱と豆腐を提供し流行唄職人は絲蒟蒻を寄附した。
 さうして、このミシン職人は不斷の炊事一切を引受けてゐた。

健作が丈助の家の居候になつてから二三日後の或る雨の日、買出しを休んだ丈助が、「御免や
 す。」と突然梯子段の上口から顔を出して、彼の書齋兼寢室の屋根裏部屋に入つて來て、

「私、一ぺん聞こ聞こと思つて聞く暇がなかつたんやが、……一體あんたのしよと思ふ、つまり目

的やな、それは、一體どんな事やね、私に分るやうに聞かしてもらへんか、と云つた。

この質問にはさすがの彼も面食つて咄嗟に返答が出来なかつた、これが相手が多少でも文學とか小説とかの知識を持つてゐるか、中學卒業程度の教養を持つてゐるかしたら譯のない事であつたが、讀者もこれ迄のところでは略想像が出来るであらう、丈助のやうな人物にこの質問に満足させる答を與へる事は如何なる善知でも萬人の心を持つシエークスピアでも困難なことであらう。が、今はそんな理窟を述べてゐる時ではないから、と思つて、これ迄はするぶん無駄な事ばかりして來た、といふのは、教科書の註釋とか、子供の讀む童話とか、外國の小説の翻譯の下請とか、そんな事をして、その日を糊塗して來たが、ここで一つ大決心をして年來の志望である小説を書くつもりである、といふ意味のことを、出来るだけ丈助に分り易い言葉で説明した。すると、丈助は、半分わかつたやうな、と云ふより、三分わかつた七分わかつた顔附で、

「その小説ちふのを拵へるには一體どれぐらゐの日がかかりまんね。それで、それが出來上つたら何ぼ位儲かりまんね？」と聞いた。

この質問には、健作は一層面食つたが、「さあ、二月か三月ぐらゐあつたら……」と彼は曖昧に答へた。

幸ひ、丈助はその曖昧な答を曖昧と見抜く力を持つてゐなかつたので、その日の問答は「しつかりやつとくたはれ」といふ丈助の獎勵の言葉と共に終を告げ、それから月日は春の日のやうに穩かに過ぎて行つた。毎朝、七時半になると、新に加はつた健作を入れて四人の者が、階下の六疊の茶の間で、古道具屋仕入らしい食卓を圍んで朝飯を食つた。この朝飯の間に交される會話が如何に楽しいものであつたかは割愛する。唯、その朝飯の間は健作のやうな者にも浮世の苦勞を忘れさせた事を讀者に告げておかう。唯、健作がときどき參つたのは丈助が「どうや、小説ちつと書けたか」と突然聞くことであつた。これはこの楽しい春の團欒の中での、健作にとつては、晴天の霹靂の感があつた。彼の小説がこれ亦春日の如く遅遅として進行しなかつたからである。然しながら、それは五日に一度か一週間に一度位だつたから、先づ以て健作が發案し、丈助が實録したところの和漢洋諸種小切問屋の一家は、これを支那流に言ふと吳越同舟、日本流に言ふと乗合船、(惠方萬歲)、四人が四人とも赤の他人ではあつたが、眞に和氣霽靄共同一致模範的な業制度さへ行はれてゐたと云つていい。何故なら、この樂しき朝飯が濟むと、丈助は例の鬱金色の大風呂敷を八つに疊んだのを懷中して買出しに出發し、流行唄のミシン職人は奥の三疊の間に籠つて彼の愛機であるミシン臺に就き、ガラガラといふ機械の音に合して流行歌をうたひつつ八

時間以上の労働をし、元馬の脚番頭（彼は馬の脚ではありません女形でしたと辯解した）は店の間に出張し、これは朝から晩まで店頭で坐つて、女形のやうに愛想よく客に接し、馬の脚のやうに活潑に商賣の駄引に力め、健作は例の踏む毎にギイギイ鳴る絶壁の梯子段を上りこれも起きてから寝るまで、三度の食と用足に階下に下りる外、その書齋兼寢室である屋根裏部屋に閉籠つて読み且書く事に勤んだからだ。――

ところが突然この共同一致模範的な分業制度の一團が餘儀なく解散しなければならぬ事件が持上つた。それは、女形でない本當の女人がこの一家に加入する事になつたからであつた。女人とは丈助の後妻お萬である。彼女は高天村の産で、偶然にも嘗て健作が高天村に寓居した時、その離家を借りてゐた山目家の姉嬢であつた。それは讀者も既に知らるる如く、嘗て健作がその姉嬢と妹嬢が機を織る音を聞きながらこれに勵まされて勉學したといふ由緒のある娘の一人である。このお萬をこの丈助が後妻に迎へようとは、當の丈助も、又そのお萬を滿更見ず知らずでない健作や彼の母にも、まつたく思掛けない事件であつたが、それには次ぎのやうな理由があつたのである。――

高天村にゐる丈助の兄の竹藏は最早六十二歳になつてゐたので、急に年頃になつてゐる伴の丈

太郎の行先が案じ出され、また妻を失つた丈助の事も心配になり、丈助から托されてゐる雪江と秀夫を早く親であり祖父である丈助に引取つてもらひたくなり、といふ考へから、丈太郎に嫁をもらふ事、丈助に後妻を世話する事、さうして雪江と秀夫を東京へ歸す事といふ結論を得た。それには、先づ丈助に後妻を世話すれば自然雪江と秀夫は東京に歸ることになる、雪江と秀夫がゐなくなれば丈太郎に直ぐにも嫁が貰へる、――かう考へた竹藏は、一も二もなく、それは丈助の先妻のお樂が死んだ時から考へてゐた事なので、山目の姉嬢のお萬を丈助の後妻に世話しようと思ひついた。それには次ぎのやうな理由があつた。

元來、中戸の家と山目の家が、田舎には珍しく、親戚關係が全くなかつたのに、眞の親戚以上に親しくしてゐたのは、竹藏が博徒であつた頃山目の天死した主人と義兄弟の關係があつたからで、その亡友の娘（お萬）を自分の弟（丈助）の後妻に迎へたら、兩家が眞の親しい親戚になる、とかういふ單純な考へ（竹藏には尤もな考へ）からであつたのだ。この竹藏の考へは成功した。それを稍委しく述ると、彼は首尾よく丈助に後妻を世話し、雪江と秀夫を東京に歸し、その翌年、一つ上だつたが體が丈夫といふ理由で、丈太郎の嫁に適當なのがあつたので、それを貰つた。――竹藏は、これでもう思ひ残す事はないと考へたか、丈太郎に嫁をもらつた翌年の秋、久振りで

東京見物を兼ね、自分が後妻を世話した丈助の家の有様を見る爲めに上京した。丈助の家が思つたより繁昌してゐたのも嬉しく、自分の世話した後妻のお萬が働き者で儉約家であつたので丈助も満足し従つて家の内も丸く治つてゐるのを見届けたので安心し、一週間ほど滞在した後、いよいよ明日大和へ歸るといふ前日、彼は健作の家を訪ようと思つて丈助の家を出た。彼は、道道、心の中で、丈助もええ工合ぐあひになつたし、丈助の話では健作はんも出世して嫁はんを貰つたといふ事やから、お里はんもさぞ嬉しいことやる、そのお里やその健作やまだ知らぬ健作の嫁にも會ひたいと楽しみながら、丈助から聞いた通り、上野公園前で電車を下り、公園を抜けて谷中の健作の家に著いた。彼が健作の家の前に立つた時、ちやうど家の中から健作の母のお里が買物に行かうとして出て来たところだつた。出合頭に、お里は竹藏がひどく疲れたやうな顔をしてゐるのを見た。が、その時は唯の疲れだと思つて、彼女は早速階下の座敷に竹藏を通し、久瀧の挨拶を交してから、もう一度彼の顔を見直すと、先きには唯疲れてゐると見えたのが、今度は何か痛みを堪へてゐる顔に見えたので、

「竹藏さん、顔色が大へん悪いやうですが、……」と彼女が聞くと、

「さあ、」と竹藏はその時まで我慢してゐたらしい下腹を急に抑へ抑へ、「公園の中をぶらぶら抜

けて来たんやがな。動物園の前か知ら、何でもあの邊を歩いてゐる時分から、この邊……下腹がかうしくしくして痛み出して来てな、もう引返す譯に行かんさかい、やつと腹を抑へ抑へ歩いて来たんや、……」と云ふ。そのうちにも竹藏の顔色が悪く青ざめて来たので、彼女は、丁度そこへ茶を運んで来た健作の妻に、挨拶する隙も與へず、寢床の用意を命じ、彼女自身は竹藏の傍へ寄つて、

「お醫者はんを呼びまよか、」と聞いた。それほど竹藏の顔色が唯ならぬ悪さに變つて来たのだつた。竹藏はそれに返事をするのも大儀らしく、却つて下女と一緒に床を敷いてゐる健作の妻の方を見て、

「兎に角、ちよつとそこに横にならしてもらオか、」と苦しさを聲で云つた。

迎ひにやつた醫者の診断では病氣は腸加答兒でそれも慢性だといひ、病人の年が六十六歳だと聞くと醫者は首を傾げてそれでは長く持たないだらうと云つた。健作の母はそれを聞くと早速丈助の家に電話（その頃丈助の家には電話まで掛つてゐた、健作の家にはなかつたが、）を掛けて、丈助を呼んだ。夕方、丈助が来た頃には竹藏の病氣は幾らか持直したやうに見えたので、病人も歸りたいと云ひ、相變らずの遠慮家の丈助も連れて歸ると云ふので、病人は丈助に連れられて俾

で彼の家に歸つた。――

それから竹藏は一週間ほど弟の家で床に就いてゐた。その間に先きの醫者の言葉を聞いてゐるので、健作は母と一緒に見舞に行つた。その歸りに母は持直すだらうと云ひ、健作はそれに何とも答へなかつた。發病してから丁度一週間目の夕方、竹藏が、少し氣分がいい、國へ歸るのに元氣を付けておきたいから、起きて飯を食ひたいと云ひ出したので、兄思ひの丈助が、特に近所の料理屋から二三品の料理を取寄せて進めると、竹藏は、大和へ往んだらこんな旨い刺身は食はれへんなどと云ひながら上機嫌で食つてゐたが、それを三四切食つた頃、突然持つてゐた箸を落し、「何や急に氣持が悪なつて來た、……胸が……どきどき……」と云つたかと思ふと、靜かにお辭儀するやうな恰好をして食臺の横に俯伏しになつてしまつた。丈助は、バネのやうに跳上つて竹藏の傍に飛んで行き、後から抱き起しながら、

「電話、お萬、電話、電話、電話……」と叫んだ。醫者といふ言葉も醫者の名も忘れてしまつたらしいのだ。が、お萬が電話口の所でうろろしてゐる内に、竹藏は、丈助に抱起された時ちよつと持ち上げられた切り、急に丈助の力に餘るほどの重さでのめるやうに突伏してしまつた。さうしてそれ切り物を云はなくなつた。

七年たつた。

三月下旬の或る晩、健作は、ふだん減多に足を向けた事のない淺草へ出かけ、これも減多に足ど入れたことのない活動寫眞館に入つて見たが、つまらないので途中で出て、暮れかけたばかりの廣小路の通を歩いてゐると、ふと道の傍に『大阪料理何某』と記した看板を見出した。大阪料理といふ看板は方方に見かけるが、その店頭に並べたあつた大阪風の陳列箱が本當の大阪風だつたので、彼は何か懐しい氣がして中に入つて見た。入つた所は土間で、簡易食堂風の机と腰掛が並んでゐたが、彼は最寄の席に腰かけて獻立書を読んで見ると、それは悉く純大阪料理ばかりであつたから、急に懐しさと食慾を感じて、二三品注文した。料理の出来るのを待つ間も、彼は減多に他の客の方を見ない癖だつたから、手近にあつた夕刊を取上げた。と、彼の向ふ前から彼の名を呼ぶ聲が聞えた。餘り近くだつたので吃驚した。呼びかけたのは中戸丈助であつた。

健作は、彼の母は月に一二度ぐらゐる丈助の家を訪問するが、彼は殆ど訪問した事がないのと、他の場所で會つたのなら何でもないのであるが、場所が丈助の家の近くだつたので、穴に入りたてい程、といふと大袈裟だが、可なり極りが悪かつたので、てれ隠しに母がときどき邪魔に出ること自分が無沙汰をしてゐること等を云ひかけると、「そんな堅苦しい挨拶は抜きにしまよ、」と丈

助の方も、大分空の徳利を並べてゐるのが極り悪かつたのでさう云つたのかも知れないが、彼はそれだけ飲んでゐたので不斷の無口の反對に可なり雄辯になつてゐた事は次ぎの會話で分るであらう。健作も丈助がそんなに喋るのを聞くのは生れて初めてだと思つた。彼は酒は一滴もいけな

い方だつたから、その晩は徹頭徹尾丈助に壓倒された。丈助は話し出した。
「私……すつと先からあなたに一ぺん會ひたいと思つて、お母はんに會ふたんびに頼んでおくんやが、」そこで一口飲んで、「私は御承知の通り、こんな性分やさかい、あなたに會うても、云ひたい事があつても、口が利けんもんやさかい……。それに、私、あなたとこ見たいな堅苦しい家は苦手やしな……」酒の勢で丈助は本音を吐いた。

「いや、僕の方も……僕も、少しお酒が飲めると何ですが……それに忙しいものですから、ついで……」

「分つた、分つた、」と丈助は手で健作の言葉を制して、「私、つい四五日前大和から歸つて來ましてん。」

「始終あちらの方へお出になるんですか？」と健作は聞いて見た。然しこれは合の手で彼は丈助が始終大和へ行くことは母から聞いて知つてゐた。が、それだけでは悪いと心に咎めたのと同

時に、氣が附いて、「丈太郎さんは如何です、此頃しばらく便がありませんが、お體の方は？」とこれは本當に聞いて見た。

「さあ、どうもはつきりせんで困つとる。あなた聞いているか知らんが、あの子の本眞の親父、ちふのは私にもあの死んだ兄貴にも兄貴に當る、つまり上じやうへの兄貴がな、肺病で死んでるさかい、それで私は心配してゐるんだす。それに、あの子の母親——あのお政さんが、あの子とは他人やろ、あの母親が慾張りでナ、兄貴が死んでから、あそこの財産を自分の身内の者に運んで行くらしいね、私でも傍にゐたらそんなこと出來へんねけど……。それに、丈太郎の嫁はなかなか聡しんぱりもん者やけどな、何ちうても年が若いよつて何にもなれへんし……」

丈助の言葉はこの二倍も三倍も或ひは五倍も十倍もあつたが、その後の方を簡単に紹介すると、三十歳になる病身の丈太郎に三十一歳の人並すぐれて達者な嫁と一緒にゐる事、それは夫婦やから仕様がな、兎に角あの若さに三人も子を拵へるのはよらない、……子オがたんとあるのは子福者いうて目出度い事にはなつてゐるが、「あれでは、な、健作さん、」と丈助は云つた、「丈太郎が死による、な、そやおまへんか、あなた等のやうな學者の目エから見ても私の心配は無理やなと思ふけど、どうだす？」この括弧の中の言葉は、酔つてゐる丈助の口から出てゐるとは云ふ

ものの、實は丈助の本心であることは健作に分り過ぎるほど分つた。が、又かういふ事件に就いては丈助より確かな智識を持つてゐる健作の方が、この話を聞くと、丈助の何倍か心配になつて來た、丈太郎が健作の古い馴染であるなしに拘らず。併し、かういふ事は、健作として丈助からかう尋ねられても答へたくて答へられないことであるし、反對に假に健作が同じ問ひを丈助にしても矢張り丈助は答へたくても答へられないことであらう。

しかし、以上の事はまだ健作の意表に出る程の事件ではなく、寧ろ彼が既に略知つてゐた事ではあるが、次ぎの二つの事件は健作の知らなかつた事であり思ひも及ばなかつた事である。その一つは丈太郎の母(義母)のお政は所謂商賣人ではなかつたが竹藏に稼ぐ前にすゐぶん不品行な女であつたこと、尤も、大和の葛城郡高市郡あの邊一體の機織の盛な土地の娘達は、殆ど悉く機織をするので、男達の何倍もの収入がある爲めに、貧乏な家(ばかりでなく殆ど全體)の娘達は、家計を助ける爲めに晩婚である、(丈助の後妻のお萬もその一人であるが)その爲めに若い男女の風儀が想像以上にひどい、丈太郎の養母のお政(竹藏の妻)はそのひどい中の最もひどい者で「からだ中毒だらけと云ふてもええ位や、よう今まで生きてよると思ふ位や、尤も、年中けつたいな病氣ばつかししてゐて、病氣でない日は一日もない位や、その證據にあの人は體中灸だらけやと

いふ話や、」と云ふのである。これが健作の知らなかつた事の一つで、今一つの思ひも及ばなかつた事件といふのは丈助が熱心な天理教信者であるといふ事だ。お政の話はもしかすると健作の母は知つてゐるかも知れないが、丈助が熱心な天理教信者である事を知つて人は殆どゐないといふことは、「これは私と天理さんの信者の外には誰も知らんことだす、」と丈助が云ふ通りであるらしい。然し、彼が天理教を信仰する理由は一般の信者とは大分變つてゐた。彼が云ふには、「神さんなんてあつてもなうてもかめへん。私は天理さんが信者から上げた金をみんな信者の爲めに使ふちふ主義が好きやね。その證據に天理さんへ行って、今日から信心する云うたら、信者でなうてもその日から直ぐ引取つて養うてくれよる。私はあの主義が好きやね。私には學者のいふ事はよう分らんから、社會主義なんちふもよう知らんが、天理さんは社會主義が理窟だけでいふ事を本眞にしてるやうに私には思へるさかい、私は大和へ歸るたんびに天理さんへ寄つてお金を上げる事にしてんね。健三さん、私は酔うてるやうでも酔うてへんで。だから、この天理さんの事と天理さんにお金を上げる事は、あんたのお母はんにも内のお萬にも、誰にも云ふとくなはんや。私はあんたには昔から惚れてんね。だから、あんたを見込んでこんな秘密の話までしたんや。」これが健作の記憶に残つただけの丈助の天理教の説である。この天理教の説(或ひは

説教が済むと、この丈助の何かに憑かれた人のやうな話は一變した。

「さうさう、」と丈助は急に思ひ出したやうに、「この間、兄貴のお墓参りした序に、あんたのお祖母さんのお墓に参つたら、あのお墓の臺石がくづれて来て大分傾いてたさかい、村の石屋に見さしたら、今のうちに手を入れたらあのまままで直る云ふとつたが、私の考へでは、今のあんたの力ですつかり墓石とも變へてしもた方がええと思ふんや。あのまま直したかて何年も持てへんと石屋も云うとをつた。……何なら、健作さん、近いうちに、私また彼方へ行くつもりやが、一緒に行きはつたらどうだす？」と凡そ素面の丈助の云へないことを云つた。

併し、その時の、健作が生れて初めて聞く丈助の饒舌は、素面の丈助の云へない言葉の連続ではあるが、その中の大部分は酒の上でないと吐けない丈助の本音のやうに彼に考へられたので、最後の高天行を誘はれた時、彼は一も二もなく行く氣になつた。その頃、彼も何處かへ旅に出ようと思つてゐたところで、いつも同業の友人と行くのが例だが、急にこの丈助と旅して見たい氣が勃然として彼に起つた。彼にも、丈助に天理教が憑いたやうに、何物かが憑いたのであらうか。

——同じ頃、健作の母が丈助を訪問してゐるから、その時の一場面を紹介しよう。——
その頃の丈助の家は、健作が居候してゐた時と同じ家だつたが、以前の各種和漢洋小切一切問

屋を一層發展さして反物類まで置くやうになつてゐたので、小切類は悉く總て棚に載せ、反物類は店の隨所に積上げることにしてゐたので、その反物の山の中に坐つてゐる丈助の體が小さく見え、女ながら丈助に劣らぬ體格のお萬もその反物の山の中では小ぢんまりして見えた。従つて品物が主人か主人が品物か區別が附かないところがあつた。言ひ換へると、家全體が品物の藏で人間はその品物の番人の觀があつた。丈助の店が發展したのはそればかりではない。彼は、後妻と娘と孫を迎へる事になつた時、むかし艱難を共にしたところの馬の脚番頭と流行唄職工を首にしないで、彼等のために、自分の家の近所に借家を見つけ、無利子で資本金を貸し、自分と同じ商賣を開かしてやつた。その代り、今は彼の家には三人のミシン工を置いてゐた。——健作の母が丈助を訪問した時の彼の店はざつとさう云ふ體裁のものであつた。

「どうです、御商賣の方は。」

「まあ、お蔭でどうかかうか忙しいけど……」

「もう随分お金が溜りましたやろ。」

「ああ。二三日前にちよつと勘定して見たら、銀行に入れたある現金と、それから、株券や、田舎にある田地や、山を入れると、六萬圓ぐらゐあつたから、品物と貸を入れて見積ると、八萬圓

ぐらゐになつとるかも知れん。」

「まあ、結構だすな。」

「ああ、お蔭でな、」と答へたが、丈助はその金高の何萬分の一ほどしかない不元氣で、「しかし私、もうこれ以上金は入らんと思ふね。入らんちふたかて、商賣の方が儲けよるもんやから、嫌でも勝手に殖えていきよるさかい仕様がなし、ほかす譯にも行かんけど、……お里はん、無うて苦勞するのんも金やし、有つて苦勞するのんも金やなア。」

「そんな入らんお金があつたら私のとこへ貸してもらひましょか。」

「何いふね。あんたんとこなど今はもう困る事あれへんやろ。……私が、金が有つても苦勞するちふのは、貸してやりたいとこが仰山あるし、金が出来ると方々から當にしよる者があるし、……併し、金を送つてやるのは私にかまへんけど、前と違つてお萬の目があるやろ。」

「そんな事、あんたが儲けたお金やおまへんか。そのあんたがお金を何處に送らうが、あんたの勝手やおまへんか。」

「それがなア、」丈助は溜息をついて、「あいつは私とは夫婦でも、外のもんとは他人やさかい、私が身内のもんに錢や物を送るとええ顔しよれへんさかい、内所で隠し隠し送つてやるやうにし

てんねやが、その隠しどをどういふ譯やちき喚ぎ出しよるね。袂の中は仕様がなしとしても、額の後に隠したのんまで見つけよんねやからな。しかし、私が達者な内はまだええけど、一たん私が目エつぶつた後を考へると……」

「そんな心配はまだ入らんこなたすやろけど、そんなに心配やつたら遺言にしときなはつたらどうだすか？」

「それは私も考へてんね。その事で一ぺん健作さんに會うて頼んでおきたいと先から思てんね。あんたも知つてる通り、私の一ばん心配なのは丈太郎と雪江と秀夫や。その丈太郎は體が弱いし、雪江はあの通り少し足らんと來てる。そこへ秀夫があれやろ。結局、私は行く行くはこの商賣を丈太郎に譲つたろと思て、前は楽しみにしてたんやが、あの體では使にならんし……さう思ふと、私は食うて食うて食ひ潰すか、飲んで飲んで飲み潰すかと思ふことがあるけど、それがあかん、二三年前までは牛肉の百目ぐらゐ食うても何處イ入つたか分らん位やつたが、この頃は、五十目の肉を残す有様やがな。酒も此頃は内では二合飲むと參つてしまふ。その代り、外へ出ると未だ五合や一升やるかなア。しかし、ちよつとやり過ぎると、心臓があかん、直どきんどきんする。心臓がどきんどきんすると、兄貴の死んだ時のことを思ひ出す。今にも死にさう

な氣がする。いま私が死んだら……。また死ぬ話をするけど、いま私が死んだら忽ち大騒動や。お萬の身内が一派あるやろ。丈太郎はが、したれ（意氣地無の意）やけど、あの嫁はんが至ていたつしつか。者と來てるやろ。あの嫁はんの一族がある。それに丈太郎の母親の身内が蟻のやうにゐる。——さあ、そいつ等が、私が死んだら最後、寄つて集つて無茶苦茶にしよるやろ。——按排分けてくれさへしたらええけど、そいつが皆、慾の皮の突張つた連中ばかりやからな……」

「だすよつてに、遺言を……」

「左様や、その遺言を、今いうた通り、あんたんとこの健作さんに頼もと思てるね。あんたからも宜しう云うといとくなはれ。」

——これが丈助の素面の時の本音であらう。併し、一人の人間といふものは、丈助のやうな人間でも、（現に健作は丈助を單純な人間だと思つてゐる、）いづれも神の造つたものであるから、一筋繩の人間と云ふものは少ないであらう。これが若し神だけの製作であるものなら神の如き人間、（丈助がときどきその種類の人間に見えることがある、）或ひは單純その者のやうな人間が多く生れるであらうが、このしばしば神の如き人間と見られる丈助にも、讀者が既に見られたやうに、（又これから見られるやうに、）酒の上で表す本音と素面の時に表す本音と、言ひ換へると、二元

の本音がある所を見ると、あらゆる人間は神と悪魔との合作だといふ説は正しいのではないかと私は考へる。——

却説、丈助と健作が淺草の大坂料理で逢つてから十日ほど後、四月上旬の或る晩、彼等は二人二様の旅姿で東京驛の待合室に現れた。丈助は茶縹の結城紬に既成品らしい綿ラダのトンビそれに古風な鳥打帽を被り手製の信玄袋を提げ、健作は薄鼠色の脊廣服に同じ色の外套それに同じ色のソフト帽を被り中形のスウツ・ケイスを持つてゐた。その時、丈助は五十九歳、健作は三十五歳であつた。——彼等が汽車の時間を待つてゐる間に、當時の彼等の身分を紹介すると、丈助は八萬七千圓（彼が自分の財産の額を多くも少なくも云はないといふ珍しい性質を持つてゐる事は前に述べた通り）を作り、健作も亦八萬七千圓程の名聲と地位を得た。（それを丈助が納得の行ぐやうに相撲の番附で表すと丈助が彼の同業仲間の幕内なら健作も文筆業仲間の幕内に入つたと云ふべきか。）——さて、汽車の出る時間が來た。彼等は午後九時三十分發神戸行の急行に乗つた。「高天ゆき（京都廻り）」といふ切符を持つて。丈助が三等と云ふのを、健作が主張して二等車にした。

彼等が汽車に乗つてからの會話その他の中から重要なものを適宜に紹介すると、先づ健作から

口を切つて、「ときどき母から聞いてゐましたが、あなたの御遺言といふのは一體……」と云ふと、丈助は返事の代りに兼て用意してゐた四折にした半紙を内懐から出して健作に渡した。それは遺言書を兼ねた財産目録の覺書のやうなもので内譯は可なり詳細に書かれてあつたが、(それは必要がないから省略し) 概略だけざつと拾讀して見ると、一萬圓——田畑、二萬圓——山、三萬圓——諸株券債券その他、二萬何千圓——銀行預金商品貸金、といふ風に分けられ、その後、秀夫、お萬、雪江、丈太郎、天(天理教の略)その他の名が記されてゐる。

一通り目を通してから、「割當の方の委しい書附はないんですか、」と健作が聞くと、「田畑と山は大方極まつてるんやが、その外のんが一ばん困るんや、狙てる奴が多いさかいな。それに、もつと困るのんは、」と丈助が云ふには、「割當を一ぺん極めといへも、半年ぐらゐ立つと金が殖えて來るので、變へならん事になる。變へる時分になると、きつと歩合を按配せんならん事が起つて來よる、——つまり丈太郎が入院するとか、雪江が……」そこから、話が雪江の事に移つて、「二年ほど前に雪江が京都の謡の師匠のとこイ後妻に行たのを御存じだすやろ、それが今度急に戻される事になつたんや。三年待つたけど子オが出来んよつてに、家風に合はんさかい戻すちふ手紙が今朝來たんや、」と丈助は云つた。健作は返す言葉が見附からなかつたので、「雪江さん

は僕より確か一つ上の三十六でしたね、」と聞いて見た。丈助はそれには答へないで半分獨言のやうに、「家風が合ふも合はんも、婿はんは私より三歳上やさかい、六十二イやから、二十四違ひか、併し、彼方も後妻こつちも出戻り、元々や、何方みち無理な話やわい、」と唄でも歌ふやうにつづけた、「……今、私の家は忙しうて何ぼ人がゐても足らんくらゐやけど、女手は入らん。彼女が男やつたらよかつたんやが、今さら製造し變へる譯にも行かんし……」彼はそこで急に眞顔になつて、「そんな譯で、健作さん、いま雪江が東京へ歸つて來よつたら困るさかい、今朝手紙を見たとき直ぐ電報打つて、明日の朝何時何分に京都の驛で待つてるやうに云うてやつておまんね。そいで、迷惑やけど、京都から丹後市まで辛抱しとくなはれんか、丹後市の天理さんの本部に彼女を預けるつもりだんね、」と云つた。これを聞くと、健作は此間の晩淺草の料理屋で、丈助が銘酎しながら天理教に就いて語つた時のことを思ひ出した。すると、回想は、彼が初めて竹藏の家で會つた時の丈助、高天原で會つた時の丈助、子供靴屋の二階に訪ねて來た時の丈助、健作の貧乏生活の家に妻娘孫を連れて來た時の丈助、神田の途上で逢つた時の丈助、同じ釜の飯を食合つた時の丈助、母に金を借りに來た時の丈助、失業から立直つた時の丈助、淺草の料理屋の時の丈助、いま目の前にゐる丈助——この無數の様々の丈助等の姿が、ゑたいの知れない人生教

訓の繪巻物のやうに健作の心の目に映つた。

健作がそんな感慨に耽つてゐる事など知らぬ丈助は、雪江の話が一先づ済むと、再び遺産の問題に戻り、如何に遺産（といふより今はまだ財産）の爲めに、その分配の爲めに、苦勞し煩悶するかを繰返し、「いつそのこと、みんな西の海へ抛つたるかと思ひまんね、」などと歎息するかと思ふと、また煩惱が起るか、忽ち遺産の割當の事に戻つた。その割當の話の中で最も健作の意表に出たのは、あの財産目録の中の二萬圓の山といふのが高天山であつた事とその高天山を天理教に寄附するといふ話であつた。「え、あの高天山のことですか？」と健作は二度も聞直した位で、彼のやうな者にも高天が有難い山だといふ迷信が残つてゐたらしい。「それにしても、どうしてあの山が手に入つたんです、」と聞くと、丈助は次ぎのやうに答へた。「あの山は本當は仕様のない山だんね。ところが、あんたも知つての通り、死んだ兄貴が、あの山が好きで好きで、間がな隙がな、あの山の地面を假ひ一町でもええから買ひたいと、云ひ暮してたもんやから、私も兄貴には恩があるさかい金が纏つたら買うてやると狙つてたんや。そのうちに兄貴は死んでしもた。……あの山が私の手に入つたのが兄貴が死んだ翌年の春や。半年後れたんや。あんた知つてなはるや。あの鐘堂のあるお寺の裏に、新城ちふ大けな酒屋がおましやろ、高天で一ばん古い家柄の家

や。あの家があつた山を持つてたんやが、あの家が急に身代限りしよつてな、そのお蔭でわりに安買ひました。あの天邊の大けな野原も、あの池も、それから東側の墓地のある丘——あんたのお祖母はんのお墓のある——あの丘も、あの邊、みんな突包みで買うたんやけど、今いうた通り、肝腎の兄貴が死んでしもたさかい……」丈助はちよつと悲しさうな顔をした。

「それであの山を天理教に寄附するといふ譯ですか。」
 「左様や、左様や。……考へて見なはれ、若しあの山の天邊に天理さんのお社が建つたら、あの大けな廣場に一ばい、神主さんの家やら、信者の住む家やら、宿屋やら、病院やら、食べ物屋やら、雜貨屋やら、……數へたら限りあれへん。大小合して千軒ぐらゐの家が建つ。そしたら高天村は一遍に町になる。あそこら一體の地代が上る。二萬圓の元が五倍にも十倍にもなること受合や。五倍で十萬圓、十倍で二十萬圓や。」

健作は心の中で唸つた。彼に丈助といふ人間が分らなくなつて來た。淺草の料理屋で銘酌しながらも猶且天理教の功德を説いた時は聲をひそめて誰にも内所やと云つた丈助、明るい汽車の中で而も素面で利用して二萬圓を五倍にも十倍にもする魂膽を大平に打明ける丈助、——この二人の丈助が一人の丈助である事の理由は健作に分らなくなすが、僅か二週間ほどの間に餘りに裏腹

の丈助を見たので、彼は暫くの間呆氣に取られた。併し、今まで丈助を、丈助の人物は實に好きではあつたが、下目に見てゐた健作は、あの浅草の料理屋で逢つた時、あの時はまだ相手が酩酊してゐたからといふ口實が考へられるが、初めて丈助に壓迫を感じたが、この汽車の中の天理教と高天山の話のほど丈助に壓迫を感じたのは後にも先にもないと思つてよかつた。實際、健作はこの時——こんな大膽な事(彼にはさう思はれた)を云ひながら、丈助の顔が、遺言の割當に困る愚痴をこぼしたり、雪江が離縁されて當惑した事を白状したりする時の顔と、少しもその表情が違つてゐない事を發見した時——は、小説家などと威張つてゐる自分なぞ『甘えものだ』と考へ、まだまだ修業が足りないと思つた。ところが、まだその後があつた。——彼は丈助が「五倍で十萬、十倍で二十萬圓」と云つたのに對して何か適當な受答しなければならぬと思つて、「随分な信心ですねと」云つた。云つてから隨分間の抜けた返答だと思つてまごついた。さうして益々いけないと思つた。すると、丈助は云つた。「いや、私ら信心も何もあれへん。丈太郎があんな若いのにあんなもんを信心しよつてな、いつの間にやら私も誘ひ込まれたんや。あんなもん信心出来るもんだすかい。踊つたり、歌うたり、……それに、人を騙すようにお祈りするとき、神を入れた瓶に蝸をいれといひ、そつと酒を入れて神を動かすといふこつちやないか。そんなもん何

の信心出来るもんだすかい。あの爲めに身代つぶした人何人あるや知れん。その代りようしたもんで、食へんやうになつたら引取つて養うてくれるところは感心や。私、秀夫もあんな奴やさかい、商賣よう覺えなんたら、天理さんに入れてしもたかと思つてんね。ちやうど雪江が傍にゐるさかい、ええ按排やと思ふがどうだすやろ？」

「さあ、……」健作は答へる言葉を知らなかつた。唯、愈かなはんと思つた。

一事が萬事、この大和行は殆ど初から仕舞まで健作は立後れになつてしまつた。

丹波市でも、健作は有耶無耶のうちに丈助の供をさせられてしまつた。丈助は、汽車の中で云つた言葉が本當らしく、健作を待たしておいて、雪江を社務所の中に連れて行つて、その間一時間近くかかつた、出て來ると、神社の方は陸に參らず、すんすん町に行つた。社務所を出てから町で晝食を済ます時分まで、珍しく丈助の機嫌が悪かつた。丹波市から高田までの汽車の中で、健作がふと思ひ出して高天山の寄附の一件を尋ねると、「高天山の神さんと、天理さんの神さんとは、神さんが違ふと云うて受取りよれへんね、そのくせ金は受取りよつたけど」と丈助はまだ幾分不機嫌の氣味で云つた。これには健作は思はず吹出したが、丈助は笑はなかつた。

要するに、この大和旅行は行く時の期待と丸で反對の結果になつた。先づ最初に、丈助は、天

理教會で折角目論んで行つた高山山寄附の一件（これが今度の彼の大和旅行の中でも重要なプログラムの一だつた）が全く失敗に終つた事、健作は、汽車中の問答以來優越權を奪はれた形になつた事で、次ぎに彼等を待つてゐたのは、せつかく訪ねて行つた丈太郎が、彼等が到着した前日に、細君同道大阪の病院に入院した事、丈太郎の養母（丈助の兄嫁）のお政が、持病の胃擴張が愈ひどくなり、その上子宮痛を併發して、最近大阪の病院まで行つたが、快方に向はないので東京の丈助の家に厄介になり、そこから東京帝國大學病院に通ひ、事に依つたら入院するつもりで、近々上京しようと思ひ既にその仕度までしてゐた事などであつた。

さうして彼等がこの旅から得たところのものは、丈助は、彼が身内の中で唯一の便である丈太郎の病状がよくないといふ心配と、彼の身内のなかで最も馬の合はない、これも不治の病人である兄嫁のお政を居候に連れて歸つたことであつた。前者は心配だけで濟んだが、（無論入院費を送る事になつてゐる）後者は丈助自身『女手は入らんが』と健作に洩らした程の、その爲めに娘の雪江を天理教會に預けた程の、邪魔者を居候させる困惑ばかりでなく、彼女の胃擴張は彼女が云ふ程ひどくなつてゐない證據には、彼女は、丈助の家の三人のミシン工が三回に食ふ（即ち九食分）を一度に食ふことであつた、その爲めに氣と體が重くなるらしく、大學病院へ通ふ外は毎日

朝から晩まで芋虫のやうにごろごろしてゐる事であつた。それ等は見る目の轉さであつたが、と云つて心の轉さもないではなかつた。それは彼自身お政とは馬が合はなかつたが、何といつても彼女は彼の兄嫁であり、その兄は彼の恩人になるので、彼女の居候を斷る事が出来なかつた。それにもう一つ困つたのはお政とお萬が氣が合はない事だ。これは氣が合ふ筈がない。丈助はその二人の女の板挾になつてゐる心の轉さを感じた。

健作は、高天村滞在中、實は一日切りゐなかつたのだが、丈助と一緒に石屋を連れて祖母の墓に參つた、と見ると、丈助の云つた通り、墓は思つたよりひどくなつてゐた、その墓を建てた彼の伯父が儉約家だつたので、大きな臺石の代りに小石を交ぜたセメントで山の形を造り、その上に例の『旅に病むで』の墓石を立てたものだから、他の墓等より幾らか背が高く風變りに見えたが、そこが安物の悲しさ、石入りセメント山は雨露の爲めにくづれかかり、その爲めに墓石が可なり傾いてゐた、それを修繕した方がいいか臺石を變へた方がいいかを丈助と石屋に任したところ、なまじ修繕するより臺石を新しく奮發した方が得だらうと極まつたので、結局、得をしたのは石屋と墓ぐらゐのもので、彼は三百圓丸丸その墓に埋めたやうになつたこと、次ぎは丈助と一緒に大阪へ行き丈太郎を病院に見舞つた時、彼は丈太郎から大變な事を頼まれた、丈太郎は、叔

父の丈助が食堂へ買物に出かけた時、健作に清といふ女性にあなたから手紙を出して、丈太郎を見舞に行つてやれと書いてほしいと頼んだ、併し彼はそれを果さずに歸京した。その事が氣になり一種の負擔を感じたこと、つまり健作の大和行の損害はその二つだけで、他は高天山の櫻を下からだけしか見なかつた事と、大和名物の春霞を思ふ存分見られなかつたといふ位のものである。然し、これだけでは健作が歸京してからも一種の負擔を感じたといふ氣持がよく讀者に通じないかと思ふので、簡単にその理由を紹介すると、清といふのは、丈太郎がその時から半年ほど前に同じ病院に半月ほど入院してゐた時に知合つた女性であつた、否、知合つたのでなく、戀仲になつたんです、とその當時大阪のその病院から遙遙東京の健作に書いて來たことがあるのだ、蓋し丈太郎としてはさういふ報告の出來るのは健作より外になかつたのであらう。が、そんな手紙には幾ら小説業の健作にも返事のしようがない。抛つといた。また來た。抛つといた。終にはその清が丈太郎に宛てた手紙を封入して來た。健作はその手紙を見て豫想以上に驚いた。肺病同士がこれでは、と眉を擧げた。そのとき彼は初めて返事を出して、圓滑にそれは止した方がいいだらうと云ふ意味の言葉を書いた。それ切り丈太郎から手紙が來なくなつた。健作は何方かが退院して戀愛はそのままに消えたのであらうかと思つた。これが健作が大和行の墓石代位の負擔或ひは

それ以上の精神的な負擔を丈太郎の『事件』に感じた所以である。

お政は、その年の夏、東京帝國大學病院で、丈太郎は、その年の秋、大阪赤十字病院で、死んだ。雪江は、その年から三年目の秋、大和國丹波市町天理教病院で、死んだ。

丈助が、時々、その大きな無骨な手を胸に當てて、「ここがどきん、どきんして、息どしうて、息どしうて、仕様あれへん、」と云ひ出したのは、彼が六十歳の頃であつた。が、それは月に一度か二度ぐらゐ起るほどの發作のやうなもので、まだ『心臓病』と名がつく程ひどくはなかつたし、その二三年前から、商賣はますます順調に進んでゐたし、男まさりと云はれる後妻のお萬はすっかり商賣に慣れたし、彼の郷里から正直が取得で呼寄せた番頭の頼吉も、これは買出しとか賣捌きとかの外交の役をしてゐたのだが、百姓上りには珍しく、半年立たぬうちに、商賣の骨を呑込み、品物の賣買も丈助が眞似が出来ないほど巧者になつたので、しぜん丈助も乘氣になり、二合に極めた晩酌を濟ますと、他の二人と一緒に、寝る時まで働くやうにした、尤も、例の「心臓が、どきん、どきんした」日は晩酌（これは止めなかつた）を濟まして直ぐ床に就いたが、かういふ調子が二年程つづき、商賣が面白いほど繁昌したので、それに連れて若いお萬と頼吉

が最もよく働き最もよく稼いだ。その爲めに、この二年程の間に、丈助の財産は二年前の三倍ぐらゐになつた。が、それは丈助には餘り問題にならなかつた。彼はこの二年程の間、働く事と稼ぐ事は七分通りお萬と頼吉に委し、彼自身は數年前から氣にかかつてゐた財産（彼はそれを遺産とも云つた）を割當てる仕事に掛つてゐたので、（この事は、彼が遺言にすることに極めてゐたら、彼以外の誰も知らなかつた）彼は財産が殖えれば殖える程その財産（或ひは遺産）の割當を随分思切りよく變へてゐたので、彼には、財産が三倍にならうが五倍にならうが、殖えたとも減つたとも思ふ氣がしなかつた。それに彼は金を儲ける事（同時に損する事）ばかり考へつづけて自分自身が金を使ふ方法を少しも考へた事がなかつた點で、見方に依ると、彼には金の價値が分らなかつたとも云へるから。——それを強ひて理論づける譯でなく、丈助には人と變つた道樂があつた。それは彼自身は酒を除いた殆ど一切の贅澤品（一例、齒磨、石鹼、電車賃の類まで）を儉約しながら、どんな遠い親戚（一例、後妻の弟の嫁の里）でも、親戚の片端に當る家、或ひは人で、貧困な家、或ひは貧困な人があると、大きいのは田畑、小さいのは金錢を與へ、時とする、事情と人柄さへ納得できるなら、家主や賣買する商人たちにまで、無利息で金を貸す、といふ佛性ほとけしやうを持つてゐることであつた。この丈助の道樂は、お萬はいふ迄もなく、頼吉にも好かれな

かつた、尤も、それがお萬の親戚に施される時は彼女は喜んだが。——
何れにしても、この二年程の間は、丈助も、お萬も、頼吉も、幸福であつた。殊に丈助には、一月に一二度ぐらゐ「心臓が、どきん、どきん」する日はあつても、お萬には内所で、長年心に掛つてゐた財産（或ひは遺産）の割當も、既に大方極めて、半紙の端はしに書き、外ほかの者の目に附かぬ所に仕舞つたし、困つてゐる親類どもにはそれぞれ田地や畑や金を分けてやつたし、と思ふと彼はこの何年來、いや何十年來に覺えない安心を得た氣がした。

ところが、商賣がとんとん拍子に成功するに連れて、老いたる彼の精力が日に日に衰弱して行く反對に、四十四歳のお萬は、ますます丈夫になり、二十八歳の元氣盛りの頼吉と一緒にますます精を出したので、彼の店先みせさきは目の廻るほど繁昌した。それを眺めると、丈助は楽しくなると共に寂しくなつた。楽しいのは商賣が繁昌する事で、寂しいのは彼自身の元氣の衰へて行くのが分ることであつた。その時、彼は六十二歳だつた。

そこで彼は酒で元氣を付けようと思つた。「今まで二年も辛抱しんぱうして養生してなはつたのに、」とお萬が止めたが、彼は「死んでもええ、もう一ぺん元氣を付けて、働きたい、」と云つた。「今でも働いてなはるやないか、」とお萬が有めたが無駄だつた。が、いざとなると口ほどでもなかつた。

それを云ひ出してから、後三四日は無理にも飲んでゐたやうだつたが、四日目あたりから却つて飲む酒の量が少しづつ減り出した。さうして五日目の晩、晩酌をやつてゐる時、突然彼は盃をがちやりと卓袱臺の上に置いて、久振り（半月振り）で、あの大きな無骨な手を胸に當てる恰好をしながら、この時は餘程苦しかつたと見えて、ただ「息どしい、息どしい」と叫びながら、お萬の進めるままに直ぐ床に就いた。その翌日、嫌がるのを無理に醫者に見せると、醫者は、子供を賺すやうに、好きな酒だから急には止せないだらうが、段段に減らして行つた方がいいと丈助に云ひ、歸りがけに、「一週間ほど静かな所へ轉地させた方がいいでせう」とお萬に耳打した。その時、醫者は千葉縣の或る鑛泉場の町の名をお萬に教へた。それは秋の末頃のことであつた。

その翌日、お萬は丈助に、醫者の云つた事を、なるべく氣に障らないように傳へたが、彼は子供が駄駄をこねる時のやうに何度も首を横に振り、「今日はもうこないに具合がええやないか」と云つて、何時ものやうに床を離れ、何時ものやうに朝飯を食ひ、何時ものやうに店番の位置に坐つた。この時の彼の家は、健作、流行唄職人、馬の脚番頭等が同居してゐた家は震災で焼けてしまつたので、區劃整理の爲めに場所は横町に變つたが、大屋に金がなかつたので、彼が條件附で金を出して商店兼住宅向に建てたので、店の間が十二疊ほど、奥が長四疊、その隣に二疊、階段

は矢張り急だつたが、二階は八疊、（往來に面す）六疊の二間だつたから、丈助夫妻、秀夫、（十八歳になつてゐた）頓吉の四人ぐらしには十分過ぎる位であつた。その店の間には、三方（正確に云ふと二方半）に設けられた棚に種々様々の反物が横に積み込まれ、棚に入り切らない反物が隨所に山積にされてゐたので、それ等の商品がその十二疊程の間の八疊分ぐらゐを占めてゐた。丈助は、この數年の間、その眞中に置物のやうに坐りつづけた。客の爲めに品物の出し入れをしたり勘定をしたりする仕事を彼に代つてお萬が一切するやうになつたからである。

間口が三間で、間中（三尺）の硝子戸が六枚並んでゐて、その眞中の二枚が出入口になつてゐた。二三人の客が入替り立替り來るので、その出入口の硝子戸は、店を明けてゐる間は、間斷なく明けたり締めたりされた。最も忙しい時はそれが開放されたままになつてゐる事があつた。丈助は、自分が一人で商賣の切盛をしてゐる時は、そんな事は目にも入らず氣にもかけなかつたが、かういふ置物のやうな閑地にゐると、先づ客の種類や恰好や身分などが氣になり始めた。その中で、最も數の多い場末の小賣商人や縁日商人や大道商人などは前から顔馴染の者が多いので氣にならなかつたが、子供を背負つた寡婦たちと緞子を買ひに來る支那人たちが氣になつた。その理由は簡單だつた。寡婦たちや支那人たちには油斷がならなかつたからだ。併し、彼は、二三

年前までは、支那人たちは、横着だといふので憎んでゐたが、寡婦たちは、貧に困つてゐるからといふ譯で、わざと見逃してやつたり、品物を負けてやつたりしたものだ。それが店番専門になつてからは、商品を盗まれたり金を胡魔化されたりするといふ事が、次第に彼の神経に障るやうになり、終にはその爲めに例の心臓が『どきんどきん』の度数が多くなつて來たので、今度は醫者が直接に丈助に鑛泉場行を進めたので、秀夫を連れて行くといふ條件で、お萬はやつと彼を納得さして、三人づれで出かける事になつた。が、それも一晩泊つた切りで歸つて來た。それは、自分とお萬とが留守になつた家の商賣の心配と、高い金を出して、こんな味ない酒を飲まされ、こんな濁つた風呂に入るくらゐなら、東京に歸つて五錢の風呂へ行つた方がすつと氣持がええといふ理由だつた。

この一泊の鑛泉場行から歸つた翌日、秋の末には珍しく寒い日が來たので、その晩丈助は不斷より少し晩酌の度を過ぎた。それでも、まだ寒いと云つて、晩酌を済ますと、風呂に行くといひ出した。彼が自分から風呂へ行くと云ひ出したのは何年ぶりか、お萬にも記憶がない程であつた。然し、そのお萬も、酒の後で、而も度を過ぎた酒の後で、風呂へ行くのは、と心配になつたので、幾度も止めたが、丈助は怒つて、彼女の言葉を聞入れなかつた。

お萬が心配してゐるところへ、丈助は上機嫌で歸て來つて、「何んとも云へんええ氣持や」と叫んだ。丈助のそんな上機嫌な顔附は何年にも聞きもしなかつたので、お萬は一瞬ちよつと嬉しい氣がしたが、直ぐ何故か心底から嬉しい氣がしなかつた。といふより何か不安な氣がした。丈助はお萬のそんな氣持を察する筈もなく直ぐ寝てしまつた。

この晩から、丈助は、一日おきか毎日に、晩酌を済ますと直ぐに錢湯に出かける習慣になつた。晩酌は每晚缺かさなかつたが、錢湯がときどき一日おきになるのはお萬の思惑が憚られたからで、彼女の目がなかつたら、錢湯行も每晚やつたかも知れない、と思はれるほど彼は風呂すきになつた。年とつた丈助の生き甲斐は、いつか商賣繁昌(金儲け)から寄路して、晩酌と風呂とに乘換へたやうに見えた。終には、彼は、この「酒を飲むと風呂に行きたくなり、風呂に行きたくなると酒を飲みたくなる」といふ習慣(道樂)を、何時頃からか『酒風呂』と命名し、お萬が、「晩酌は止さんでもええけど風呂の方は朝風呂にしなはつたらどうだす」と諫言すると、彼はその『酒風呂』を持出して、「私は今この外に楽しみがないんやから」と情なさうな顔をして歎願した。それにはお萬も負けた。

このお萬が心底から不安に思ひ、丈助が何とも云へんええ氣持やと云つた『酒風呂』は、彼の

六十二歳の晩秋から六十三歳の初夏にかけての約半年の間、彼を「何とも云へんええ氣持」に酔はしておいて、突然、初鰹の呼聲の聞ゆる五月の或る日、彼の老いたる心臓に飛行機のプロペラの如く廻轉する動悸を起させ、彼の老いたる目に、萬太湯から彼の家までの下町情緒溢るる如き平和な町に、忽ち大地震が起つたかと思はせるやうな錯覺を起させ、やがてその心臓の急速なピストンが逆に緩慢になつたかと思ふと、急に今まで揺れてゐた天も地も町もスーツと眞暗になつて來たので、彼の老いたる心に、これが此世の見收めかと諦めさせたほど苦しい思ひをさせる事になつた。

然し、丈助は死ななかつた。その代り、彼はその時かぎり錢湯はおろか風呂と名の附くものさへ入れなくなつた。そればかりでなく、その時以來、彼は寢床に横臥も仰臥も出來なくなつた。體を横にすると、今度は「心臓が、どきん、どきん」など云ふ生優しいものではなく、忽ち心臓の動悸が激しくなり今にも息が絶えるかと思ふほど苦しくなつた。そんな状態になつてゐながら、彼はまだ店番を止めなかつた。商賣が氣になると云ふのだつた。それを幾らお萬が止めても彼は承知しなかつた。その頃から、體が不自由になればなるほど、頭の活動が變に鋭くなつて來た。さうしてその鋭い頭の活動は、肉體が衰へてゐるだけ、心臓に與へる刺戟がひどかつたので、前に

は、寡婦たちや支那人たちが悪い事をする所を見つけると、唯はツとして、「心臓が、どきん、どきん」の程度だつたが、今は彼等が悪い事をした所だけでなく、悪い事をしようとする形を見ても、忽ち動悸の亂打が起り、今にも息が止まるやうな氣がした。さうしてその時は彼自身もさう思ひ傍の者もさう思つた。——そんな事が半年近くの間は何度あつたか知れなかつた。

そのうちに、顔色はますます悪くなり、角張つた顔がとげとげし、猪のやうだつた首が幽靈のやうに細くなり、始終俯向き勝ちであるので、持前の分厚の唇が一層分厚くなり、頑丈だつた體が瘦せ細つて小さく見え、顔だけが大きく見えた。それと共に、次第に心臓の苦痛に襲はれる度數が多くなつた。或る日、いつかの醫者が、こんな繁忙の刺戟の多い中に、こんな病人を置く事は、ある命を縮めさせるやうなものだと云つたので、お萬は頓吉の力を借りて、丈助を二階に擔ぎ上げ、横になれない病人のために、炬燵檯を前に置き後に蒲團を積み重ね、その間に丈助を置いた。

ところが、二階に上げられた丈助は、殆ど十分十五分おき位と云つていい程、手を叩いてお萬を呼んだ。客を相手にしてゐたお萬が大急ぎで上つて行くと、「あの客には貸したらいかん、」とか、「あれは一ヤル二十錢に負けといたれ、」とかいふ用事だけだつた。こんな風に二階に上つた

丈助は絶えず階下の事が氣にかかった。その爲めに何度となくお萬が呼び上げられた。併し、お萬は、その當惑よりも、丈助の病狀が次第に悪くなつて行くらしい事が苦になつた。彼女は途方にくれた擧句、「それでは、階下の奥の間イ行きまつか、その方が氣イが晴れるかも知れへん」と云ふと、丈助は言下に承知した。

階下の長四疊の部屋は丈助にわりに氣に入つた、手を叩いてお萬を呼ばなくても済むし、硝子障子からは店の様子も見えたから。併しこれも一週間と持たなかつた。店の様子を見てゐるうちに、彼の嫌ひな支那人が一日に何人かは来る。支那人が例の通り隙を見て無斷で品物を持つて行く。それを見附けては、ツと思ふと忽ち心臟のピストンが速度を増す。文字どほり息が詰まりかける。こんな事が一日に二三度起ると、彼はまた二階に上りたいと云ひ出した。終には、今日は階下明日は二階となり、ひどくなると、午前は二階午後は階下といふ風になつた。たまらなくなつて、お萬がその事を醫者に訴へると、「二階と階下とは大變だ。今度は思ひ切つて入院させては、」と醫者は云つた。そこで、丈助は生れて初めて入院することになり、お萬が附添で行くことになつた。併し、これも唯の二日で歸つた。「醫者とお萬が相談して、わしを殺しつもらる、」などと云ひ出したからだ。病院から歸つてからは、お萬は帯を解く暇がなくなつた。夜中にいつ起き

れるか分らなかつたからだ。

病院から歸つてからは、丈助はずつと二階に落着くことになつた。といふよりも、もう體が殆ど動かせなくなつたのだ。それは十二月の上旬で、火を入れた炬燵と蒲團の間の丈助の病床は、彼の注文で往來に面する窓際に設けられた。絶對的不眠病にかかつた丈助は、夜中でも、寒中でも、「陰氣や、」と云つて、窓を締めることを拒んだ。窓を明けられて、最も困つたのは附添のお萬であつた。或る晩、彼が用足に行つてゐる際に、彼女が彼の病床を掃除すると、炬燵蒲團の下から茶切庖丁が出て來たことがあつた。それを機嫌のいい時を見計つて病人に聞くと、「わしが死んだら、みんなが可哀さうやから、いつそのこと殺してしまつたと思たんや、」と眞面目に云つた。それ以來、お萬は心にかけて、茶切庖丁に限らず、一切の切物を上蓋の下に隠したが、いつの間にも嗅ぎ出すのか、隠しても隠しても、病人の蒲團の下からそれが出て來るので一層氣味悪くなつた。その頃、お萬は思ひ切つて下女を雇つた。尤も、お萬は、その半年前頃から、なるべく病人の神経を昂奮させないよふと思つて、商賣を追々に切詰めることに極めて、商品の仕入なども少しづつ控目にし、段段に客足を減らすよふにした。が、そんな風にしても、丈助の病氣は悪くなる一方で、或る時などは夜中に窓から往來に向つて、「近々にこの家に人殺しがあるかも知

「れまへん」と叫んだり、お萬が自分を厄介者扱ひにして毒を飲ますらしいと云ひ出したりして、一切の薬を飲む事を拒んだり、小さな半床はんどこに掛けてある縁日物の大師の像に水を供へそれを有難がつて飲んだりしてゐた。その頃の或る日、丈助の病氣が可なり重いと聞いて、健作夫妻が見舞に來た。丈助は健作夫妻を見ると非常に喜んで、

「よう來てくれはつた、今西新井へお大師さんを迎ひに行ってもらおと思つたところや、あんな達迎ひに行て來てんか」と云つた。健作が返答に困つてゐると、「いつそのこと、私も一緒に連れて行つてんか。」

「だつて、をぢさんはお體がお悪いんですから」と健作の細君が口を挟むと、

「そんな薄情な事いひなはん、そんなら自動車で連れて行てくれたらええやないか。……それとも、これから直ぐ、お前はん達の家へ連れて行て、庭の隅でも構へんさかい、泊めてんか」と丈助は云つた。健作夫妻がまた返答に困つてゐると、丈助は又つづけて「私はもう助からん。……今度はどうでも助からんと思ふ……私が死んだら、後の奴が困りよるさかい、私は死にともしんや。……牧はん、私を助けるとして、西新井のお大師さんを迎ひに行とくなはれんか。」

健作は三たび返答に困つた。その時、ふと彼は、この前見舞に來たとき丈助が云つた、次ぎの

やうな言葉を思ひ出した。「健作さん」と丈助は改まつた言葉になつて、「私はとうから考へてるんやが、先に、お前はんと一緒に大和イ行つた時、天理さんであれを斷られて、私、口には云はなんだけど、あんなに口惜しかつた事あれへん。……健作さん、私は天理はんはあんまり好きやなかつたんやけどナ、彼處に——丹波市——に困つた人をただで泊める、大けな、ハイカラに云ふと、無料宿泊所みたいなんで、すゐぶん大きな宿屋があるね、その宿屋の名前は忘れたが、何んでも神さんらしい名アが附いたアつた。そこは本所あたりのんと違て、一晚や二晩だけ泊めるやなうて、一と月でも二た月でも泊めてくれよんね、……そこに、私は、今まで誰にも云うた事ないけど、むかし、半年位ゐた事があんな……私は、ナ、健作さん、直つたら、あんな大けな無料宿泊所を建てたいと、先せんから思つたんや。……」これはお萬が傍にゐないとき丈助が話したのであるが、病氣になつてからも、病氣にならない前も、丈助には、非常に善人のところと、その反對なところがある事を、健作は前から氣がついてゐた。が、この時の言葉には健作はちよつと心を引かれた。

さう云ふ丈助の顔を見ると、もう浮腫むくみが來てゐるらしく、兩方の目が落ち凹み、始終俯向き勝ちでゐると、浮腫の爲めに、元もと分厚な唇が一層分厚になつてゐたので、全體の顔が、それ

は健作が二十年前大和で初めて會つたときに既に阿弗利加邊の土人の顔を思はせたものだが、今はその顔に死病的な感じが加はつてゐたので、悲惨、といふより正視してゐられない或る醜惡さを持つてゐた。然し、その正視できない顔に、よく見ると二十年前の面影が残つてゐるので、「そんな薄情な事いひなはんな、」とか、「庭の隅でも構へんさかい、」とか云はれると、彼は、返答が出来ないと云ふより、涙ぐましいと云ふより、何か譯の分らない感情が胸の底から込上げて来るやうな氣がした。その時、表の方に自動車の止まる音がした。と、病人も、傍にゐたお萬も、一様に聞耳を立てたので、健作夫妻はそれを潮に立たうとした。と、彼等よりも早くお萬が立上つて、「大和の連中が着いたらしい、」と獨言ちながら、飛ぶやうに梯子段を下りて行つた。

「ちよつと待つてくれなはれ、」と丈助は健作が立ちかかるのを止めて、「今、下に來よつたのはお萬の弟夫婦と娘の三人連や、此方から電報打つて呼んだんや。實はな、」そこで丈助は聲を低くした。健作は目を見張つた。今先きまであんな他愛ない事を云つてゐた丈助が、こんな重態にある丈助が、お萬が傍にゐなくなつてから、別人の丈助になつたからだ。容貌怪異の丈助は聲を低くして話しつづけた。「その娘ちふのはお萬の姪や、……その娘を急に嫁に貰ふ事になつたんや。私は丈太郎の娘を貰ひたかつたんやが、年が少な過ぎんね、やつと今年十二イヤ。それに、あんなも知つてる通り、秀夫は本眞は私の孫やから、甥の娘と秀夫と夫婦にしたもんなら、孫同士を夫婦にするのと同じやろ。そんな譯で、お萬の姪を秀夫の嫁に貰ふことにしたんやが、私は今それを後悔してんね、何しよ、その娘の兩親ちふんが、今、階下に来てよる奴や、それが慾ほけで、慾ほけで、……私がまだ丈夫な時分に、あんなり貧乏してよるさかい、金やといかん思て、大和へ行た時、丈太郎にやる田地を少し分けてやつたことがあるんや。……ところがそいつは、私には、お萬から貰へへん、お萬には、私から貰へへん云うて、兩方から金と田地を取るやうな奴がよつてに……」

案外話が長くなりさうなので、外に用事を持つてゐた健作の妻は、丈助の話の跡切れた時を見計らつて、暇を告げて行つた、それは健作にも都合がよかつたし、丈助も彼には氣が置けなかつた。二人切りになると、ぼつんぼつんとだが、丈助は健作が驚くほどいろいろ話（健作にだけ云へる愚痴でもあつた）をつづけた。さいはひ、お萬は病人を健作に預けておいて、階下で『大和の連中』と、人數が多いわりに小聲で頻りに話をしてゐた。

「牧はん、すつと前、あんたに相談した身代の割當のことも、いろいろあんたと相談したかつたんやが、この二三年、私も老いぼれて、それに病氣で頭がぼオとしてしもたさかい、あんた見た

いな賢い人が恐い気がして、どうぞかうぞ私ひとりであの方は極めてしまひましたかな……」丈助の凹んだ目に微かに涙が浮んだ。「牧はん、私は口惜しいよ……考へてみると、六十年の間ちふもんは、私は譯わからずに、金、金と思つて、汗水たらして、損したり儲けたり……あなたに大和で初めて會つた時は……あなたにや分らなんだやろけど、私の一生の中で、あん時が一番底の時やつた、……何度、あの、あの高天山の天邊の池で、身投げしたる思たか知れへん……それが、東京イ來て、あんたのお蔭で……」

その時、秀夫が健作に茶を丈助に大師の『御水』を運んで來た。氣がつくと、秀夫は先きから隣の六疊の部屋にゐたらしかつたのだ。彼も二十歳になつてゐた。さうして不斷の仕事着でなく普通の着物を着てゐた。彼は茶と『御水』を置く隣りの部屋へ歸つて行つた。健作は彼を何年振りかで見ただのであるが、その動作から幾らか前よりもまじになつてゐるやうに察せられた。無口、といふより、少年時代には一人前に物が云へなかつたのだが、それが簡単に人並の挨拶の言葉が使へる程になつてゐることも健作の新発見であつた。秀夫の姿が隣の部屋に消えると、丈助は一層低い聲で、

「牧はん……お蔭で、まア、……私の病氣だけはどうにもならんが……外に苦ウになる事はない

けど、あいつだけが矢張り一ばん苦ウになる、然し、私も眞の身内ちふのは、彼奴ひとり見たいなもんやからなア、……昨日から彼奴だけ商賣休まして私の傍にゐさしておまんね、私もいつ死ぬか分らんさかい、……」そこで丈助は、疲れたのか物を考へる爲めか、炬燵櫓の上に顔を伏せた。その間がちよつと長かつたので、健作はちよつと心配になつたが、やがて丈助は顔を上げて、「牧はん、……これはお前はんだけにする話やが、……考へて見ると、私が、汗水たらして拵へた金や、……その金で買つた山や、田地や、畑で、一生樂に暮すのんは、みんな他人や。……今、階下にゐるお萬の弟夫婦も、その娘も、……明日あたり、また大和から來よるお萬の妹夫婦も、……それから丈太郎の嫁も……あいつ等がみんな來よつたら、……今ゐるのが、……三イ四オ五ツ六ウ、と六人。と、それからお萬と、頓吉と、秀夫と、お梅と、……十人、……十人も集まりよつたら、この家の中に入り切れへんかな。……そや、そや、まだある。あんた知つてやほるやろ、世田ヶ谷の私の妹と甥の夫婦がゐつた、……」そこで又丈助は炬燵櫓の上に顔を伏せた。……これ等の丈助の話は、實に緩慢に、切切に、さうして息苦しさに述べられた。……今度は前より時間が長かつたが、肩が呼吸と共に揺れてゐたので、健作は安心した。……やがて丈助は顔を上げたが、今度はその顔附に何か苛立つてゐる様子が見えた。……暫く口をもぐもぐさせて

から、「牧はん、」と彼は口を切つた。

「牧はん、私……いま来よつた大和の連中……會はずに歸してやるかと思ふね、あいつ等の顔を見ると、むかむかする……」

「だつて、まだ會はないんでせう？」

「うむ。」

「此方から電報で呼んだんでせう？」

「うむ、そんなこと構へん。あいつら一文も出しよるもんかい。どうせ旅費をやるんやから、一日も早い方がええ。あんた、階下へ行って、さう云うてんか……」

「だつて、秀夫君のなにが來てるんぢやありませんか。」

「そんなこと構へん、あいつ等が一生食ふに困らんぐらゐの田地もやつたアるんやから。」

「親達は、大人だし、あんたの氣質を知つてるから、構はないとしても、その娘さんが……それに、そんな事いつたらお上さんが困るでせう、それは可哀さうだな……」健作が云ふと、

「可哀さうなのは私や。あいつ等はまだ壽命があるんやから、……これから私のやつた金で、何ぼでも贅澤でけるけど、……肝腎の金をやつた私は、私は堪らん……私はもう使ひたうても使へ

んやないか！……あいつ等の顔を見るのも、胸糞が悪い！……さう思ふと、お萬の奴も憎い、あいつ等みな同腹や……、あいつ等も、……明日來よる奴等も同腹や……」

健作は下手な受答をすると病人を興奮させるといけないと思つたので、

「明日いらつしやるといふのも大和の御連中ですか？」と當らず觸らずのことを聞いてみた。

「何？、大和のご連中……」丈助は直ぐには意味が通じなかつたらしく、それを分らうとして、

ちよつと健作の顔を見詰めてから、「うむ、大和の連中か、……これも矢張りお萬の兄妹や、……

明日來よるのは妹夫婦や、……妹の亭主は、石屋の職人をしてよつたんを、あの妹が行きよる時石屋を始める元がないといふんで、その金を私が持參金に持たしてやつたんや。……それに、四年前、私とお萬の墓を建てる時に注文してやつたのに、一番ええ石の代を取つといへばん悪い石を使ひよつてん。……悪い事は出來んもんや、その翌年の秋、大嵐があつた時、私の墓とお萬の墓が、嵐の爲めに、轉けた拍子に二つとも割れてしもたんや。外にも轉けたんが四つ五つあつたが、その方は一つも、割れも、缺けもせえへなんださうや……。私がそれから一と月ほど立つて行つた時、外の石屋を連れて行て見せると、それが一ばん悪い石やちふ事が分つてん。その石屋に一番ええ石で注文すると同じ大ききさで、あいつの半分の値エやつた……」そこで丈助を疲ら

せない爲めに

「それはひどいですね、」と健作は思つた通りの言葉で相槌を打つた。ところが、その「それはひどいですね」といふ相槌の言葉がいけなかつた。

「あんたかてさう思ふやろ、」と丈助が受けた。「……あんな奴まで、……明日、……のこのやつて来よるかと思ふと、……彼奴といひ、今、階下にゐる奴といひ、……牧はん、……あんな奴等に、一生の半分かかつて、……汗水たらして拵へた金や、……田地をやつたと思ふと、……あんな奴等が、……私が汗水たらして拵へた金……その金で買つた山や、田地や、畑のお蔭で、……一生樂に暮しよと思ふと、……牧はん、私は……私は……私は……取返し附かん事をしたと思つて、……彼奴と……彼奴と……みな、お萬の身内や、……一イ、二ウ、三イ……彼奴と、彼奴と、……あんな奴等に會ふもんか、……あんな奴等に、……」

仕舞には、話といふより獨言の形になり、それが次第に躍起になつて來た。これはいけないと思つて、健作は出来るだけ落置いた低い聲で、

「中戸さん……いつかの書置どうしました、あれから書直しましたか、」と聞いてみた。健作の落着いた聲と『書置』といふ言葉は躍起になつてゐた丈助の氣持を幾らか鎮める役をした。丈助は

漸く落着いた低い聲で、

「あれ、書直しましたけど、……見つかるかと煩いさかい、……みんな……破つてしまひました。」

「それぢや後でお困りでせう。」

「大丈夫や、外の事は忘れても、……割當の勘定は……ちゃんと覚えてます。……」

この最後の言葉は、大袈裟に云ふと健作に襟を正さした。さうしてここでも躍起の丈助と落着の丈助が隣合せになつてゐる事を發見して、健作は、一種の驚きと興味の外に、一種の氣味悪さを感じた。――

それから三日後、丈助は、お萬と秀夫を傍に呼び、秀夫に紙と筆を持たせて、

「私のいふことを一々書いてくれ、」と云つた。彼の言葉は瀕死の病人と思へない程しつかりしてゐた。

彼は、いつか大和へ行くとき健作に見せた財産目録（兼遺書）よりもつと詳細な目録を、實に緩慢に、切々に、さうして息苦しさうにだが、お萬と秀夫が驚くほど細かく述べた。さうして、若しそれを健作が傍で聞いてゐたら、健作も驚くに違ひないほど、詳細な割當を次ぎ次ぎと秀夫

に書き取らした。お萬が顔に不満な色を現した。これが今にも息を引取りさうな、而も心臓病の病人かと思へる程しつかりした言葉で、その口述の時間も可なり長かつた。それを俯向いて聞いてゐる健康な二人の方が苦しかつた位であつた。

やがて、それが終つた。さうして、ちよつと間まがあつた。

それから、突然、

「秀夫！」と呼びかけるやうな聲が聞えた。

秀夫が、少し後れてお萬が、顔を上げて、聲のした方を見ると、丈助は、炬燵櫓の上に、両手で首を挟むやうな恰好をして、顔を伏せてゐた。

鼻
提
灯

柳橋きつて、まあ、このくらゐ優しい、しとやかな、女らしい女といふのはないだらう、といふのが、出先とか、その外さういふ噂をする所での、専らの評判であつた。尤も、格は一流といふ譯には行かなかつたが、みすすといふ名の妓で、どんなに氣息急切つて駈け出して來ても、履物は一寸と離して脱ぎ捨てたことはなく、どんなに大急ぎで物を食べても箸の先を五分と汚したことはなく、煙草は吸はず、酒も嗜まなかつた。やや口數の少な過ぎるのが瑕と云へば瑕であつたが、といつて別に取澄ましてゐるといふ風はなし、慎ましやかな中に、十分女らしい色氣を含んでゐたし、それで……年は十九だつた。

男といふのは……その……旦那といふほど重い關係ではなく、といつて『色』といふやうなそんな軽いものでもなく、兎に角、女とは二年近い馴染の間柄であつた。日本橋の或る紙問屋の一息子で、年は二十四だつた。これが又やさしい、男にしては少し内氣過ぎる質で、そんなに繁と女の許に通つて來るのに、廣い柳橋中でいつも唯一つの待合と極つてゐた。恐らくこの男は大勢の連と一緒に宴會で料理屋に上つた時と、遊び初めに何度か友達と一緒に來た時とを除くと、彼は藝者といふものは、みすすの外には座敷で見たことがなかつたといつても、大した間違ひに

はならないかも知れない。

それで、二人は、三日に上げず、といひたかつたが、實際は月のうちで半分より少なく會はない日はなかつた。ちよこちよこ夜遅く一時間ぐらゐ來て歸つて行くこともあるし、こつそりと晝間やつて來て三時間以上坐つて歸ることもあるし、月に一二度は泊つて行くこともあり、一晩泊りぐらゐの遠出に行くこともあつた。それほど會ふのだから、それは男にも女にも多少の無理はあつたが、といつてそれも身が詰まるといふ程のものではなかつた。だから、待合などでも、二人があまり大人おとなしくて、そして睦じ過ぎるのが氣になることもないではなかつたが、それも、つまりは、やがて男の方の家に結婚問題が持上つて、その折にみすずのことが親たちの耳に這入つて、もう耳に這入つてゐるかも知れないが、まあ、一と騒ぎぐらゐ起ることは免れないだらう、だが、どんな親たちだつて、あの大人しい、人柄なみすずを見れば腹がをさまるだらう、で、結局二人は夫婦になるだらう、——と斯う誰もが安心し切つてゐた。その待合の俗にいふ海千山千のお上までもそれを信じてゐた。

無論、當の二人の間には、それくらゐの、或ひはそれ以上の言交いひかわせはあつたらうと思ふ。尤も、また考へやうに依ると、かういふ二人のことであるから、もしかすると、言葉の上では何の約束

など交したことがないかも知れない。が、當の二人は、言はず語らずのうちに、互にさうなことを信じてゐたといふことも確だらう。まつたく、彼等は、彼等を知つてゐる如何なる人からも好意を持たれた。よく似合つた、美しい、多少芝居めいてはゐたが、實際ふさはしい一對であつた。男は——背の高い、瘦せぎすの、色の白い、それでゐて、きりつとしたところのある、所謂好男子であつた。難をいふと、目が少し頓狂に大き過ぎること、餘程氣をつけてゐるやうではあるが、どうかすると、少し吃る癖があることだつた。女も——中背ではあるが、少し瘦せ過ぎてゐた。顔は稍々平面ひらおもてではあつたが、大き過ぎもせず、小さ過ぎもせず、目鼻立はかへつて整ひ過ぎてゐるといふことに難があればあるのだが、それも少し釣上りつりあが氣味の目が、調和を破つた調和をもつてゐた。さうして、その目付めつきが彼女の或る氣質を現してゐるやうに見えることだつた。大人しいには大人しいが、随分強い疝癖けんぺきを持つてゐる事を現してゐるやうに見えることだつた。そのせゐだらうか、一つ妙な癖があつた。それは滅多に出さなかつたが、——突然、噓くそめでも出さうになつた時のやうな風に、顔をこころもち俯向けて、左手で半巾を持つて鼻の下を蔽ふやうにしながら、それと同時に素早く右手を、半巾で隠された口の端へ持つて行くのである。何の爲めか、何をするのか、それは誰にも分らなかつた。齒をほじりでもするのか、それとも唇を噛みで

もするのか、誰も、その半巾の陰の仕種しむぎを見たものはないのであるから、分る筈はなかつた。殊にさういふ慎み深い質の女であつたから、それを若し人のゐない部屋でするところが、必ずやつぱり半巾で蔽ふことを忘れはしなかつたらう。兎に角、それは人前で爪楊枝を使ふ時の恰好——といふのが一番近いであらう。實際、二三度や、三四度會つた人には、そんな事は氣がつかない、まつたく爪楊枝でも使つてゐるぐらゐに見過ごすに違ひないので、唯、さうする時の前後の表情が妙に緊張して見えるので、何か、瘡かさのための仕種だらうとは思はれたのである。それは愛人のアさんでさへ初めのうちは知らなかつたくらゐである。——

だが、幾度もいふ通り、珍しいしとやかな女に違ひなかつた。中年から急に境遇が變つて藝妓に出たといふやうな女の中にも、これほど大人しいしとやかな妓を見出すことは困難であらう。無論、さういふことは人各々持つて生れたものに違ひないので、その經て來た境遇の影響などといふものは極めて薄いものと見える。何故なら、彼女は所謂下地ツ子と呼ばれる時代から斯ういふ社會に育てられ、さて半玉の頃には姐藝者の唄に合はせて「かつぽれ」も踊り、年年の春秋の溫習會には出演する義理も缺かさず、さうして、十九歳の今日まで、藝妓としてその踏むべき道は一通り踏んで來たものである。けれども、何といつても、この大人し過ぎるといふことの爲め

に、萬人の客に向くといふ譯には行かなかつたが、五人反對するものがあるとすると、同じ數だけの最氣する客を持つてゐることも確だつた。

「どうだい、はアさんは……相變らず圓滿かね？」

いつ誰からとなく聞えるものと見えて、稀にこんな風にかからかふ客があつても、彼女は一瞬間はツとして顔を上げるが、すぐ又伏せて、

「あたし……知らないわ、」と靜かな聲で答へた。

「さう——澄ますなよ、」と客が穩かに笑ひながら、「はアさん——か。はア——さん、と。林さんといふのかね、それとも早川さんかね、原田さんかね？」

「まあ！ あたし、本當に知らないんですもの……」

だが、知らないどころか、實は——その頃、殊に繁繁はアさんは顔を現してゐたのである。現に、その時も、

「みすすさん、ちよつと……」と部屋の外から女中の聲がして、廊下に出て見ると、「お家から……」と傳へられた。それは、いふまでもなく、いつもの家からの後口あぐちのもらひひに外ならなかつた。

で、二十分ばかりして、みすすがその座敷から、ひやかされながら貰つて、行つて見ると、い

つもの奥の四疊半の間に、酒の一口もいけないはアさんが、煙草の烟に埋まつて、入口からすると、向う向きに、急須と、茶碗と、缺餅の皿の載つてゐる臺に片肘をついて坐つてゐた。

「……………」口のうちに、「今晚は、」といつて、向う向きのはアさんにちやんと改まつた客へのやうに手を突いてお辭儀をしてから、彼女は持前のしとやかな歩き付きで、座敷のまん中に入つて行つた。さうして、はアさんが顔を上げて、此方を向いたのをしほに窓の方に寄つて行つて、

「明けませうか、少し？ 大變な烟ですわ、」と言葉よりも主に表情で云つた。

「ああ、」とはアさんが答へた。

が、どこか、近頃のはアさんには、而も近頃になつて一層しげしげ殆ど毎日ほど顔を見せながら、ともすると顔付に浮かぬ隈が現れるのを見逃す譯に行かなかつた。かと思ふと、反對に一寸の間、急に、不自然に晴れ晴れして、お喋りになつて、これまで滅多にないことに、わざとらしいお世辭めいた言葉を云ふやうなことがあつた。と、又、別の時には、これも今迄にないことで、彼女が少し暇どつて行くと、冗談のやうにはあるが嫌味をいつたり、何でもないことに突然ちよつと拗ねて見せたり、かと思ふといきなり歸り支度をしたり、一口にいふと、何となくそはそはと落着がないやうに見えるのである。

「あなた、この頃少し變だわ。ねえ、さうぢあなくつて？ 何だか、かう、女の、ヒステリイ見たいですわ。どうかなすつたの、何か御心配事でもおありに……………」

餘程かう聞いて見たいと思つたことが何度あるか知れなかつた。さうして又、實際幾度唇まで出かかつたか知れなかつた。が、結局、口に出さず仕舞に過ぎた。――

實は――男の方では、或る時はさう尋ねられることを恐れてゐたのであつた。が、また別の時にはその質問を、もどかしいやうな氣持で待ちまうけることもあつた。

彼は、それをきつかけにでもして、彼の胸の屈託を打明ける外には、いくら溜息をついても、いらいらして見せても、それを彼自身の口から發表する勇氣が出なかつたのである。といつて、實際に、さういつて女から尋ねかけられたとしたら、果して彼にそれが出來たかどうか、それは保證の限りではない。その彼の屈託の本體といふのは、實は、彼の家で近頃縁談が持上つてゐたのであつた。

元々、彼の親たちが彼の身持を全く知らなかつた筈はなかつた。それどころか、相手の女が、名前こそ知らないが、柳橋にゐるといふ位のこと、とうの昔からそれとなく知つてゐた。だから、少し手を盡しさへしたなら、彼の行きつけの待合の名も、馴染の妓の名も、彼等は調べよう

と思へば、さして困難な事はなかつたのであつた。ところが、女親の方はさすがに時時そのことを心配して云ひ出すことがないではなかつたが、彼の父親は殆どそんな事を、中學生がベイスボオルに夢中になつてゐる程にも、氣にかけてゐないやうに思はれた。尤も、彼の父親も、若年の頃は云ふ迄もなく、現在でもさういふ社會に、全く縁を絶つてゐなかつたので、世間一般の親たちのやうに、この際息子に早く嫁を押しつけてしまひさへしたら、彼の道樂が、止むかも知れない、或ひはそれでびつたり止むだらう、といふやうな單純な考へで終始してゐるものではなかつた。寧ろ彼は、なアに、結婚さしたところが、一度覺えた道樂の味がそんなに直ぐに忘れられるものかぐらゐに察してさへゐた。が、それにも拘らず、貰ふべき年頃に貰つておくことは、何かの區切りになるものだ、それををさまらないやうな者なら、遅く嫁を貰つたところが矢張りをさまらないだらう、——と斯ういつた風な寛大な氣持をもつてゐたのであつた。

「好きな女は好きな女、上さんは上さん、とこれや別のもんだ」と父親は息子から何の抗議もない先きに先手を打つやうな形で云つた。「これや別のもんだ、というて、わしはお前に別に好きな女があると思つてる譯ではないが、まあ、物の道理をいつて見ただけだよ。……ところで、例の嫁の話ぢやが、あのくらゐの嫁ならまづ不足はないとわしは思ふんぢやが。尤もわしも未だ會

つたことはないんだが、阿母は二三度會つたさうだが、その話では、顔は寫眞よりいいさうだし、女學校も一番で出たんださうだし、……なアに、そんな事は、わしの考へぢやあ、どうだつていいんだがな、——尤も、と云つて、これやわしが惚れたところが何にもならん話ぢやが、まあ、上さんなんてものはな、今も云つた通り、好きとか惚れるとかいふもんぢやあないよ、一口に云ふと、道具のやうなものだからな。道具といつて悪ければ、さうさな、まあ、片腕といふところかね。その代り向うからいつても亭主といふのは片腕だよ、そんなものだよ。まあ、大概のところなら辛抱して貰つといた方がいいと思ふがな……」

彼の父親はかういふ言葉を一度いつた切りで、三日たつても、一週間たつても、それ切りかういふ話は少しもしなかつた。ところが、實は、息子も次第にこの父親の意見に、一日毎に、同感を増して行くのを感じてゐた。無論、初めのうちは、彼は、夢にもそれに耳を傾けなかつたが、どういふ譯か、日が立つほど、この父親の話が彼の心の中で芽を出して來た。彼の考へがぐらつて來た。終には、これではみすすに濟まない、といふ考へで、やつとその動搖する心を鎮めなければならぬやうな心の状態になつて來た。それでゐて、その時分から、彼は今迄よりも一層足しげくみすすの許に通ふやうになつたのである。それは無意識か、半意識かで、やがて彼女に別

れる日が来るかも知れないといふ豫感で、彼女をいとはしく思ふ思ひが一杯になつたからでもあらうか。が、彼女を見ると、彼の考へは忽ち彼女の方に傾いて、この女なしに、この女と別れて、どうして生きて行くことが出来よう、と溜息と共に心の中で叫んだ。が、そのうちに、彼が彼女をいとしく思ふ情の中に、次第に憐憫の情が加はるやうになつて来た。それから又少しづつ、極く少しづつだが、嫌氣が起りかけて来た。その嫌氣が次第に強くなつて来た。すると、彼は、彼女の大人しいことや、しとやかなことさへ、今まで嘗て覺えなかつた感情で、氣になり始めた。こんな優しいものではあるが、もはや一本になつてから三年になる、と數へて見ると、自分が知らなかつた時分に、或ひは自分の知らない時に、たとひ彼女の心からのものではないにせよ、いづどんな男と、何人の男と、どんな交際を結び又結んでゐるかも知れない、といふやうな事さへ思ふやうになつて来た。すると、此頃になつて、例の鼻の下に半巾を當てて、右手を口の端に持つて行く彼女の癖が頻繁になつて来たことやら、それに又これまで餘り氣に止めてゐなかつたその癖そのものが、急に氣味悪く思はれ出して来た。――

が、一方、みすずの心は以前と今と少しも變りはなかつた。唯、男が近頃妙にいらいらしてゐることがあるので、その心持を汲み兼ねて、彼女もそのいらいらした氣持を幾分傳染させられた

やうに見えた。しかし、彼女は、それをも持前の、内氣な女らしい、じつと感情を抑へる氣性から、出来るだけ現さないやうにしてゐた。それでも、彼女は、彼に外に愛するものが出来たのではないか、などと疑つた事は決してなかつた。が、半月ほどの間、急にしげしげと、一日も缺かさずに来てゐた後で、彼が、二日、三日、と次第に顔を見せる度數が遠のいた時には、彼女も、さすがに、もはやといふ心持に惱まされ出した。さうして、それを、いろいろに想像しては見たが、彼に縁談が持上つてゐるなどといふことは、夢にも思はなかつた。が、何となく、譯の分らない不安な氣持に襲はれ出したことは確であつた。併し、彼女の氣質として、いくら心の中で煮え返るやうな思ひをしてゐても、いざ彼の顔を目の前に見ると、何にも云ひ出すことが出来なかつた。それは男の方の氣質もさういふ點では彼女と似てゐるらしかつた。彼も亦何か云ひ出しさうに見えることが度度あつたが、結局、何にも云はなかつた。――

そのうちに、或る日を最後として、彼はばつたり姿を見せなくなつた。――
それから、二週間と立たなかつた。みすずは何にも知らずに、唯自分の胸の中だけで、ああかかうかと煩悶してゐた。その時、彼女にその煩悶の元の消息をもたらしして来たものは、思ひがけない『人の口』であつた。といふのは、或る日、彼女が朋輩の藝妓と一つ座敷をもらつて歸る道

で、彼女が妙に黙つて、連つれにも話しかけないで、俯向き勝かたに歩いてゐると、

「……あんた、ずいぶん残念でせうね？」と、突然、彼女は、並んで歩いてゐる朋輩から話しかけられた。彼女は暗い路地の真中まへで耳まで赤くなつた。

「ええ……？」

が、それは、唯、こんなお座敷でただ顔を合はしてゐるといふに過ぎない朋輩にまで、自分の胸の煩悶が知られてゐるのかといふ驚きと氣恥かしさとからであつた。ところが、更に不意に來た、相手の次ぎの言葉は、百倍する驚きを彼女にもたらした。

「はアさんといふ方——ほんつとに随分な方ね。あんたのやうな人をほつといひて、結婚するなんて、……あたし達だつて、話を聞いただけで口惜しいわ、同情するわ。」

「……………」

みすずは頭の奥の方で、何かアんと音がしたやうな氣がした。その場に、氣が遠くなつて、倒れなかつたのが不思議なくらゐであつた。

彼女は、それから、何處で朋輩と別れたかも覚えてゐなかつた。それでも、彼女は辛抱して、次ぎの座敷をやつと一時間ほど稼いでから、その女中に頼んで、頭痛が激しくて、どうしても

氣分が悪いからといふ理由で、その座敷を開放されると、家に歸つて直ぐに床に這入つた。——

これは餘談ではあるが、多分、その晩のことであつた。どこで、誰が發見したのか、彼女が例の半巾で隠して、口の端に手をやる癖の真相をつかまへたものがあつた。噂の好きな社會のことであるから、それが仲間のものあひだの間に直ぐに廣まつた。それに依ると、果してそれは疳のせゐらしく、右の手を口の端に持つて行くのは、それで、上唇をきゆつきゆつと二三度撮むのださうである。その瞬間の、ひどく眞面目な、緊張した顔付と、持前の目の釣上つてゐると、その半巾の下の仕種とを見てゐると、何ともいへぬ物凄なものだといふことであつた。が、無論、彼女はそんなことを見られたとは知らなかつた。流石のしとやかな彼女も、その晩は餘程取亂してゐたものと見えるのである。——

その當座の彼女の心の苦しみといふものはなかつた。それはいろいろの事情から二倍にも三倍にもされた。何故といつて、その翌日、同じ家の姉藝者から、

「お前さん、あの人が結婚したんだつてね、」と云はれたのが始まりで、殆ど會ふ人會ふ人から悔やみのやうに同じやうなことを云はれたり、云はれなくつても、さうなると人の顔を見ると、どの目付でもがさう云ひかけてゐるやうな氣がするのである。すると、はアさんが、不斷に外の藝

者を決して呼ばなかつたことや、それでゐて二人切りでは毎日ほど會つてゐたことや、さては彼女自身が大人しいことや、はアさんが大人しいことや、何も彼もが、餘り仲がよ過ぎたからだとか、お上品ぶつてゐるからだとか、それ見たことかとか、いい氣味だとか、思はれてゐるやうに邪推されて、胸の煩悶は二倍にも三倍にもなるのである。だが、そんな中で、大人しい中に一面勝氣なところのある性質で、彼女は翌日一日寝たきりで、決して商賣を休む事はしなかつた。

だが、一方、結婚した男の心も、決して平かな筈はなかつた。それは唯そんなにも馴染であつたところの、さてはつきりと言ひ交したことはない迄も、言ひ交した以上に心を通はし、末を契つてゐた女に叛いて、そつと、内所で、親に當てがはれた、見も知らぬ女と結婚したといふ後目たさばかりではなく、又、實際、結婚した當座こそみすすを忘れ勝ではあつたが、一日一日と彼女を思ひ出す度が増して行かねばならなかつた。まつたく、彼等は飽きも飽かれもしない仲であつた。が、又、彼は、別にその貰つた嫁が氣に入つてゐないといふのでもなかつたのだが、日が立つうちに、彼女と彼女とを、心の中で、比較するともなく比較して見ると、彼には、何彼につけて、みすすの方がすぐれてゐるやうに思へてならないのであつた。結婚して、日が立つに従つて、その考へがますます募つて來た。さうして會ひたいといふ思ひと、濟まないといふ思ひとで、彼

は次第に苦しみ始めた。夜、人が寢鎮まつて、寢床の中で考へた時、明日こそは思ひ切つて出かけて行かう、と幾度思つたか知れなかつた。が、翌日の日の光を見ると、彼は彼女が會つてくれるかどうか、彼女のやうな優しいものであるから、よし會つてくれたとしたところが、さて、何と言譯の出來た義理であらう、どうして、せめて結婚する前に、彼女に一言斷りを云つておかなかつたらう、……といつてこのまま——彼の思案は、來る日も來る日も堂々廻りばかりしてゐた。

さうかうするうちに、三ヶ月ばかり立つた或る晩、はアさんは以前行きつけた待合の、今は敷居の高い入口をくぐつた、まるで放蕩息子が久しぶりで親の家の玄關に立つたやうな思ひであつた。彼は、玄關に出て來た顔馴染の女中にまで、目を伏せたまま、濟まなささうに、「今晚は……」それも口の中で云つて、二度ばかり無意味に丁寧に頭を下げた。

それから、みすすが來るのを待つてゐる間——その間、ときどき取成し顔に女中が上つて來て、例の一件については、「お目出度がおありになつたやうに伺ひましたが、わたし共のことですからお喜びに伺ふわけにも参りませんので、つい失禮して居ります」といつた外、なるべくその方の話に觸れないやうにしてゐることも、「まあ、御都合のつくだけは、どうぞ、ときどき顔をお見せ下さいませ」とか、「でも、いろいろこれ迄よりはお忙しうございませう」とかいふ、なるべく

當り觸りのない口上も、さては出来るだけ女中が顔を少なく出すやうに思はれることも、ことごとく何か奥齒に物の挟まつたやうな感じで、彼には腋の下に汗の出るやうな思ひであつた。彼には、さうして待つてゐる一時間が、百年のやうな氣がした。

一方、みすすは、三ヶ月前まではそんなに毎日ほど来た待合ではあるが、さて、はアさんが来なくなつてからも、全く呼ばれなかつたといふ家ではないので、まさか、そこに、三ヶ月前の人
が来てゐようとは、夢にも思つてゐなかつた。

「今晚は、……」と相變らずしとやかな調子で這入つて来て、帳場の入口で長火鉢の向側に坐つてゐるお上に挨拶した。と、

「はアさんよ、はアさんが見えたのよ、」と抑へたやうな聲でお上に云はれて、

「え！」

彼女は喉のつまつたやうな聲で叫んだ。さうして、ちらとお上の顔を見上げて、すぐに俯向いたきり、彼女はしばらく石になつたやうに動かなかつた。「うそ？」とも、「本當？」とも云はなかつた。彼女は咄嗟の間に、それでは、来たのだな、と信じた。お上は、みすすの體が細かく震へてゐるのを見逃さなかつた。

「あたし……あたし……」俯向いたままで、彼女は半分口の中で、當惑したやうな聲で云つた。

「お前さんの方で何にも困ることはないぢやないの。さうともさ。……大威張りで顔を出してやつたらいいぢやないの？」とお上は詰るやうに云つた。

「ええ。……」とは答へたが、後につづく言葉が急に思ひつかかなかつたので、「……でも、少し風を引いて居りますから、」と云つて、彼女はしとやかに鼻をすすつた。實際、少し風氣でもあつたのだつた。

すると、お上は、先程から獨りで飲んでゐたものと見えて、なる程、火鉢の向側に小さな食卓があつて、そこに注ぎさしたままになつてゐた盃をとつて、自分で一杯明けると、

「ぢやあ、一ぱい上げよう、」と云つて、みすすにそれをさした。

「あたし、あの……」

「何が、あの……さ、」とお上は出した盃を引込めないで、「お前さん見たいな人は、こんな時にも飲まなげや飲む時がありやしなないぢやないの。」

で、みすすは受けて、思ひ切つて、なみなみと注がれた盃に口をつけた。が、苦い顔をして、それをちよつと嘗めただけで下に置かうとすると、お上が承知しなかつた。そこへ、傍から女中

までが「まあ、いいぢやないの、今夜は、などと進められて、つづけさまに四五杯ばかり飲まされたので、彼女は、見るうちに顔がほてつて来た。胸がとんとんと動悸し出したのを覺えた。

これは困つた、とは思つた。が、この方が結局、お座敷に顔が出しいとも思つた。さう思ふと、近頃大方忘れるともなく忘れてゐた、男の憎い仕打の思ひ出が急に胸をつくやうに沸きかへつて来た。——どういふ考へで、どんな顔をして、彼は今頃座敷に坐つてゐるだらう、と彼女は思つた。何を云ひに、何をしに、今更……？ 彼女は、そこで、彼に何と云つてやらう、せめて斯ういふ場合の、斯ういふ目に遭つた世間一般の女たちが云ふやうなことは云へないとしても、自分として、自分だけの、出来るだけ、どんな男の胸を突き刺すやうな、痛い言葉を云つてやらう、と考へた。

「さあ、行つといで！」その時お上が突然引立てるやうな、きつとした言葉で、「せめて、いひたいことだけを、うんと云つておやり！」

——彼女はそんな風をしてはアさんの座敷に出るのは初めてであつた。何故なら、彼女は、女中のお高にまるで手を引かれんばかりにして、歩いて行つた。その又座敷といふのが、これまで彼と會ひ馴れた四疊半の部屋とはちがつて、嫌にばツとした、改まつた、八疊の間であること

も、變に彼女の胸に波打させた。お高がその唐紙を開けて、

「お待遠さま、」と中の方に向つて聲をかけ、直ぐみすすに向つて、「さあ、」と馴れない妓をでも突出すやうに云つた。みすすは決心して、先づ型通り座敷の入口のところで手を突いて、

「今晚は……しば……ら……く……」と挨拶した。何か芝居の舞台に出たやうな氣がした。

男も——これまで見馴れた通りに、入口に背を向けてなど坐つてはゐなかつた。彼も亦、花婿のやうに、床の間を背にしてきちんと坐つて、彼女の挨拶に對して丁寧にお辭儀を返した、彼女は、部屋の中に這入つて、後の唐紙を締めると、男から可なり離れたところに、黙つて、俯向いて坐つた。さうして、二人は稍々しばらくの間、無言のうちに、互の呼吸を計り合ふやうにしてゐた。

だが、たうたう男が口を切つた。

「……何とも……何とも濟まない……。」

これが最初の言葉だつた。が、一旦口を切ると、それは、ところどころ、しどろもどろになつたり、言葉と言葉との継ぎ目のための、無意味な長い合の手になつたりはしたものの、——嘗て彼等の短くない交際の間にも、彼はこの時の五分の一も喋つたことはなかつた。彼の口から言葉

が洪水のやうに流れ出した。——自分はしやあしやあして今更お前に合はせられる顔を持たないが、とか、併しお前はよく顔だけでもさうして見せてくれたとか、自分はあの時のことを考へると、魔がさしたとでもいふのか、夢中で、譯分らずに、ふらふらと結婚してしまつたのだとか、自分は一日としてお前のことを忘れた日がないとか、お前さへ許してくれるなら、これから又昔のやうに始終會ひたいとか、お前が自分のために忍んでくれた恥は、それはどんなにしても償へないものではあらうが、しかし、自分としては出来るだけの償ひをしたいつもりだとか、自分は一旦の過ちで結婚したやうなもの、今は心から後悔してゐる、自分はやつぱりお前より外に……。實際、その時の、彼の次第に饒舌になつて逆り出る言葉は、彼等の短くなかつた馴染の年月の間にも、たとひ寝物語の時でさへ、彼の口から一度も洩れたことのなかつたやうな、情熱的な、戀愛的なものであつた。彼のやうな内氣な、大人しい性質のものには、斯ういふ場合でなければ、幾ら心に思つてゐても、こんな言葉は吐けなかつたらうと思ふ程。

しかし、彼女の心は容易に和らがなかつた。彼女は今、自分の膝の前から三尺と離れないところに、一言いつては句切り、又一言いつては息を吐きして、苦しさに話す男の言葉を、嘗てそれを餘り一途に信じ過ぎた返報のやうに、今は一々反感なしには聞けなかつた。で、彼女は徹頭

徹尾石のやうに黙つてゐた。唯、ときどき、俯向いてゐるので、泣いてゐるのではないかと思はれるやうに、靜かに鼻をすする音だけが、部屋の沈黙を破つた。反對に、彼は、彼女が黙つてゐればゐるだけ、ますます雄辯になつた。

彼女は口惜しさで一ぱいだつた。それは、彼にもいろいろと言分はあらうが、だが、親が何といはうとも、親類が何といひ出さうとも、彼の心さへ堅かつたなら、さうだ、彼の決心一つで斯うはならなかつた筈だ。しかし、……かういふ氣の弱い人のことだから、つい何とも斷り兼ねて、本當に魔がさしたとでもいふ風になつて、こんな事になつたのかも知れないが、それにしても……何といつても、今になつてどんな言譯があつたところが、起つたことを起らなかつた昔に返す譯には行かない、——と思ふと、彼女は咽びさうになるほど口惜しい氣がするのだつた。が、その口惜しさをどう現さうにも、彼女はなすところを知らなかつた。不斷のつつましさを悉く抛つて、かういふ場合に人が想像し得るどんな罵倒の言葉を叫んで見たところが、しかし、何の、何の、そんな事ぐらゐでは今の口惜しさの十分の一、百分の一も現せようとは思へなかつた。……

「ね、ね、」彼は云つた。「それや、お前にしては、我慢がならないほど口惜しいだらうが、ちつ

とは僕の方の氣持を察しておくれよ、ね。勘忍しておくれよ。これから又今まで通りここへ來るから、そしたら、元通りに、ね、來てくれるだらう、會つてくれるだらう。……こんな事をいふと、さぞ蟲のいい奴だとお前は思ふかも知れないが、併し、そんな蟲のいいことを厚かましく云ふといふのも、結局僕にはどうしてもお前が忘れられないからなんだ、……僕は……僕は、家内のことなんか何とも思つてやしないんだから……ね、ね、ね？」

「ふん！」

初めて——彼女は答へた。が、その答は喉のどでしたのか、鼻でしたのか、分らなかつた。しかし、それが彼女が彼の長ましい言葉の洪水に對する、唯一の、夢中の、さうして精一ばいの返事であつた。それは眞に迫つてゐた。……

が、どうしたといふのだらう！ 彼女は、この「ふん！」といふ挨拶をするなり、その途端、あわてて、例の半巾を持つてゐた左手を素早く鼻の下に當てた。それと、立上ると同時であつた。さうして誰も嘗て彼女が、そんなに取亂した恰好をしたのを見たことがなかつたらう、と思はれるやうな慌しさで、彼女は兎のやうな早さで男の前から消えて、座敷から駈け出して、二階を下りて、帳場のお上や、女中にさへ挨拶をしたか知らなかつたか、それも彼女自身覺えがなかつ

た。まだ先きのつづきで、長火鉢の前で、ちびりちびりと盃の縁へらを嘗めてゐたお上が、「おや！」と叫んで、「どうしたの？」と腰を浮かした時には、既にみすすの姿は表の間に消えて見えなかつた。

それは、男に呼び止める暇をさへ與へなかつた。取残された彼は、しばらくの間、中腰になつたまま、馬鹿のやうにぼかんとして目を見張つてゐた。何故、彼女がそんなに突然な行動をしたのか、彼にはまる切り判断がつかなかつた。鼻の下に半巾を持つて行くのは、彼女の不思議な癖だ。しかし、それは彼女が彼の前で初めて見せたものではないので、その爲めに立上つて逃げ出したとは思はれなかつた。彼女が口惜しさの思ひでいらしてゐてひどく不機嫌だつた事は確かだつた。が、どんな不機嫌であらうが、どんな口惜しさであらうが、それが、彼女にこんな唐突な行動をさせるとは、彼にはどうしても思はれなかつた、合點がいかなかつた。

尤も、驚いたのは、帳場でも同じことであつた。間もなく、女中のお高が慌しく座敷の中に駈け込んで來て、そこにぼんやりしてゐる彼に向つて、詰るやうな口調で、

「どうなすつたんです？」と聞いた。が、いつまでも氣を抜かれた人のやうに、悄然としてゐる彼に氣がつくと、お高は急に調子を穩かにして、

「どうしたんです、え、はアさん？」と聞き直した。

「さあ……？ どうしたんだか、突然立上つたかと思ふと、鼻の下に半巾を當てて駆け出して行つたんだよ、」と彼は泣き出しさうな聲で云つた。――

さうして、それ以上のことは誰にも分らなかつた。それから、しかしお高が心配して、みすずの家を駆けつけた時は、彼女は、歸つてゐたが、體の具合が悪くて、頭が割れるやうに痛いからと取次の者に傳へさしただけで、どうしても顔を見せなかつた。さうして「いづれ改めてお詫に行くから、お客様の方は宜しいやうにお断りを云つて下さい、」といふ挨拶一點張りであつた。だから、何ともしようがなかつた。――

この時は、みすずは、丸三日床に就いた切りで、大病人のやうに頭を上げなかつた。それでゐて、家の者がどんなに進めても醫者にかからうとはしなかつた。而も、それは、三ヶ月前、彼女がはアさんの結婚の噂を傳へ聞いた時よりも數倍の打撃を受けたもののやうに見えた。――

その翌日も、その翌々日も、多分一週間以上つづけて、はアさんは例の待合に現れて、根氣よく彼女をかけたが、彼女は金輪際顔を出さなかつた。――四日目に床を離れてからは、風呂にも這入り、髪も結つて、もう外の座敷には、今迄とほり出てゐたのであつたが……。

――これは今から最早や十二三年前の話である。だから、當年のみすずは今は三十二三歳である。

さういふと、今でもどこか寂しげな、妙に生真面目な感じが、起居の間にちらちら閃くことがあるが、――見たところ別に際立つて何の變りもない。然しさすがに美しい年増藝者として、東京から五十里ばかり離れた或る田舎町で、四五人の抱妓を置いて、自分自身も未だ出てゐるので、その町では一流と云はれてゐる。――私が彼女を知つたのはその町であつた。――

「さあ、どういふ氣持だつたのか、今でも自分にもよく分らないくらゐですよ、」と彼女は私にその時の話をしていふのに、――

「それは本當に口惜しくて、口惜しくて、精一ぱい、お腹の底から『ふん！』と、云つたといふよりは、出たんですね、自然に……。ところが、今もお話しました通り、風を引いてゐた上に、飲めないお酒を飲んでゐたんでせう。ま、それにしたつて、ねえ、――笑つちやあいけませんよ、實際、笑ひ事どころぢやあなかつたんですもの。その『ふん！』と云つた拍子に、ぷつと鼻提灯が出たんです。……」

そこで彼女は、強ひてのやうに笑つたが、その笑ひ方は何とも云へぬ歪んだ笑ひ方であつた。

「さあ、今になつて見ますと、」と彼女はつづけた。「私だつてをかしいと思ひますけど、その時

「あんなに泡食つて逃げ出しなどしなかつたら、屹度その人とそれから又ぐすぐずに伸直りして、つづいてゐたかも知れませんか。そしたら、私、今頃どうなつてゐましたらう？ 口惜しいのは口惜しかつたとはいふものの、やつぱり、私、そんなに嫌ひぢやなかつたんですもの、——これは失禮。だけど、ねえ、鼻提灯だつて浮か浮か出せないものでせう。……あんなもの一つでわたしのやうな者には、人間一人の浮き沈みから、先きの身の上までに拘つて來るんですもの。……」

は本當に夢中でしたわ、口惜しい思ひも、それでゐてやつぱり懐しい思ひも、そんな事はすつかり消えてしまつて、まあ、謂はば、ただ恥かしいと、いふ氣持だけなんです。——さういふ氣質でしたから、恥かしいといふのは、殺される十倍もつらかつたと見えますね。……どうして半巾を鼻に當てたか、どうして逃げ出したか、まるで覺えてゐません。それも、後になつて考へて見ますと、ああいふ場合のことですから、その場にゐたのはその人だけだつたのでせう。又、その人だつて、咄嗟の間のことだつたんですもの、屹度、そんな私が鼻提灯など出したことには、氣がつかなかつたらうと思ひますわ。それに、私には先きにもお話ししましたやうに、子供の時分からあの癖で、……あんなものは年をとるとだんだん、今はもう大方なほりましたが、さういふ唇を撮む癖があつたでせう、その度びにそれを隠すために、半巾で口の端を抑へる風があつたのですから、その風をしてごまかさうと思へば、ごまかせたんでせうが、……ごまかさなくつたつて、きつと、相手の人はさう思つて濟んだんでせうが。……ねえ、若い時分といふものは、そんな事が死ぬよりも、色戀よりも、何よりも一番極りが悪かつたんですわね。今時の若い人にはそんな馬鹿馬鹿しいことはないかも知れませんが……實際、その時、……」

と彼女は最後に附け足して云ふのに、

日

曜

日

俺ばかりではないだらうが、自分の家に學校行の子供でもない限り、毎日きまつた勤めを持たないものには、日曜日といふものはいつも知らぬ間に素通りしてしまふ。

しかし、俺は近頃ときどき此の日曜日といふ言葉を懐しく思ひ出すことがある。

俺は毎朝大抵七時頃に目を覚ますのであるが、目が覚めると忽ち^たたいの知れないもやもやした不機嫌な氣分に襲はれて、大急ぎで寢床を飛び出し、汽車の時間でもあるやうにせかせか顔を洗ひ、朝飯の出来るまで部屋の中を歩き廻り、その間にその日讀まうと思ふ若干の書物と、原稿紙と、萬年筆との包をこしらへ、それを左手に抱へて勤人のやうに家を出るのが常である。

尤も、俺は會社にも役所にも勤めてゐる譯ではない。家にゐると、いろいろの物音までが氣にかかつて、頭、といふより神經が一刻も休まらないので、五年越し、本郷の或る下宿屋の部屋を借りて、そこへ仕事する爲めに^かつてゐる。その仕事といふのは、小説を書くことであるから、一口に仕事と呼んでは當らない。何故^なといふのに、仕事といへば、一日に六時間か八時間かそれに従事すればよいのだし、また一週間の中には六日間働けばよいといった風なものだからだ。ところで、小説を書くといふ仕事は、難かしくいふと生活することだ。生活するといふことは、生

きてゐる間休みがない。毎朝俺が目を覺ますと忽ちもやもやした不機嫌な氣分に襲はれて、一刻の猶豫もなく何かに急ぎ立てられるやうな氣のするのは、この休みのない仕事(營み)の思ひが俺をさうさせるのに違ひない。俺はそれを『小説の鬼』と名づけてゐる。俺ばかりではない。小説を書く事を仕事にしてゐる人々は、大抵この『小説の鬼』に取憑かれてゐる人々だといつて差支へないだらう。この『小説の鬼』の爲めに、俺たちの頭には、夜も、晝も、日曜日も、祭日もない。かういふ頭を持つて毎日を送つてゐたのでは、たとひ散歩しても、活動を見に行つても、何の休息にもならない。……よし、これからは一つ、俺も人並に日曜日を、——日曜日とは限らない、却つて木曜日とか、金曜日とかいふ、町の騒しくない日の方がいい、俺の安息日を月に三四回こしらへておかうか、と俺は近頃思ひついたことがある。だが、思ひついただけで、例の『小説の鬼』に追はれて、なかなか實行出來ない。さうして、日曜日も、月曜日も、火曜日も、相變らず唯の日として過ぎて行くのである。

だが、俺が毎朝仕事部屋のある下宿へ通ふ道で、上野公園の中を通り抜けて行くと、一週間に一度は間違ひなく「今日は日曜日だぞ」と俺に知らせるものがある。俺の家から公園山下の電車通へ出るには、美術學校と音楽學校の間の道を通つて、圖書館を左に見て曲るのが近道なのであ

る。この圖書館の角を曲つて右へ行くと、美術學校の本館のある邊から動物園にかけて一目に見渡せるのであるが、その道といはず、美術學校を二つに仕切つて、美術館の前を通り、博物館の前から兩大師前に通じてゐる道といひ、何れも皆公園らしい、廣い道だ。それから、以前は、俺たち公園の裏手に住んでゐる者が、徒歩の近道として、動物園の前を通らずに、美術學校の角から精養軒の前を斜めに通つてゐる芝草と、櫻の植はつた低い木柵で仕切られた小路があつたが、今はそれが美術館の爲めになくなつて、その跡の一部に拵へられた子供運動場といひ、そこにもここにも人々が行き交うてゐる日が、「今日は日曜日だぞ」と俺に教へてくれるのである。それと、もう一つ、圖書館の前から博物館の前に行く人々の多い時は、それ等の人々の風俗を見るまでもなく、大師参りの日、即ち二十一日だと分るのである。「二十一日、月末が近いぞ」と氣がつくと、俺は、それ等のぞろぞろ歩くことそれ自身、空氣を吸ふことそれ自身を、楽しんでゐるやうな人々の間を縫ふやうに、何事ぞ、火事場へでも急ぐやうな早さで歩くのである。

そんな廣い道でも、急ぐと人々を右に左に避けなければ思ふやうに進めない。それは人々が日曜日は大抵つながつて横列になつて歩いてゐるからである。子供運動場も満員だし、茶店の床几も賑つてゐるし、動物園の前には十臺以上の自動車が止まつてゐるし、その改札口には入場者が

一列になつて繋がつてゐる。又、四方八方に曲つて通じる道には、子供づれの夫婦、學生、若い男女、兵隊、女學生などが、撤き散らされたやうに三三五五と歩いてゐる。屋臺車のパン屋。音楽學校へ行くらしい陸軍或ひは海軍の軍樂隊が足並そろへて俺とすれ違つて行く。

おお、日曜日の浦安さ！

俺は、動物園の前にさしかかる頃までは、まだ家を出る時の不機嫌がくつついてゐて、ぞろぞろと暢氣さうに歩いてゐる人たちに軽い反感をさへ抱くのだが、歩いて行くうちに次第に日曜日の浦安さに心が平らかなるのを感じる。「この日天氣晴朗にして風なし」と作つた小學校の頃の作文情緒が蘇つて來るのである。――

俺はふと今自分が出て來た俺の家の者たちがどんなに暮してゐるだらうかと考へる。朝早く出て夜遅くみんなが寝てから歸ることが多く、或ひは仕事や氣持の都合ではそのまま二日も三日も歸つて來ない主人の出かけた後の家庭を考へると、かういふ日曜日の朝だけでも一寸ちよつと後戻りして家の中を笑ひ聲で充してやらうかと考へる。しかし又、いつも不機嫌な俺のゐない留守の間が却つて彼等に楽しい生活が始まるのだらうとも考へられる。今、公園に見る日曜日の景色を、多くの人々の家庭に移して想像して見ると、そこでは、『味の素』の廣告繪に見るやうに、毛を分けて髭

を生やした主人を中心に、丸髭に結つたその妻の『お母さん』、白い髭をはやした『お祖父さん』、小つちやい髭を結つた『お祖母さん』、それから男の子と女の子と位の家族が、湯氣の立つてゐるお碗の竝べられた食卓を圍んでゐる、といった風な昔の讀本の挿畫めいた麗かな畫が想像される。尤も、それ等の人物のうち何人か缺けてゐてもかまはない。併し、どこの家でも、毛を分けて髭を生やした『主人』と丸髭に結つた『お母さん』とが缺けてゐる所はない。

だが、俺の家では、大抵俺の出た後で、朝の食事が始まるのが例だ。或る時、俺が不機嫌の餘り無理に癩癩を起して、子供のやうに駄駄をこねながら、その理由を問はれた時、「俺は『小説の鬼』に憑かれてゐるんだ、お前に怒つてゐるんぢやない、」と口から出まかせに叫んだことがある。妻はそのとき以來、俺のことを蔭で『小説の鬼』と綽名あだなにして呼んでゐるらしい。二人とも耳の遠い母も兄も、その時の俺の言葉が聞えなかつた筈だが、後で妻が彼等に報告したに違ひない。彼等はその『鬼』のゐぬ間に、却つて彼等並なみの楽しいほつとした生活をしてゐるだらうとも考へられる。さういへば、俺がゐなくて却つて楽しい生活が始まる俺の家にとつて、その家の生活の圈内から飛び出して、日曜日一つ持たない俺にはどんな生活が残されてゐるだらう？ これは變だぞ、俺には生活がなくて、仕事だけがあるんぢやないかな？……結局、俺は家へ後戻りすること

など、考へるだけで實行したことはない。

それどころか、或る日曜日、その時は日曜日であることは外に出てから知つたのだが、俺は、時時やる何時ものよりひどく機嫌をこじらして、……家を出かけるとき後の戸を荒い音を立てる位のことでは気がすまず、又それほど暴れた時はさすがに後に残された家の者の思惑が痲癢を起しながらも心配で、家を出そびれることがある、俺はさういふ時、子供のやうに疊の上をごろごろ轉がり廻ることなど珍しくない。母が妻に、これは俺が七歳以前によくやつた癖で、その頃の俺は部屋はしの端から端へと轉がつて行つて、行き場がなくなると下女を呼んで隣との境の襖を明けさせて、限りなく鼻の上を轉がり廻つたさうであるが。——今三十歳を過ぎて七歳以前の癖が出たのは驚いたと云つたさうだ。——さういふ大荒れに荒れた日曜日、俺はやつと自分の機嫌も直し、家の者の不安な顔も直つた後で、急に又仕事をしなければならぬ時間を無駄に潰したことを悔いて、半分駈足で家を出かけた。上野の寺の正午の鐘を聞いてから随分たつたと思つた。俺はその日曜日の公園を讚美する氣にもならず、早足で山下の電車通こまこりに出た。そこへ來ると、習慣的に、鈴木時計店の屋根に突出てゐる塔の大時計と自分の時計を合す癖があつた。不斷は大抵九時少し前だが、この不機嫌が大荒れした時はきまつて一時少し前を大時計の針が指してゐる。俺は、

道を歩き歩き、十時、十一、十二、一と指を繰つて、四時間潰した、せめて日曜日だけこの四時間を楽しく家の者と送つて出て來るやうな氣になればなどと思ひながら、いつもの通り本郷三丁目まで乗るのに、乗換が面倒なので、廣小路の停留場まで歩いて行つた、矢張り半分駈足で。

ふと電車通を松坂屋の側へ横切る時、その反對の洋品屋の軒の下に、派手な装をした丸髻の女と、彼女と二尺と離れない位置に、全く風俗の別な身隠しのモダン風の女が立つてゐるのに氣がついた。俺は電車通を横切つて、停留所の電車でんしゃの乗場の方へ行つてから、電車を待つ間、今通りがかりに見た向側の洋品屋の下に並んで立つてゐる二人の女の方を改めて見直して見た。二人ともそんなに接近して立つてゐるに拘らず、明らかに連つではならしい。が、二人ともどこか不調和に派手な装をしてゐること、それぞれ自分の好みのシヨオルで、口から鼻まで蔽つて、當然彼女等の反對の側の電車でんしゃの乗場の方に刻集つて來る人人が、電車でんしゃの來ない退屈のぎに彼女等の方へ視線を集めてゐることを感じてゐない筈はないのだが、そんな事には一向無關心な、ひどく自信のあるらしい態度で突立つてゐることは似てゐた。が、彼女等の立つてゐる位置は電車を待つ場所ではない。女たちのことだから、ちやうど化粧品屋の窓の前に立つてゐるのだから、時時その窓の方を見てもよささうに思へるのであるが、決して脇目をふらないで、それどころか、互

に隣に立つてゐるもの同士をも全く無視した形で、而も二人とも同じ方角に目をそそいでゐるやうに見えるのである。――

電車がなかなか来ないにつけて、俺は次第に彼女等の存在が氣になつて來た。二人とも顔を半分以上隠してゐるので、美人のやうに見えるが、それほど美人ではない。それに先きに述べたごとく、その装がどこか借物の装のやうに見える。丸髻も耳隠しも、今日普通の存在であるに拘らず、その女たちに限つて、妙に目につくのである。それは目につく場所に竝んで立つてゐるからといふ理由ばかりではない。ふと、俺は彼女等の方を盗み見してゐるうちに、丸髻の女が咳をした拍子に、口と鼻を蔽つてゐるシヨオルを顔から放したのを見た時、おや一度どこか見たことのある女だなどいふ記憶が俺の頭の奥で出した。と、それと殆ど同時に、その隣に立つてゐる女も一度や二度、どこか、電車の中か、停留所のやうな所で見たことがある記憶がちらとした。

そのうちに、やつと俺の乗るべき電車が來た。俺は直ぐ下りるので、人々の成るべく後から乗つた。するとまた偶然俺の立つてゐる窓の外に、先きの二人の女が眞正面に眺められた。二人とも先きと同じ位置に立ち、相變らず鼻と口を押へてゐるシヨオルの上に、二つの目を光らしてゐた。その時、初めて、俺はその二つの目が何かもどかしさうに熱心に探してゐるらしいの氣がついた。

二人とも、互に身體がくつつく程、近くに立つてゐながら、つまり自分自身の營みに熱中してゐる餘り、他をかへり見る餘裕さへ持たないらしいのだ。どうして、その瞬間まで、俺は彼女等のシヨオルの上に二つの目が探照燈のやうに光つてゐるのに氣がつかかなかつたのだらう。俺は彼女等に見覚えがある筈だ。彼女等は『日曜日の女』だつたのだ。――

俺は、動き出した電車が廣小路の交叉點を横切つたところで、今、二人の女を見た同じ窓から、町角の赤い電柱に掛つてゐる電氣時計に目を止めた。一時十分過ぎだ。

日曜日、午後一時、松坂屋の前、電車の交叉點。――俺は彼女等に見覚えがある筈だ。俺は、ときどき氣がつかずゐる日曜日の同じ時間に、ここを通つたに違ひない。さうして彼女等と同じ場所に見たのに違ひないのだ。それが、その日に限つて乗換の電車を待つ時間が少し長過ぎたので、彼女等の存在を無意識に注意したのであらう。俺は走つてゐる電車の中で、假りにも『小説の鬼』に憑かれてゐると考へてゐる自分の迂濶さが可笑しくなつた。それにしても、互に同じ目的を持つてゐるのは分る筈だが、それを三尺と離れない場所に竝んで、恬然として情人を待つ目を光らしてゐる女どもの圖圖しさ！これは男に出來ないことだ。これが若し女でなく、男が二人同じ位置に立つたとしたなら、何方か一人、互の目的が同じだと早く察した方が、町角は四

つある譚だから、遠慮して他の町角に去るだらう。——そんなことを考へてゐるうちに、俺の電車は本郷三丁目に着いた。

何處も彼處も日曜日、公園にも、町にも、交叉點にも。さうして、人々はみな彼自身の生活に熱中してゐる。俺は、日の射さない、日曜日のない、自分の仕事部屋の机の前に坐りながら、小説を書くといふことは、生活する事であるなどといふのは、何かの誤算ではないかと考へた。——『小説の鬼』などは、所謂鬼面人を驚かす言葉に過ぎないかも知れない。

八木彌次郎の死

私の友達の八木彌次郎が阿米利加に行つたのは今から十年前のことであつた。——その頃、私たちは互ひに未だ二十歳を多く出ない學生であつた。私は文學をやる希望だつたところへ、ちやうど遠縁に當る親類の者に文藝批評や翻譯などをしてゐる人間があつたので、その男の二階に下宿してゐたのであるが、それは芝の南佐久間町であつた。その批評家は貧乏でけちで、おまけに細君の方が六七歳も年上で、彼女が又けちでヒステリでお天氣者だつたので、私はいつか賄を辭退して間代だけ拂つて自炊する事になつたのだが、するとその細君がやれ臺所がよごれて困るとか、主人は夜遅くて朝遅い商賣だから、十時前に臺所でごたごたしてくれと神經衰弱になるとか、それでゐて彼女は私が買つてある米などを無斷で使つて何の返禮もしないし、ほとほと困つた末に、私は近所の飯屋に朝晝晩の三度づつ、十錢か十二錢づつ握つて、食事に出かけることにしたのであつた。その飯屋で、そこへやつぱり毎日出かけて來た八木彌次郎と私は初めて知り合ひになつたのである。

私の學校が牛込にあつたのにそんな遠くの芝にゐたやうに、彼は學校が下谷の方にあつたのにやつぱりそんなに離れたところの、どうして芝にゐたかといふ譯は、私は彼と友達になつた三日

目に知ることが出来た。尤も、それも實に簡単な理由からであつた、といふのは、彼が初め上京して来て、研究所に二三月通つて、官立美術學校に入學して、それからずつと一年餘りつづけ下宿してゐた家が、その一ヶ月程前に芝に引越したので、それに附いて来たといふだけのことであつた。普通の下宿屋なのか、素人下宿なのか、と私が聞くと、素人下宿で、賄も一緒にして貰つてゐるのだが、この半月ほど國の親戚に不幸が出来て、家の者がすっかりその方に行つてゐるので、彼は、自炊するのは時間の點からも金の上からも不經濟だから、當分ここへ飯を食ひに来るのだ、と答へた。なるほど、氣がつくと、彼はいつの時でも豆腐の煮つけとおしんこで飯を食つてゐた。

彼のやうな人間と私のやうな男とが、どうしてその後そんなに親しくなつたかといふことは、神様でなければ答へられないことである。便宜上、私のことから云ふと、田舎にゐた時あんなに憧れてゐた文學者といふもの、大學の文科といふものに、私は汽車の窓から初めて品川のお臺場を見た日から、一と月と立たないうちにすっかり失望してしまつた。牛込の大學の文科の教室で田舎にゐた時分には神様の次席位に崇拜してゐた文學の大家が、何と中學校の教員と同じ洋服を着て、やつぱり中學校でのやうに出席簿を呼んで、ときどき「もつと大きな聲で、返事をし給へ

！」と叱つた、すると又生徒の中でも中學生のやうにわざと「はアい！」と大聲で返事をして、そこで教師と生徒との間に子供のやうな喧嘩が始まつたり、さて愈よ待ちまうけた文學に就いての大講義が始まるかと思ふと、そこでも亦中學校と同じやうに英語の輪講が始まるのだつた。「何々君、その次ぎをやつて見給へ、」とその文壇の大家が云ふのだ。「さらへて來ませんでした。」どうしてさらへて來なかつた？」愚劣、愚劣、カアライルもエマソンも泣くに違ひないのである。だから、私は、田舎の親父の手前だけ、學校に籍は残しておいたが、その教室には滅多に出ないことに極めたのである。さうして、又宿の亭主の、併し世間では一廉の文學者である、批評家氏の有様はどうだ？ 客のない時は終始ヒステリの細君に苛められて、貧乏であることを責められて、一週間に一度は必ず眼鏡を叩き潰されてゐる始末だ。だから、彼はいつでも鐵縁の眼鏡をかけてゐた。すると、そこへ始終同じ文學者仲間の友達が遊びに来るのだ。無論それ等の文學者も私が田舎にゐた時分は多少ともそれぞれ尊敬した名前の持主なのである。それが或る時間聞いてゐると斯うだ。「この月は君が月評するさうだね、よろしく頼むよ、實際今の文壇に君程の批評家がもう二三人ゐたらねえ。實際ほかに一人として碌な批評家がゐないぢやないか？」ところが、それに對する主人の態度はどうだといふのに、同じ屋根の下に住んでゐるので、見るともなしに見